



あきたの 文芸第50集

五〇年の歴史を重ねて、次代の五〇年を歩み始める。

「あきたの文芸」

第五十集



あきたの文芸 第50集 目次

●小説・評論

奨励賞

誰そ彼・明か時

藤原 涼

入選

三浦 信

グリーン賞

加藤 夏実

●詩

最優秀賞

記憶

堀内 和佐

奨励賞

物言わぬ花

渡辺 正子

奨励賞

ふりしきる ゆきが

浅倉 紀男

奨励賞

八月が遺した

加藤 舞雪

入選

佐藤 清助

小林 康子

菜原 俊輝

桐越 佑夏

浅野 雛

グリーン賞

高橋 楓佳

●短歌

最優秀賞

濁流

大山 文穂

奨励賞

花梨酒

五十嵐 勝子

奨励賞

晩年 それぞれ

小林 瞭悦

奨励賞

家守るかたち

佐々木 ヨリ子

入選

熊谷 すが子

沢田 欣之

渡部 栄子

三浦 善隆

遠藤 恵美子

長尾 洋子

阿部 良子

石井 美智子

●俳句

最優秀賞	奨励賞	奨励賞	奨励賞	入選
------	-----	-----	-----	----

グリーン賞

冬の海 佐々木 豊
 縄文の賦 和田 仁
 太平洋戦争 種村 聖巴子
 花火 工藤 五十六
 堀川 貞子 佐々木 成
 齊藤 千哲 石田 幸栄
 佐藤 豊 岩谷 塵外
 加藤 一弥 田中 翠
 山名 熾火

宮本 秀峰
 川尻 弘子
 田口 穂心

●川柳

奨励賞	奨励賞	奨励賞	入選
-----	-----	-----	----

たんぽぽ讃歌 小畑 寒文
 がっこちゃこ 石井 トモ子
 やさしい距離 佐藤 啓子
 石田 幸栄 谷口 心平
 池田 郷太郎 齊藤 一輪
 菅原 浩洋

●エッセイ

最優秀賞	奨励賞	奨励賞	奨励賞	入選
------	-----	-----	-----	----

おじゃれこ 横山 章子
 音楽の力 佐藤 清助
 湯治の道 坂本 愛子
 観音様を描く少女 春野 昌和
 鈴木 護

●最優秀賞受賞のことば

.....72

●選評

.....74

小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ
加賀谷 真澄	寺田 和子	加藤 トシ子	岡部 いさむ	荒川 祥一郎	佐々木 義幸
安藤 巳智子	前田 勉	佐々木 勉	森田 千枝子	藤田 咲子	羽田 朝子
六郷 博志	大八木 敦彦	加藤 隆枝	熊谷 尚	小松 隆義	野口 千恵子

●あきた県民文化芸術祭2017「あきたの文芸」応募状況

●あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名

小說・評論

小説・評論

奨励賞 誰そ彼・明か時

小坂町 藤原 涼

誰そ彼

商店街のアーケードの中に、
その時計店はありました。

夕暮れ時、

街のイルミネーションが

明るさを増してゆく頃、

そのお店も

表に出した小さな看板に

明かりを灯します。

大きな買い物袋を抱えた主婦や

帰宅途中の学生が

徒歩で自転車で

足早に行き交っておりですが、

時計店はただひっそりと

そこにたたずんでいるのです。

おばあさんは

ようやくそのお店を見つけて、
ほっと胸をなでおろしました。

通りに面したショーウィンドーは

時計でぎっしり埋め尽くされ、

中がほの暗いためか、

向こう側の様子を

うかがい知ることはできません。

おそろおそろガラスの扉を押すと、

ドアベルが涼しげに鳴りました。

「いらっしやいませ」

レジの向こう側には青年がいました。

壁は天井近くまで

時計で埋め尽くされており、

年代物の掛け時計や置時計が

にび色の光を放っています。

でもレジ近くのガラスケースの中は

びかびかの万年筆や流行の腕時計が

きれいに並べられていて、

お店の中は思ったよりも

明るい感じなのでした。

「この時計の修理を

お願いしたいのですが・・・」

おばあさんは

ハンカチに包まれた腕時計を

大事そうに取り出しました。

黒い革ベルトは新しいもののようですが、

文字盤はかなり古めかし、

二本の針は全く動く気配がありません。

「どのお店でも

もう部品がないから直せない、と

言われてしまつて・・・」

あちこち巡り歩いた末、

わらにもすがる思いで

おばあさんはここにやってきたのです。

青年は渡された古い腕時計を

じっと見つめていましたが、

やがてにっこり笑いかけました。

「大丈夫。うちで直せない

時計はないよ、おばあちゃん」

おばあさんは不思議そうに

青年を見上げました。

明るい色の髪をうしろで束ね、

モノトーンの服を着崩した青年が

古いものにそぐわないようにも

思えたからです。

とまどう様子のおばあさんに、

青年はいたずらっぽくさやきました。

「うちのじいちゃんは、

部品から時計を作る職人だから。
同業者からも

一目置かれていた名人なんだ」

お店のさらに奥に、

おじいさんの作業場がありました。

引き出しの多い収納棚に埋もれるように

木製の机が置かれていて、

そこがおじいさんの席でした。

「ああ、これは・・・」

おじいさんは、青年から受け取った時計を

懐かしそうに眺めました。

おじいさんはいつでも、一目見ただけで

その時計がどんなものか

たちどころに当ててしまうのです。

「海軍さんの

時計を見るのは久しぶりだよ。

ほら、文字盤に

碇のマークが入っているだろう」

青年がのぞき込むと、

確かにその通りなものでした。

「海軍さんには、

遺品を持って帰る者がいない。

艦船が沈むときは、全てが一緒だ。

遺髪や遺品すらない

海軍さんの葬式がよくあったものさ。

でもこの時計は・・・

どういう事情かは分からないが、

誰かの手元に残って、

ずっと大事にされてきたんだな」

おばあさんが再び時計店を訪れると、

あの青年が

レジの向こう側で待っていました。

「お待ちせ致しました。

どうぞ、ご確認下さい」

差し出された腕時計は、

カチ、カチと規則的な音を刻んでいます。

おばあさんが深々と頭を下げると

青年はいつかのように

にっこりと笑い、それを制しました。

「針を動かす

歯車の歯が欠けていたんです」

それをついだという青年の説明に、

おばあさんはびっくりしてしまいました。

手の中におさまってしまっ

腕時計の歯車は、

どれほど小さいものでしょう。

ましてその歯をつぐというのですから、

職人さんの腕はすごいものだ、と

おばあさんは思いました。

おばあさんがお店を出てから、

青年は時計と一緒に預かったハンカチが

そのままであったことを思い出しました。

慌てて追いかけますと、

おばあさんはアーケードの出口で

タクシーをつかまえたところでした。

走ってきた青年に会釈をして

乗り込もうとなさいましたので、

青年は声をかけようと

大きく息を吸い込みました。

その時、青年は

おばあさんと一緒に

タクシーに乗りうとしている人に

気がつきました。

学生服のように見えたが、

それが古い映画で見たことのある

海軍の軍服だと分かって、

青年は思わず立ち止まりました。

その人もまた、青年でありました。

その人がこちらを向くと、

ふたりの視線が

かちり、と合いました。

軍服姿の青年は、

ゆっくりと敬礼をしました。

白い手袋が、目にまぶしく映ります。
やがて

その人は、

敬礼をしたまま

真っ白なひげをたくわえた

老人になったのです。

青年が呆然と立ちすくんでいると、

老人は晴れやかに笑って

おばあさんと一緒に

タクシーに乗り込みました。

車の中から

もう一度会釈をした

おばあさんに乗せて、

タクシーは走り去ってゆきました。

青年はハンカチを

渡しそびれてしまいました。

夕暮れ時、

街のイルミネーションが

明るさを増してゆく頃、

そのお店も

表に出した小さな看板に

明かりを灯します。

レジの向こう側には青年がおります。

その胸ポケットには、

あのおばあさんのハンカチが

そっとしのばせてあります。

商店街のアーケードの中、

大きな買い物袋を抱えた主婦や

帰宅途中の学生が

徒歩で自転車で

足早に行き交っておりますが、

時計店はただひっそりと

そこにたたずんでいるのです。

あつき 明か時

朝日はすじ雲を橙色に照らし、

夜の名残は山の端に去りゆきつつあります。

街の喧噪はまだ眠りについており、

朝焼けの空気は

あくまでも清冽なものでした。

その初老の紳士は、

川辺の土手を散策するのが

朝の日課でした。

白い息をはずませたランナーや

飼い犬を連れた顔なじみと

あいさつを交わしながら、

そろそろ帰宅しようかと

時刻を確かめると、

腕時計がいつの間にか止まっていました。

紳士はふと、近くの商店街に

朝早くから開いている

時計店があったのを思い出し、

立ち寄ってみることにしました。

商店街のアーケードの中に、

その時計店はありました。

シャッターの列は

そこだけがぼっかり開いていて、

ショーウィンドウの向こう側からは

やわらかな明かりがもれています。

ガラスの扉を押すと、

ドアベルが涼しげに鳴りました。

「いらっしゃいませ」

思いがけず若い声に迎えられて、

紳士はおやと思いました。

明るい色の髪をうしろで束ね、

体型びったりのTシャツとジーンズに

身を包んだ青年は、

箒を手にして

床の掃除をしているところでした。

「まだ準備中だったかな。」

早い時間にすまないね。

電池切れだと思うんだが、

見てもらえるかい」

「かしこまりました。」

少々お待ち下さい」

青年は腕時計を受け取ると、

ぱたぱたと店の奥へ入ってゆきました。

店内を見回すと、

壁も棚の中も古めかしい時計で

ぎっしり埋め尽くされ、

心地よい針の音が

重なり合って聞こえてきます。

普段はついではないので

ここを訪れるのは

ずいぶん久しぶりでしたが、

紳士は古い物を大事にする方でしたので、

時計店の変わらない佇まいを

うれしく思いました。

青年はすぐに戻ってきました。

やはり電池が切れていたのので

交換したとのことでした。

用事はこれで済みましたが、

なんとなく立ち去りがたく

思いましたので、

「店の中を見せてもらってもいいかな。」

この品揃えは

なかなか興味深いものがあるよ」

と聞いてみると、

青年は明るい笑顔で答えました。

「ぜひどうぞ。」

今、コーヒーをお持ちします」

先ほどから、店内は

コーヒーの香ばしい匂いで

満たされていたのでした。

「ご主人はご健在かな。」

以前、ここで購入した

改築祝いのアンティーク時計は、

友人がとても喜んでくれたよ」

「ありがとうございます。」

変わらず作業をしております。

お話を聞けば、

祖父も喜ぶと思います」

言われてみると、

コーヒーを運んできた青年の横顔に、

店主の面影が見受けられる気がしました。

「この店に若い人がいるのも、納得したよ」

「ここだけの話、就職に失敗しまして」

青年はいたずらっぽくささやきました。

「道楽息子に養えん、と

家を追い出されたんです。

それで、孫に甘いじいちゃんのところ

転がり込んだワケでして」

紳士は一瞬きょとん、として

それから大声で笑い出しました。

あっけらかんとした青年のことを、

好ましく思ったのです。

「古いものに囲まれて

過ごすのがお好きなんですね。」

その古い万年筆は、思い出の品ですか」

「ああ、これは・・・」

紳士は、背広の胸ポケットに差した

万年筆をとり出し、

懐かしそうに眺めました。

「若い頃、父から贈られたものだが、

ペン先を割ってしまってたね。」

使えなくなっても

お守り代わりに持っているんだよ」

見事な象嵌細工がほどこされた胴軸は

使い込まれて、落ち着きのある

深い光をはなっています。

でも、そのペン先は大きく欠けていて、もう直る見込みはないように思われました。

「家内よりも

長いつきあいの万年筆だから、なかなか手放せなくてね」

紳士は笑いながら、

数年前に亡くなったという

父親の思い出話をしました。

青年は、ペン先を見つめながら

じっと話を聞いていましたが、

「よろしければこの万年筆、

お預かりしてもいいですか」

と尋ねたので、

紳士は思わず顔を上げました。

「直るのかい？」

返ってきたのは、穏やかな笑顔でした。

再び紳士が時計店を訪れると、

青年がレジの向こう側で待っていました。

「お待たせ致しました。

どうぞ、ご確認下さい」

おそろのおそろのキャップをはずすと、

そこには

美しく輝くペン先がありました。

継ぎ目はどこにも見当たらず、

何事もなかったかのように

光るペン先を見て、

紳士は驚きました。

「試し書きなさいますか」

差し出された白い紙を前に

柄を握ると、

再び万年筆を使える喜びが

わき上がってくるのでした。

さらさらと万年筆を走らせると、

懐かしい感触が手のひらに伝わります。

やがて、

あることに気がついた

紳士の指先がふるえました。

そのペン先は

贈られた当初の、

おろしたてのものではなく、

何十年と書きなじんだ、こわれる直前の

感触そのままでったのです。

残された部分の具合を見れば、

どこに力が入るのが分かるのだと

説明をされても、

信じられない思いでした。

「・・・君は、この技術を

受け継ぐ気はないのかい」

紳士はようやく、

呻くように息を吐き出しました。

青年は、受け取った万年筆を

新しくあつらえたビロードの箱の中に

そっと収めました。

「私がこの店を

手伝うようになったのは

ごく最近ですが、思いのほか

古いものを直してほしいという依頼が

あることを知りました。

新しいものをおすすめても、

どうしてもこれが必要だからと

大切な思い出の品を

託してゆく方々がいらっしやいます。

私にできるのは、

祖父が存分に腕をふるえるように

作業の手伝いをするだけです。

そして、

そんなお客さまのために

いつでもお店を開けて待っていたい。

そう思っているだけなんです」

あくる日、紳士は再び

時計店を訪れました。

「今日は、贈り物の万年筆を
探しに来たんだが」

紳士がそう言うと、

青年は承知したようにうなずきました。

「アンティークもののお見立てでしたら、

いま祖父を呼んで参ります」

奥に行きかけたところを

紳士が慌てて呼び止めました。

「いや、君に選んでもらいたいんだ」

立ち止まった青年が、

驚いた表情でこちらを振り向きました。

「孫の入学祝いなんだ。

君の方が、好みが近いかと思ってね」

紳士はあさつてを向いて、

その視線をはずすのでした。

「それでしたら、喜んで」

青年は、

はじけるような笑顔で答えました。

この青年ならば、

いつか彼の祖父のような

時計職人になれるかもしれない。

それには、どれだけの歳月が必要だろうか。

そうなった時、自分はもう

この店を訪れることが

できないかもしれないけれど、
それでもその時を

幸せな気持ちで待ち続けたいと

紳士は思うのでした。

それが紳士の、
朝の日課なのです。

朝日はすじ雲を橙色に照らし、

夜の名残は山の端に去りゆきつつあります。

初老の紳士は、朝焼けのなか

清冽な空気を胸の奥に吸い込んで、

川辺の土手を散策します。

白い息をはずませたランナーや

飼い犬を連れた顔なじみと

あいさつを交わして、

近くの商店街にある

時計店に向かうのです。

時計店では、あの青年が

朝の支度をしながら

紳士の到着を待っています。

古い時計に囲まれた店内は、

コーヒーの香ばしい匂いに満ちています。

紳士は、青年が入れてくれた

コーヒーを味わいながら、

しばしの間

おしゃべりを楽しむのでした。

螢夏 けいか

由利本莊市三浦信

静まり返った宵闇の中、門灯だけが訪問客を温かく迎えたがっている。昼間の喧騒を吸収していくかのように暗くなっていく様を、僕は窓越しに眺めていた。子ども達の騒ぎ声や田んぼから帰るトラクターの機械音を想像していると、太陽の高度や日の出、日の入りの時間まで考えが及び、小学生の時に戻ったかのようにだった。いつ植樹されたのか分からないほど大きな松は、空の色と同じく、朱色へ様変わりし、今はすっかり黒に染まっていた。

毎日が単純作業の繰り返しで、刺激もなく、レールの上に乗って、動かされていた。それが別に嫌になったわけではないが、大人とはこういうものかと一種の諦めに近いものが芽生えてきていることは確かだった。『楽しみがない』といえばそれまでになるが、生きがいみたいなものを求めているのかもしれない。だからといって、面倒くさいことに関わりたくもなかった。趣味がないわけでもなかったが、打ち込める何

かは持ち合わせていなかった。そう僕は、糸を張り巡らせ、獲物が引っかかるのを待っている蜘蛛のようだった。

テレビでは、夕方のニュースが流れている。

僕はそれを無感情のまま眺めていた。着飾った女子アナウンサーにも天気予報にも興味はなかった。昔と比べて薄くなったテレビ自体の方が、変化していて興味深かった。

兄貴、帰ってたの？」

弟の裕は、ボソツと言い残し、そそくさと自分の部屋に入った。その一言には、興味は含まれていないように感じられた。

裕は教師をしていた。昔からなりたいたいという夢を持っていて、叶えた形だ。そんな弟を羨ましいと思ったことはあるが、毎日が多忙で休みがほとんどない状態を見てみると気の毒だった。いくら憧れた職業と言っても、実際やってみると、思っていたものと違うなんてよくあることだ。しかし、弱音を吐かず踏ん張っている姿は、教師に相応しいように思え、頼もしくも感じていた。彼から学んでいる生徒は、さそがし頼りがいがあると思っているだろう。

逆に、僕にはなりたいたいものなどなく、ただ他人任せの道を歩いてきて今に至っている。浮き

沈みもなくいいじゃないかと言う人もいるが、おもしろみの欠片もなかった。人と違うことをしてみたいなという願望を抱いておきながら、できない自分がいた。

背伸びをして、ソファに横になる。夕ご飯を作る音がキッチンからし始めると大きく息を吸い込み、何のメニューか当てる。心の中には虚しさだけが立ち込めた。

「ピンポン、ピンポン」

テレビ音を上書きするように呼鈴が鳴った。
「はい」

誰も出ないので、僕が玄関まで行くと境さんが笑顔で立っていた。

境さんは、十歳ほど年上の隣人だった。

「和也、忙しいところ悪いな。ちょっといいか？」

彼は、紙を何枚か持っていた。

「はい、いいですけど。どうぞ」

僕は中へ引き、彼をソファに座らせた。たまに会うと話をするが、自宅まで来るのは初めてだった。

僕はコーヒーを入れて、彼に渡しながら言った。

「で、どうしたんですか？」

黙ったまま彼は出されたコーヒーを飲み、紙

を僕に差し出した。

『消防団について』と書かれたものだった。

「消防団？もしかして、俺を誘いに？」

彼は微笑みながら頷いた。その微笑みには怖
いぐらいの本気が伺えた。

「まだ早くないですか？近所にもまだ年上が入っ
てない人いますし」

僕は抵抗した。消防団といえば、緊急的に招
集されたり飲酒の機会が多い面倒なイメージが
あったからだ。

「和也の言うとおりなんだけどさ。入らないん
だよ。断られ続けたから今ここにいます」

コーヒを一気に飲み干して言った。相当喉
が渇いていたのか、飲んだ後でホッとした表情
をしていた。

僕は悩んでいた。これまでの自分が歩いてき
た道を考えていたからだ。

何か変えないといけない。そう思っていた時
にこの話がきたことは、試されていると思しか思
えなかった。

決断を先延ばしにしても境さんが困るだろう
し、僕も迷いたくなかった。彼がここに来るま
での間のことを考えると、断ることが申し訳な
かった。

「境さん、やります」

僕は、無意識にそう答えていた。

いつかは入らなくてはいけないという覚悟は
どこかにあった。それがいつ来るかなんて想像
すらしたことがなかった。今、目の前に突きつ
けられた現実を受けとめた自分自身に一番びっ
くりしていた。

「ほんととか？」

彼は両手をテーブルにつきながら前のめりに
なって、僕に詰め寄った。

ガラス張りのテーブルは大きな音をたてて軋
んだ。割れるかと思ったほどだったが、僕の内
側からも同じような音が響いていた。

「はい。で、何をすればいいんですか？」

僕は、不安を抱いていた中で冷静さを装いな
がら聞いた。

今日が入る意思があるかどうかの確認だけだっ
たようで、彼は追ってメールするだけ告げた。
彼は、一人急に辞めざるを得なくなり欠員が
出たのだと話しながら、僕の肩を力強く叩いた。
高校の時に先生から叩かれた肩の痛みを思い出
した。

彼が帰った後、僕は渡された紙を何度も読み
返しながら、出来上がりそうな夕ご飯を待って

いた。

翌朝は特別な思いで迎えた。

初登校の朝のような、遠足の日の朝のような、
期待と不安が入り混じっていた。

自分自身に発破をかける思いでいた。

会社に行く車の中で聴くビートルズは、耳を
通り過ぎ、開いたカーウインドから出て行った。
「ブラックバード フライ、ブラックバード フ
ライ……」

会社に着いても、自分の気持ちは平常心を上
回っていた。

周りからは浮ついているのかと思われている
かもしれないが、目標みたいなものを掴みかけ
ている状態だと自分では分かっていた。

ギターのFコードを初めて弾いた時のようなこ
の気持ちを大切にしていた。

仕事がある程度片付くと、早めに帰宅した。
帰宅してから、消防自動車を見に行きたかった
からだ。小型ポンプを積んだ赤い車体には、子
どもの頃から憧れがあった。

その感覚が、僕を特別な思いにしていたのか
もしれない。

心の奥底の記憶が内側から揺さぶられ、冬の
眠りから覚めたシマリスのように、目の前の現

実に期待を抱いていると気が付いた。

夕方と夜の間は、蛙の鳴き声が響き渡っていた。消防小屋の灯りが、モノクロになった背景に一際赤い色を放つ。そこに境さんは腕組みをして立っていた。

「急に小屋の中を見せてくれって、どうしたんだ？」

彼は不思議そうに尋ねた。ジャージ姿でサンダルという出で立ちだった。

「特に何ってわけでもないんです」

僕は呟いた。夏の気配からかき消されてもおかしくないぐらい小さい声だった。

彼は、僕を数秒間凝視した後で、クリーム色のシャッターを上げてくれた。そこには、昔見た消防車が窮屈そうに収められていた。ボディの赤は暗い中でも分かるぐらいで、後ろの幌にはたくさんの道具が積まれていた。小屋の中には他にもホースや銀色の防火服、土のう袋などが置かれていた。

「この道具たちには一つひとつ意味がある」

当たり前のように深い一言を境さんが呟いた。

油の臭いが鼻につく。埃が混じった農機具小屋を思い出した。

「火を消すだけじゃねえんだぞ。うちの仕事。」

洪水になったら水防団で川に行かなきゃならないし、台風が来たら巡回だってしなきゃならないんだ」

彼は小上がりに座り、缶コーヒーを僕に放り投げた。季節に似合わない温いコーヒーが喉を通り過ぎると、苦味と安心感を残した。

「忙しいところ、ありがとうございました」

「もういいのか？道具の説明しようか？」

彼は、僕がこうして見に来たことを疎ましく思っていたわけではなく、むしろ嬉しいのだと分かった。

「いえ、それはまた後日に。コーヒーごちそう様でした」

僕が帰ろうとシャッターの下をぐぐり抜けかけた時、引き止める声があった。

「月一回第四日曜日に訓練があるから、その時に団員には和也のことを紹介するよ」

彼はカレンダーを見ながら言った。

僕は自分でもびっくりするぐらい大きな声をしし答えた。

「はい」

鳴いていた蛙も黙りこくるぐらい響いた。夜の空気がひっそりと近付いては耳打ちをする。

「本当に大丈夫かい？」僕は、その空気を胸いっ

ぱい吸い込んだ。

緊張で目が覚める。とうとう寝た時間さえ分らないし寝ていないかもしれない。時計は朝の三時を差している。

五月の第四日曜日の朝。今日まで何回か境さんからメールが送られてきていた。

それは、作業服や靴、帽子のサイズ、一年間の大体の行事や訓練、団員の名前など、返信がいらぬ通知のような形式で送信されていた。

今日は、朝七時に消防小屋の前に集合と聞いていた。まだ時間があつたので、ベッドの中にもう一度潜り込んだ。まだ、空は白んできていない。一回起きたという安心感からか、急に喉が重くなってきた。

今日は何を訓練するんだろう。僕は、自分の中の知識をパッチワークのように貼り合わせて想像してみるが、全く思い浮かばなかった。そのうち記憶が途切れた。

気が付くと、青い空の中、太陽は輝いていた。そのまま寝ついてしまったのだ。僕は急いで時計を確認すると、八時を回っていた。

「うわっ、やばい」

そう叫んで、僕はそのまま家を飛び出した。遅れるなんて、何を言われるか分からないと罵

声を浴びる覚悟で走った。

消防小屋の前では、作業服を着た男たちが器具を整備していた。

「遅れてすいません」

僕は息を切らして言った。苦しくてもう何も喋れなかった。

「お前、どうしたんだ？その格好」

境さんがそう言うのと、みんな作業を止めて僕を見た。僕も自分自身を見た。

確かにパジャマのジャージだが、それ以外は変なところは見当たらない。

「今日は訓練だぞ」

みんな笑っていた。僕はなぜ笑われているのか分からなかった。これは謝るべきところなのかどうかすら不明だった。でもそれが、僕が遅れてきたことを帳消しにしてくれていたのは確かだった。

「すいません。慌ててきたので……」

言い訳の言葉も見つからなかった。よりによってこんな遅れ方をするとは。僕は自分自身を許せなかった。『最初が肝心』という言葉通り、団員の心を掴みなかったが、自分のミスによって自分自身を裏切る形になってしまった。

「まあ、訓練になったじゃないか？」

境さんは言ったが、どういう意味か分からなかった。

「火事なんていつ起きるか分からないし、夜中に起きたら、みんなパジャマで来るよ。今の和也みたいに」

みんな頷いていた。その言葉に僕は救われた。そして、彼や団員たちに感謝した。僕は、この失敗を自分の戒めとして消防業務を遂行していくと誓っていた。

その後、僕は、団員一人ひとりに紹介され、最初の仕事は、消防小屋の掃除だった。もう毛先がない箒を握りしめ、高校以来やったことのない掃除を始めた。毎日使うわけではないので、埃などがそこら中に溜まっていた。

「月一回の訓練の日に色々雑務をやるんだが、掃除はみんなやらなくて……汚なくて申し訳ない」

団員の暮井さんが僕を手伝いながら言った。いつ何があってもいいように機器の整備は、心がけているようだったが、必要のないところまでは手が届かないのが現状だそうだ。

ひと通り綺麗にすると、解散となった。太陽はほぼ真上に位置していた。既に二十度は超えているのだろう。長袖だと汗ばむぐらいになっ

ていた。

訓練は朝一で終わらせてしまっていたが、僕のために境さんだけ居残って、規律の訓練を指導してくれることとなった。

「気をつけ」、「回れ右」、「右向け右」など号令に従うための動きを事細かに教えてくれたが、慣れない動きに戸惑うばかりだった。普段使わない筋肉を使うスポーツのように、ぎこちない動きになっていたと思う。それでも六月初めにある初任者講習会で恥をかかせないために、境さんは親身に教えてくれたのだった。

口に出しては言わないが、やることはやらなければいけないということを暗に含ませる指導だと感じていた。

訓練が終わる頃には、二人とも汗だくになっていた。部活でもやっている気分だった。きつさや辛さはあるものの充実感という意味では、社会人になってあまり感じたことのない感覚だった。

「疲れただろう。慣れるまでの辛抱だ。家の鏡の前で練習してみなよ。うまくなるから。それはそうと腹減ったな。ラーメンでも食べに行くか？」

「いいですね。朝ご飯も食べてないんで、腹ペ

ことです。今まで緊張感で麻痺していました」
境さんは笑っていた。それは、近所のお兄さんの顔だった。

彼が持ってきた軽トラックに乗り込み、ラーメン屋に向かう。窓全開で走ることがこんなに気持ちの良いものだっただろうか。音を出しながら吹く風に汗はさらわれた。

僕たちは、ラーメン屋に着いても一切消防団の話をしなかった。聞きたいことは山ほどあったが聞かない方がいい気がしていた。それは僕にとっても彼にとってもだ。その代わり、結婚していない僕に女性関係の質問が飛んだ。僕はうまくかわせる自信がなかったが、良いタイミングでラーメンが運ばれてきて話題が逸れたのだった。僕は辛味噌スープを啜りながら、また汗をかいた。

自宅に戻ると、疲れが一気に訪れた。僕はまだ汗をかける体だったのだと、横になり、茜空を見据えながら学生時代を思い出していた。忘れていた気持ちをタイムマシンで取りにいったような一日に、自分自身のスタートラインを引いた。夕ご飯のカレーの匂いまでもがそれに賛同しているようだった。

「お前、消防団に入ったのか？」

会社の同僚に言われたのは、僕が課長に報告したすぐ後だった。有事の際は急に出動しなければならぬ場合があるから、会社に報告しておくよう分団長から言われていたのだ。

「よくあんな面倒なものに入ったな。俺なんか断り続けてたら声がかからなくなったよ。ボランティアで仕事に穴は開けられないしな」

皮肉にも聞こえる話をされ、心は少し曇っていた。

面倒なもの。確かに僕も入る前まではそう思っていたかもしれない。飲酒の機会はあるし時間は制約されるし、ボランティアだというところが、敬遠される原因じゃないかと思う。でも、誰かやらなければいけない。僕が入ったのはその気持ちがあつたからだ。それがどこかで自分のためになるんじゃないかと考えていた。

だからといって、僕に皮肉を言った同僚を責めるのはお門違いだ。人には人の事情や考え方があるから、入らなくても決して悪いわけではない。だから、僕は行動で見返してやりたいと思った。それが、また一つの目標になっていた。

「二番員基準、右へ習え」

まるで軍隊のような声が響き渡る。水が均一

に張られた田んぼに囲まれて、まだ緑色の稲までもがその声に背筋を伸ばしているかのようだった。

僕の視線の先には指揮者がいる。さっきまでの青空は西側から夕焼けに浸食されて、ピザの焼き目ようになっていた。

七月に開催される消防団の小型ポンプ操法大会に向けて、練習が始まった。大会までの二週間、仕事が終わると真っ直ぐ帰宅し、夕ご飯も食わず練習に参加する毎日だった。

「集まれ！」

僕ははっとして、両腕を意識的に振りながら前進した。そんな真面目な消防の練習中に、夕飯のことを考えてしまっていた。教科書に書いてあることを情性で覚える学生のような練習を繰り返していた。初任者講習会で見たと実際にやるのではこれだけ違うのかと呆然としてしまう。

そんな自分を見ていた境さんは、「そこはメリハリをつけて」だの、「ホースの展張は真っ直ぐじゃないといけない」だのと指導する。

僕は、一人ひとり教え方が違うことを、胸に潜ませて、真面目に聞く振りをした。

気が付くと、夕焼け空には夜の帳が下ろされ

ていた。すると誰かがポンプ車のヘッドライトをつけた。それは、まだ練習を続けることを意味していた。僕の頭の中はぐちゃぐちゃだった。動作を頭に入れるたびに「意味がない」という否定が邪魔をしていたのだった。

「はあ」僕が深いため息をつく、「そろそろ終わるか？ 初日から飛ばしてもな……」と境さんの声が聞こえた。

「そうですね……明日以降もありますから」

僕は夜露でしっとりしたヘルメットを脱ぎ、汗を拭いて言った。他の団員の髪についた汗はヘッドライトで光り、練習の激しさを物語っていた。僕たちは素早く撤収作業をして、ポンプ車に乗り込んだ。窓を目一杯開けると冷たい夜風が心地よく、疲れを和らげた。

「あ、螢！」三番員をしている岩沢の声が暗闇に響いた。助手席の僕からはヘッドライトに集まる虫しか見えなかったが、彼は田んぼ脇の水路を指差していた。僕たちは車を停車させ、ヘッドライトを消した。

暗さに目が慣れると、四方を舞う光の点が目に入ってきた。蛍光色が点いたり消えたりするたびに、仕事を抱えながらこれから消防団でやっていけるのだろうか？ と今の自分が不安になった。

この光のように曖昧な位置に自分がいるような気がしていたのだった。

「今年も螢の季節になったな。厳しい二週間の始まりということだ」境さんが不敵な笑みを浮かべながら言った。僕は車が発進してもなお、微かな光を見つめていた。

消防小屋では、反省会という名目の飲み会が毎晩開かれた。夜な夜な繰り広げられる男たちの談義は、汗臭いものから各々の趣味まで多岐に渡った。誰一人として、練習の反省を述べる者はいなかったし、そもそも消防の話を持ち出さなかった。その違和感のある雰囲気は僕の口数は少なくなった。そして、気持ちが燻っていた。不完全燃焼で気持ちの入らない練習に対して、誰かに喝を入れてもらいたかった。もしくは誰かが練習のことを話し出すのを待っていたのではなかったのだろうか。自分が描いていたイメージとは違って、できない自分を責めながら、ひたすらビールだけを口に運んでいた。

「おい、飲んでるか？」

僕が考えこんでいると、境さんがビール瓶を突き出しながら話しかけた。注がれる音が答えの出ない心に響き、ホップが毅然と泡立っていた。

飲み会は、午後十一時くらいまで行われた。

ビールは汗をかいた後の身体中を駆け巡り、アルコールの作用で眠気に誘われた。僕たちは、「また明日」と散りぢりに帰宅の途について。帰り道の夜空は星座をいくつ組み合わせてもお釣りがくるほどに輝きを放ち、練習での失敗をチャラしてくれるように見えた。虫の音や蛙の鳴き声が夏をぐっと引き寄せていた。

翌日も仕事に行き、課長からの叱咤と営業先の愚痴の板挟みを何とか潜り抜け、消防の練習へと駆けつけた。昨日の疲れがまだ残っているようで、普段なら起きないところに筋肉痛が起きていた。

消防小屋に行くと、既に数人の団員がホースを撒いたり、干してあった手袋を取り込んだりしていた。

「あ、和也お疲れ。今日も頑張れよ」

先輩たちは声を張り上げて言ってくれた。

「よし、ポンプ車に乗り込め。行くぞ」

境さんがいつの間にかハンドルを握っていた。まだ明るさを保っていたが、太陽が、山陰に隠れ始めていた。

練習が始まると、僕は基本を忠実に守り、動作を確かめながら作業した。手の動きや全体を

通しての流れ、ホース金具装着の確認など、一つひとつ指導する団員が指摘した。

彼らはいつも真剣で、かつては僕のように操法をし、現場を見てきた人間だったので、まるで本番のときのような目つきで教えてくれた。冗談混じりで話す人は誰もいなかった。

どうしてこんなに真剣になれるのだろう。本当に火事が起きたときにこんな面倒なことをするのだろうか。いや、しないだろう。しかし、操法が基本となって現場での動きになるのだ。僕の額には何度拭いても滴り落ちてくる汗が光っていた。

明るさが失われると、練習も終わりに近づく。そして、またポンプ小屋へ戻る。疲れきった後の宴はすべて自分たちで準備し、片付ける。

こう毎日続けていると、どっちが本当の仕事なのか分からなくなってくる。あくまでも災害から人々を守ることが使命であるのにも関わらず、全国津々浦々で操法の大会は開催されているのだ。逃げ場はないし、形だけでも大会までに『もの』にしないといけないと思うようになっていた。

気が付くと、ぼーっとしながら真っ赤なポンプ車に揺らされていた。ヘッドライトで照らさ

れた道すがら、螢の淡い光がチラついていった。それは、田んぼの中でかくれんぼでもしているかのようなだった。

「もういいかい」……「まあだだよ」……

隠れていても見つかってしまう運命を逃げ場のない僕と重ねて、懸命に光を目で追っていた。毎日の練習で、心も身体もへとへとになっていたが、土曜日は早朝に練習をして、夕方からバーベキューを行うことになった。今まで散々親睦を深めてはきたが、今回はOBを招いた会となった。木炭のバチバチとはじける音も生ビールのつまみとして一役買っていた。焼けた肉や野菜が次々とOBの前に運ばれる。僕たち現役の団員は直接網から自分の皿へ移した。うま味が口に広がり、練習の疲れが一気に吹き飛んだ。炭の熱気で汗ばんだ身体を夏の風が通り抜けた。

「おい、和也、こっちに来い」

OBから声がかかった。僕は正座になり、日本酒を相手のコップに注ぎながら、話を聴いた。その人は分団長を経験していて、その際の栄光を事細かに話すことで有名だった。気を使うし、話は長いし、激励してくれるつもりならば、むしろ解放してはしかった。

満足したOBたちが帰ると、僕たち団員は、

片付けを始めた。飲み会の後の片付けほど面倒なことはなく、ため息をつきながら作業をしていた。

「なあ、俺、花火持ってきたんだけど、やらなにか？」

消防団で花火。合わないけれど、全員が賛同した。近くの空き地へ移動し、もう完全に出来上がった僕たちは、これから晩酌だと思われる近隣の家並の灯りを横目に、心地よい風に軽く煽られていた。

「これだよ、これ」

花火をしようと言った岩沢がコンビニ袋を両手に持ちながら走ってきて、突き出して見せた。中を覗くと、大量の手持ち花火があった。久しぶりにやった花火は意外と楽しいものだった。すべての花火を終えると、煙と一緒に達成感みたいな空気が広がっていた。火葉の匂いが鼻についたまま、僕たちは雑草の上に寝そべった。満天の星。『操法大会』という目の前の課題がともちっぽけなものに思えた。

「おい、練習しようぜ」

急に境さんが言った。冗談かと思ひ、薄ら笑みで返したが、彼の顔は本気だった。その顔に對しては頷くしかなかった。

僕たちは、空き地に簡易の練習スペースを作り、器具があると想定して、動作の練習をした。自分でやっていて、馬鹿じゃないか?と思ったりもしたが、連帯感が恥ずかしさに上塗りされ、いつの間にか本番さながらの声を張り上げていた。近所の家からは何事かと出てくる人すらいた。

翌日は、完全休業となった。酔ってからの練習が仇となり、午前中は睡眠にあて、午後から好きな本屋を巡った。一切練習のことを考えず、立ち読みに没頭した。

休日は休日で、家族サービスにあてなければならぬと境さんは嘆いていた。この二週間は家庭に迷惑をかけていて、そのフォローのために所属の部では、この期間の日曜日は練習を休むことにしていた。子どもたちをどこかに連れ出かけたり、農作業の手伝いをしたり、本業の仕事に行く者さえいた。ここまでして練習をしなければいけないのかと疑問を抱かないわけにはいかなかった。

ゆっくりと趣味に時間を使い、夕暮れを眺めていると『それ』は突然起きてしまった。

「ウォーーン！ウォーーン！」

けたたましい大サイレンの音。耳を済まして

も音にかき消され、災害放送がただの雑音にしか聞こえなかった。

「火事だぁー」

近所の高齢者が警告を散らしている。それに合わせて、家々から人々が外に出て、煙を探し回る。

僕が消防団に入って、初めてのことがあった。

そして、慌ただしい中で、境さんからメールが送られてきた。

『緊急。火災発生。消防小屋集合』

僕は、着の身着のまま消防小屋に向かった。日中の日差しが強かったせいなのか、緊張しているのか、汗がとまらなかった。場違いな夕焼けは申し訳なさそうに沈んでいた。

消防小屋に着くなり、「和也、早く乗るんだ！」と境さんの声が耳に入ってきた。ポンプ車に乗っている団員は、銀色の防火服を着ており、車内は緊迫感が張り詰めていた。

誰かが世間話でもしようものなら怒られる雰囲気さえあり、僕は両足が震えるほど緊張した。初めての経験で、先輩たちの行動を見ながら役に立てることを探す他なかった。

ポンプ車が激しいサイレンを鳴らしながら着いた現場は、人と煙で溢れ、そして何より他の

ポンプ車とやじ馬の車で渋滞していた。

「よし、反対側に回ろう」

境さんはすぐに指示を飛ばし、ポンプ車を迂回させた。その判断は正解だった。反対側は手薄で、応援を待っていたのだ。

「裏側に水路あり。二分団は三分団とともに消火に当たるように」

無線から呼び声で指示が飛ぶ。僕たちは三分団のポンプ車を探し出して待機した。消防本部が立ち上げられ、部長である境さんの持つ無線に度々指示が届いた。防火服を来た団員たちが何人も火事場へ走り抜けた。既に前線で消火活動していたある団員は、ハアハアと言いつつ、半分脱水症状のまま倒れるようにしゃがみこんだ。

炎は勢いを衰えさせることなく、むしろ時折爆発を起こし、近づき難くしていた。爆発音があるたびに僕はビクッとした。

ポンプ車が指定の位置に着くと伝令が来た。「ここに中継して水を出すから、二分団はそのまま消火願います。ホースは三本あれば余裕でしょう」

彼は相当走ってきたのか、疲れているのか、息を切らして話した戻って行った。

境さんは、吸管ホースとポンプ側、ホースと筒先側を決め、素早く操作するよう指示を出した。僕は素早く防火服を着て筒先を持ち、前線で消火にあたることになった。

降車し、ホースを展張した。いつも練習していたことは忘れてしまっていた。早く消火しなければ……、ただそれだけの思いだった。祈りを筒先にこめて、前線で水が出るのを待った。燃え盛る炎を前にして、決して離すまいと筒先を掴んでいた。

水圧は伝令が到達する前に勢いよく僕を引っ張った。左右に揺られ筒先から飛び出した水は、炎を映して輝きを放ちながら、拡散した。万遍なく降りかけるため、動かそうとしても、ホースはびくともしなかった。水圧のせいだ。固い鉄のようになり筒先だけを動かすことで精一杯だった。パニックに落ちかけた時、後方から声が飛んできた。

「和也、焦るな。今後ろから支えてやるから、自分の安全を保てよ」

僕は我に返り、冷静さを取り戻した。息を止めているのだが、ゴムを焼いたような匂いのする煙が鼻をついた。左肩に鼻を埋めると、急に軽くなった。

後ろを振り返るとそこにはいつも練習を手伝ってくれるOBや団員がホースを支えてくれた。た。

「ほら、後ろに火はないんだぞ。俺たちが後ろを持つから目の前に向かうんだ。お前ならやる」

心強い言葉が胸をついた。命綱をもらったような気持ちになり、巨大な敵に立ち向かうことができた。トビを持つ団員が、反対側から放射されている水を浴びながら、安全確認できた壁を一枚ずつ剥いでいるのが見えた。僕はその隙間から中に水を入れた。まだ形のあるテーブルなどの家財道具の他、テレビや冷蔵庫は黒く焼け焦げて、溶けかかっていた。それでも無心に炎を消し去ろうと必死だった。近所の人は安全な場所に避難し、延焼しないかと心配そうに見守っていた。

二時間も水をかけ続けただろうか。火の手は収まりを見せかけていたが、まだ煙りが何ヶ所も見え、油断できない状況なのは一目瞭然だった。

本部から全団員に集合命令が出ると、僕たちは持ち場の安全性を確保しながら、足早に本部前に向かった。足元はホースが重なっていたり

燃えかすが飛び散っていたりで異様な光景になっていた。ガシガシと音をたてながら、防火服を着た団員は、神妙な面持ちで駆けつけていた。

「気をつけ！」

背筋に緊張が走る。ざわついている者はいない。消防署員による放水が続いている中、部長が言った。

「一見して鎮火したように見えるが、まだ中が燻っている。これからさらに壁を剥がし、中にも放水していく。以上！」

大きく威厳のある声が響いた。その声の奥底には経験も見え隠れしていた。僕は他の団員とリレー方式で向かいの空き地に炭になった壁板などを積んでいった。その横ですすり泣く女性の声が聞こえた。意思とは別に流れてくる涙を無理やり抑えているような声だった。僕は敢えて声を与える方にひたすら作業をした。

ひと通り家の中に放水し、煙もたたなくなつてから撤収命令がかかった。

目の前の事実から遠のくことを告げる合図だった。火事の終わりとはどこだろうか。どこからどこまでが僕たちにできることなんだろうか。無理やり付けなければならない線引きに戸惑っ

ていた。

そして、僕たちは無言で片付けをした。静けさが大きな重りになって、疲れを倍増させていた。

消防小屋に戻ってから、ホースを片付けながら虚しい気持ちと闘っていた。

すすり泣く女性に僕は何かできたのだろうか。僕一人では足でまといになり、傍観者に成り果てていただろう。周りのサポートがあり、みんな協力できたからこそその消火作業だった。火は一人では消せないのだという、連帯感の大切さみたいなものを考えさせられていた。

上を見ると、空は眩いくらいの宝石を散りばめて、僕たちを見下ろしていた。昨日見た空とは何かが違っている。台風がくる前のような生温い風が、汗だくの身体を慰める。まだ湿っているホースがその風に揺らされている。もうホースを使う場面が来なければいいのに。疲れた身体を本音が癒す。後ろめたさみたいなものはないけれど、ただ悲しかった。僕は閉ざした口を我慢できず開いた。

「境さん、俺たちって何のためにいるんですかね？いくら消火しても、失ったものは取り戻せないですよ」

皆が無言で僕を見た。それぞれの思いはあると思うが、皆が境さんの意見を聞きたいと考えていそうだった。

「和也、そうじゃないぞ。俺たちのいる意味は火を消す、命を守るとたくさんある。しかし、本当の意味は防火だよ。お前が言ったように起きてしまえば、色々なものが失われる。そして、消火してもその後に残ったものの方が恐いのかもしれない。そういう火事の恐さを知る消防人になれ」

彼はそう言いながら片付けを続けた。自分自身にも問いかけているようだった。僕は空を見上げた。いつもと同じ空のはずなのに何か違って見えていた。

僕は昨日にはなかったものが心の中にあって、それが湧き水のように身体の下から出てくるのを感じていた。

その夜は、消火活動の疲れがそのまま残っていて、夜になってもなかなか寝つけず、夢でうなされた。扇風機は朝まで僕を見守るようにまわっていた。僕は起きると、急いで出勤した。

職場では、自分の意識を正常に保つことを目の前のコーヒーに頼っている始末だった。消防団に入って、職場に穴をあけるなんて本末転倒

だと昨日までの僕は思っていただろう。しかし、今の僕の頭からは昨日の泣き声が離れないのだった。そして、不思議と現場ではこんな風にすれば良かったんじゃないかと思いついていた。首をブルブルと横に振ってみても、最終的には昨日の火事のことばかり考えていた。

仕事をひと通り片付けると定時となり、僕はまた操法の練習へ向かった。車の中は蒸し風呂のような熱さだった。僕の車は日中の太陽光をたっぷり吸収しているようで、練習前から汗だくになってしまっただった。

「昨日はお疲れ様。火事の原因は漏電らしい。負傷者が出なかったのは幸いだ。さあ、切り替えて練習をやるか。今日から水をあげるぞ。和也は昨日経験したから感覚分かるよな？」

着いて早々に境さんが口を開いた。皆が昨日のことを引きずっているように見えたからだと思った。

『切り替える』例えば、医師が「死」に対して慣れてしまうことと同じ意味を示しているのだろうか。火事に対して慣れるなどできるだろうか？夕方らしい涼しさを含んだ風が、ポンプ車の窓から僕に吹き込んできた。草焼きの匂いが僕の鼻をついた。昨日の焼けた匂いとは違う

匂いをかいでいると気が付く。

そう、慣れるのは火事そのものじゃなくて、消火であることを。あの生活に直結した匂いは二度と嗅ぎたくないと思う。いつの間にか『消防人』としての考えが芽生えていた。

その日の僕の練習には熱が入った。あらゆることを吸収しようと分らないところは積極的に聞いたし、自分の動きを細かく指摘してもらった。昨日までの僕ならば、注意を受けて初めて修正する程、受身であった。

操法の動き一つひとつが実は火事の時に重要だということを頭ではなかなか理解できなくても、身体がそれを思い出させてくれた。眠いことも忘れるぐらい集中して、話しかけられても肩を叩かれるまで気が付かない始末だった。

それは皆も同じだった。指揮者の境さんは、初めて水を出すことにも平然としており、筒先が水圧で左右に振られるのを必死に固定して見せたし、二番員の小暮は、仕事であまり練習に参加できない割には、三番員の岩沢と息の合った操作をしていた。二人とも積極的に会話をしながら、時間をなるべく共有するよう努めていることが見てとれた。いずれ、この四人が息を合わせないと結果には繋がらないのだ。

火のついた導火線のように時間があっという間に過ぎていった。そして、辺りは暗くなりつつあった。しかし、段々と日が長くなっているのが感じ取れた。真夏はそこまで来ていた。国道沿いを眺めると、車が窓を大きく開けて走行していたり、夏服姿の高校生が自転車に乗っていたりしていた。OBからアイスクリームの差し入れがあつて、火照った身体を冷やすのにとでも助かった。

小型ポンプのエンジン音で練習に引き戻された。僕たちは通しの全体練習が終わってもすぐに帰ることはなく、何度も気になる点を確認して、個別練習を重ねていた。ようやく帰ろうとし始める頃には真っ暗になっていた。

僕は、螢の数が日に日に増えているのを感じていたので、練習後に空中に漂う光探しが楽しみになっていた。幻想的な光景は田舎ならではの体験で、一時期、農薬散布で絶滅に瀕していたとは思えないほどあちこちで輝いていた。「螢って一、二週間しか生きられないんだろ？それでもこうして光ってるんだからたいしたものだよ」

岩沢が笑って言った。「何だか俺たちみたいだな。二週間練習をする

と、有事がない限りまた来年ってことじゃないか？悔い残したくないよな……」

境さんが呟いた。皆の間で空気が止まった。張り詰めた感じとは違う。何か前から疑問に思っ

て胸につかえていたものが取れ、穏やかな気持ちになっていた。

僕たちはその後、大会までの短い期間、猛烈な練習に励んだ。二週間は長いと僕は思ったが、実際練習を始めるともっと時間がほしいぐらいだった。螢の灯火のように観ている人を魅了できる操法ができれば、と密かに思っていた。

仕事、操法の練習、帰宅、睡眠、仕事と単調な繰り返しではあったが、リズムが良く、充実感は増していった。

始めた頃は夢のまた夢であった、操作始めの声から放水し火点を倒すまでの基準タイムには、やればやるだけ、近づいていくのが分かった。一つの目標に団員全員が向かっていた。

前日に、大会会場での最後の練習を終えると、残すところ大会当日の一本のみとなった。練習でボロボロになった器具を磨き上げ、ホースやヘルメット、手袋までもこすり洗った。ついでにポンプ車を皆で磨くと、何だか自分の愛

車よりも愛着が湧いてくるほどだった。

そして、最後の宴会は、大いに盛り上がった。もう練習しなくてもいいという開放感と、もっと練習したかったというもの足りなさが混在していた。操法の話題を積極的に出し、真剣に会話をした。様々な種類の料理とお酒が、会話とともに明日への力となってくれる予感がしていた。

まだ明けない夜。僕は、携帯の目覚ましよりも先に目が覚めた。

昨夕の宴の余韻が残る中、一つ背伸びと深呼吸。家の前でぼつんと光る街灯が螢の灯火のように僕を勇気づける。徐々に湧き上がる緊張感、モチベーションを保つのにちょうど良いくらいだった。

からすが赤子のように鳴き、それに合わせて大量の雀が合唱しているのを聞いて、朝が来たことを覚えた。

街を自転車で駆け、消防小屋を目指す。初夏だというのに、明け方の風は冷たく、顔にあたると目が冴えて、それが心地良かった。

今日の操法をイメージしてみる。忠実にイメージすることで自分に安心感を与えようとしていた。自然とペダルに力が入る。ハンドルを筒

先に見立てたりもしてみた。

消防小屋に着くと、小上がりで境さんが既に準備していた。

「おはようございます。いよいよ、最後の一本ですね」

彼は僕をマジマジと見て、深く頷いた。土壇場で器具が壊れてしまうことで操作できなくなるのは絶対嫌だったので、入念な点検をしているようだった。僕も筒先を開閉して、砂が噛んでいないか調子を見た。

「よし、神棚に祈ってから行くぞ」消防小屋の奥にある神棚に向かって、皆が脱帽し、手を叩く。あくまで縁起の問題だが、そうすることで一体感が生まれた。

「さあ、行くか」というかけ声とともに、ピカピカに磨かれたポンプ車へと乗り込んで、深呼吸をする。久しぶりの感覚。部活でやっていた野球の試合に行く時のような気持ちだ。

大会会場のグラウンドに到着すると、分団ごとにテントを張り、控え所を作っていた。大会会場の準備は既に終わっており、審査員である消防署員が打ち合わせをしていた。それを見ると、急に緊張が走った。

開会式が始まると、静寂の中、強い風が吹き、

砂埃が舞う。時折目を塞ぐものの、風に放水が煽られて火点に届くかなという不安が頭をよぎった。全体が軍隊のように同じ動きをし、身を引き締める。

堅苦しい開会式が終わると、僕たちはすぐ準備に入った。

三番目。ゼッケンをつけ、少し水分を含む。緊張しているのか飲み込み辛くなっている。控え所にいる団員たちは、僕たち操法員を送り出してくれる。「頑張ってこいよ」、「いつも通りで」……その言葉が背中を後押しする。

脚絆やヘルメット、手袋を着け、操法員同士で確かめ合う。これらも採点対象なのだ。一番目が終わり、二番目が本番の用意をしている間、僕たちが準備をする。一番目の操法の跡が地面に残り、イメージを膨らませる。遠近感の取れないグラウンドで頼りになるのは感覚と経験だ。僕は身体を過剰に動かして、緊張をごまかした。

「次は二分団第三部です。準備をしてください」アナウンスが響く。僕たちの準備が終わると、号令をかけた。

「気をつけ。二番員基準、右へ習え」

自分でも驚くほどに、こだまする大きな声が出た。

「操法開始」

張り詰める空気を切り裂くように、審査員が号令した。同時に隣りにいる境さんが「行くぞ」と吹き、走り出した。

「集まれ！」

操法員として、身体が勝手に動き出す。ライオン上に三人が入り、僕は、「よし！」と声を掛ける。心臓がバクバクと鼓動を打つ。深呼吸をすると、客席で観ているOBの息づかいまで聞こえてきそうぐらいの静寂の中にいることが分かった。

「火点は前方の標的。水利はポンプ右側後方防火水槽。手広目による二重巻ホース。一線延長。定位につけ」

境さんの言葉に、身体が適切に動く。ロボットのようにインプットされた動きは間違えようがなかった。

「操作始め」

僕は走り出した。ホースを左肩にしっかりと担ぎ、右手でホースを引っ張った。結合音が響く。砂埃が立つが、目もくれず前を向いて走る。目標は、指揮者だ。二本目の結合音が響いた瞬間、「放水始め」の音が響き、僕は全力でポンプまで戻る。三番員がポンプに真空をかけている。

学生の時以来出したことのない力を足に託した。白線まで着くと、右手を上挙げ、「放水始め」と叫ぶ。三番員が放水し出すとまた指揮者まで戻る。そして、筒先員を交代し、僕は水圧に耐える。火事の時はもっと辛かったはずだと自分に言い聞かせた。

頭の中は二週間の厳しい練習が駆け巡っていた。そして、螢の灯火。今は盛期を過ぎ、ほとんどいなくなってしまうが、あの光にどれだけ励まされたことか知らない。僕は二番員の伝達で放水をやめてから、筒先を背負って戻るまで、自分なりに首尾よくやれた。

集合してからは、身体についた重りが取れたような軽さを感じた。

「終わったぁ」

天を見上げると、強風が飛行機雲の形を乱していた。滴り落ちる汗を拭い去り、拍手を送る観客に深々と礼をした。

僕たちの操法はそこで終わった。タイムが伸びず、結局十五チーム中七位という成績だった。祝杯は来年の夏に持ち越しだ。

「カンカーン……。カンカーン……」

もうすっかり螢は見えなくなった。また、あ

の光に会う日を待ちながら、僕たちは今日も防火の警鐘を鳴らしている。

グリーン賞 静かな生活

秋田市 加藤 夏実

すべては少しずつ、黙ったまま済んでいく。

「水族館で眠りたい」

脈絡を無視して言った。それまでの会話が何だったか考えるひまもなく、零れた言葉だった。ふたつ年上のいとこは、携帯端末の画面に目を向けたまま訊く。

「なんで？」

タイムラインをスクロールする指の動きを目で追いながら、私は言う。

「静かで、ちょっと設備とか、換気とかの、ホワイトノイズがして、暗くて涼しい、ひとのいる、でもいすぎないような。生きものがたくさんいて、でも言葉は少ないような」

「やさしそう」

彼は少し笑んだ声で言った。私は頷く。

「そういう場所。絶対よく寝られる」

「でもしめってるよ」

「カラカラよりいいよ」

返す言葉に、私が乾燥しやすい細い髪を気に

しているのを知っている彼は、おまえはね、と言った。

「行きたいなあ」

続く呟きには一拍だけ、困ったような、哀れなような、眉根の寄った表情を向けられた。

「この辺にはもうないんじゃないかな？」

「ああ……やっぱ、それ、本当なんかな」

「どうだろうな。ここから歩いて行ける距離で、前あった場所には、もう人は殆ど残ってないみたいだとは聞いた。歩いて行けない距離の話は、まだ聞かないけど……」

「うーん……」

ソファの背凭れに首と頭を反らせて預け、私は鼻から息を吐く。隣に座る彼は、まだ聞かないけど、の後に、言葉の連続の気配を残したまま黙る。そうしてしばらくスクロールは止まらなかったが、不意に「おっ」と声を上げ、手のひらサイズの画面をこちらに向けた彼は笑む。

「あった。県はふたつ跨ぐけど、距離自体はそう長くない。行こうと思えば行けるぞ」

「わ、ほんと？ 行こうよ」

「いつにする」

「明日までに、要るだけのお別れの手紙全部書いて、明日の朝に投函して、そしたらすぐ行こ

う」

たまらずにはしゃぐ私がそう言うのと、彼は少しだけびくくりしたように問う。

「手紙って……戻らないわけじゃないんでしょ？」

私こそびくくりしてしまって、反射的に、素直に訊ねる。

「冬一は戻りたいの？」

彼は数秒考え込んで、明確に否と言う代わりに、視線を伏せたまま首を左右に振った。

「んは、だよねえ」

冬一は諦めたように目を閉じてみせた。軽口を叩きながらその横をすり抜けて立ち上がり、私は棚か、机か、もしくは押し入れから、退部届けを出すのに使ったきりのレターセットを探そうとする。

眠る瞬間に、ひとは世界の飢餓や、戦火や、政治家の欺瞞や、およそネガティブなものを意識にとどめておくことなんてできないだろう。日常の些細な口論だって、しこりになった齟齬だって、思考の表層にはないだろう。原始的な身体の悦楽が、幻視的な入眠悦楽が、脳のいちばんやわらかいところであって、淡い寝入り端の夢を見る、それだけである。

それを邪魔されなければ、私は、他のどんな

ことも、おおらかな諦めとともに、どうでもいいよと言える。

「ピアノ、すきな」

今朝起きてすぐ、別れを悲しむべきものところへ、旅立つ前にひととおり寄つていこうと、気まぐれに冬一が言った。空っぽの学校はあいかわらず、毒にも薬にもなりたがらない柔和な薄黄色の壁をしている。外にも教室にも、学生の影はない。通っていた頃は休日でも、近寄るだけで、運動部や吹奏楽部の熱心な主張が聞こえてきていたのに。

「すきだよ。少しなら弾けた」

彼は鍵盤を、覆う埃ごとめてあそぶ。

高等学校に入学して、図書委員会で出会うまでの、彼を私は知らないし、私をおそらく彼も知らない。血の繋がりと分かるよりも早く、そして分かってから後も、私たちは驚くほどお互いを気に入っていた。会話を好んで交わし、同じものを眺めて過ごすことを素直に喜んだ。一年しか一緒にいられないことを臆面もなく惜しみ、それで結局私は、彼と同じ大学に行くこととさえ決めた。

彼とは気が合うから。それ以上の事情も理由もないと、私はいまもまだ思っている。

「弾けたってことは、もう弾けないの」

壁の額縁に飾られた音楽家たちの獣じみた視線を見やり、私は問うた。彼は少しの恥じらいを笑いに含んで答える。

「もう忘れた。小学生のときの話だもん」

そう言いながら、指はまた、鍵盤をなぞっている。隣り合わないその動きが、何の和音であるかも分からないのは私だ。

「へたでもいいからさ、ちょっと弾いてみてよ」
彼は照れて口元を歪ませ、首の後ろを手のひらで擦る。

「あー……本当にもう、全然、忘れちゃったから、ガッタガタだけど」

「いいよ、聴かせてよ」

もう一度強請れば彼は断らない。

楽譜もないのに、思っていたよりもずっと流暢に、私にも聞き覚えのある曲を、彼はいくつか弾いてくれた。弾き終われば黙って手首を回す。私は手持ち無沙汰に座っていた階段状の床の、リノリウムの反射をずっと見つめている。

「題名、分かった？」

背中の上にある、横顔未満の表情は、やっと眩しくなり始めた朝日に白く飛ばされて、よく見えない。私よりも広い、教室に似合わない灰

色のパーカーの背中だ。いまこうしているからには、何かの理由があつてか知らないが、人生を捧げて鍵盤を叩くことを、彼は目指せなかったのだろう。あの人たちの教育方針だろうか、経済的な事情だろうか、興味関心の変化だろうか、私は知らない。こわくて訊けやしない。だから彼は安心してゐる。

「わかんないや」

そう答えると、横顔に達した角度で、冬一は吐息だけで「そっか」と言つて笑う。

ピアノを閉じて、教室を出る。キャンパスにも寄ろうか、と彼は言う。私のサークルへの未練を気にしているのだ。とりあえず、形だけでも名残を惜しんでおいたほうがいいと考え、私は頷いた。

私たちよりも早く生まれて、私たちよりも長く生きてきたひとたちは、おまえたちの知っていることなら自分は何でも理解している、という顔をする。そうではないという仮定が、いろんなことを余計に困難にさせると、きっと無意識に感じているのだろう。彼らがいつまで何度巡り合ってきたのかも分からない、賢い子も愚かな子も、よく喋る子も無口な子も、いくつかのよく似た形の子供たちを、いずれも数い

る子供のひとりとして、ブレーンに接する必要がある。つまり、場合分けの人間の省略である。あるいはより浅はかに、自尊心の保持である。そんな気がしている。だから私は子供であるし、大人はそのような子として接してくる。

とはいえ、事情があらうがなかるうが、そのような大人を、私は総じて見下している。

やはり空っぽのキャンパスが、放置された枯葉だらけの道を東西南北に延ばしている。教授たちの研究室からサークルの活動場所であった図書館まで、ふたりでゆっくり歩く。私があからさまにかつたるい様子で首を回していると、横のほうから微笑きが聞こえる。あの教授の講義を取っていなかったために遠慮して、部屋の外で待っていた彼から、「対話どうだった」と端的な質問が飛ぶ。「否定の押し付け合いかな」と、こちらも端的な返答を投げる。彼は木漏れ日を眺めながら、思考の半分だけこっちに寄せます。

「安心したいだけなんじゃない」

「どっちだってそうなのにな」

「主観以外であれないんじゃない」

「どっちだってそうなんだろうね」

「そーだろうねえ」

主観。究極的な中心点、そこを喪失してはきつと意味という価値観が瓦解する、そういう天秤の柱。誰でも持っている、誰も共有できないにも関わらず、便宜上の交換可能性の象徴になっているもの。

個別的かつ普遍的な、矛盾とも呼べる「私」の解釈が生まれた時代から三百年と少し。すべからくこの世は自己責任の名のもとに、煩わしくも手厚い「国家」という家制度的共同幻想を手放してしまった。もう少し具体的には、いかなる共同体も、他の共同体を害することができないだけの物理的火力を——詳細な記述も面倒なほどの大小様々な理由により——失った。また、個人がただ生存していくために必要な量の物資を生成する技術が、民間レベルに生まれてしまった。

私が気軽に肩に掛けている、革製の赤いショルダーバッグ。この中に、今朝までを過ごした家がまるごと収納されているということを、三百年前の人々は、すぐには理解できないだろう。その家が、自身の生命活動の一環として、たとえば冷蔵庫に食料を生み、たとえば貯水タンクに水を生み、たとえばすべての部屋に電気を送る、という生態を持つことも。そして、そんな

仕組みが安価で作られるまでになってしまった理由が、世界人口が一億人を下回り、広範なインフラの維持が不可能になったからだということも。種の減少を消極的に受け入れるか否か、人類の絶滅を甘受するか否かということについての、有識者による激しい論争が続いていることも。何も想像できはしない。

形骸化した国際組織での飽きない議論の様子を、さっきインターネット中継で見せてくれた教授たちは、私を、そんな世界を憂えるひとりの少女だと考えてくれていることだろう。だからこそ、あの気遣うような視線、悲しげな表情だったのだ。こんなありさまになっても教職を離れない彼らとは違い、混乱に乗じていことふたり、家族ふたつから家出を果たし、いまもこうして逃げ遂せているのだとは、この先もきくと考えまい。もっと言えば、その際に彼の実家に配給されていた、この畳める、自活式の便利な家を盗んできた窃盗犯であるとも、思うまい。それが生みの親に対する彼の精一杯の意趣返しだとすれば、少なくとも私は、死ぬまで口を割らない。

おいしいごはんを食べて、優しいひとと話して、不意に笑ってしまう瞬間を我慢せずに暮ら

せることが、それ以上の何でもないがゆえに、他の何よりも尊くて正しい。だから彼も、私も、ふたりでどこか行こうと決めたのだ。

だらだらと歩いて辿りついた図書館も無人で、いつも借りていた会議室には、本やペンのひとつも見当たらず、ここに私の所属したサークルがあったという痕跡は、既がない。世界の終末や異なる次元について、科学もオカルトも混在した雑多な議論をする集団だった。すぐに思い出せる情景は、特にない。

みんなシュルターに行ってしまったのだろうか。

私たちは踵を返し、当初の目的である水族館まで、南西に進路を取る。

初日はひたすら歩き詰め、街をふたつほど縦断したところで、日が暮れた。何十年も前からどこも廃墟同然の無人つぶりののだから、適当な旅館やホテルを無銭拝借してもよかったのだが、私たちは見知らぬロケーションに刺激を受けるよりも、慣れた我が家で眠ることを選んだ。眠り、目覚めて見れば、寝室の大きな窓は霧により、日陰の白であるところの濃紺に染まっている。私は脊髄反射のように、血の巡りを必要として身動きする。それに起こされたらしい

隣の冬一が、ずりずりと腕を伸ばして枕元の置き時計を見、小さく呟く。

「もうちょっと寝ていいよ」

「……うん」

起床にはまだ相当に早い時間であるらしい。ふかふかの枕に、血の気のない顔が埋まる。私もそれに倣う。夜明け前の微光は、白い寝具と肌に集まっている。

瞼を閉じたことの自覚もなく二度寝に落ちて、私は夢を見た。

「ふたりはさ、恋人なの？」

数少ない私と冬一の共通の友人だった彼女は、いつかの初夏の平日、昼休みの中庭でそう訊いた。

昼食は確か、私が菓子パンと片手間のレポーター、冬一がわかれのおにぎりと配布プリントの整理、彼女がインスタントのパスタと英語の宿題だった。大学生らしい怠惰だったな、と、いまならば懐かしく思う。

訊かれた内容に対する返答はと言えば、曖昧に過ぎた。

「……たぶん違う」

「違うんじゃないの」

私たちは殆ど同時にそう言い放ち、直後、顔

を見合わせて眉尻を下げた。なぜならば、世間一般が、この場においては彼女が、それ即ち恋愛感情であると認めるような情動を、互いに抱いた記憶がなかったからである。積極的に否定するような嫌悪を抱いておらずとも、肯定できるだけの材料もまたない。

「じゃあ友達なの？」

続く質問はいっそうの難易度を示した。

ふたりに血の繋がりはあることは大学入学の前に判明しており、級友という意味の「友達」であるという意識は、「親戚」ないし「家族」という、より確固とした法的な——いまとっては慣習の——枠組みに比べて不明瞭なものになってしまっているからである。そしてそれ以前に、ここにおいてもまた私たちは、互いを「友達」と名付けて呼んだ経験が、ないのであった。

「そういうつもりもなかったな」

「だね」

したがって再び否の返答を放つほかなかった。木漏れ日をまとうベンチに手を突き、彼女は上体の力を抜いて傾く。周囲の人影はこの頃から既にまばらで、広々とした道へ向けて彼女は、両足をぶらぶらと投げ出した。膝に置いたファ

イルとベンケースを指先でいじりつつ、意図的に感情の排された声が問う。

「ふうん……でも、でもさ、トーチちゃんとトリーちゃんはずっと一緒にいるんですよ。高校も同じだって」

「うん」

冬一はビニールの包みを丸めながら頷く。切れ長の視線はちらりと私の太腿の上のノートパソコンの画面を見、小さな誤字をひとつ指摘する。私はちまちまとキーを叩き、それを修正する。

「だよね……ふうん……」

彼女は腑に落ちないような、あなたが言っている以上の何かがあるなんてこっちはちゃんと分かっているんだからね、というような目つきで、鼻から声を抜けさせる。

その、当たり前のような「でも」が、いちばん嫌い。

珍しいものを見るような顔が、次に嫌い。

彼女ひとりのことは、冬一を多面的に欲しがっていることを滲ませる視線だけが、きっと嫌い。

声に出して嫌いと言えない自分の、柔和を装った臆病は、いつかなくなる予感が出ている。

それがなくなったときに、私の少女性の死ぬ

ときだと思う。

女が何歳まで少女なのかという問いに、私は、臆病な恥じらいを失うときまで、と答える用意がある。そして、きっと冬一の少年性は、私の陰湿なやり口、積極的に自己の敵を排するのではなく手出しのできない場所へ逃げる動向、そういう卑怯な醜さに気付くまでは、生きているのだろう。だから彼の少年性と私の少女性は、いつか心中することができると。いつか心中する日を夢見て、私は少女性を生かしている――。

夢見て、という内声言語に、夢の観念を意識した私は、眠りを自覚し、結果再び目を覚ます。横を見れば冬一はいない。寝具のぬくもりを手放し、寢室を出て台所に行けば、寢間着の背中がある。

乾燥した喉で「おはよう」と言えば、あの日と同じ切れ長の目が、横顔からちらりと向けられる。「おはよう」と返されて私はやっと、悪夢による寝汗に気付いた。シャワーを浴びると言えば、振り向いた彼は穏やかな様子でコップ一杯の水を手渡し、後で着替え持っていくよ、と応えた。

人間が減ったところで、地球の気候はそのままで急激に変化しなかった。晩夏が、日差しが強

い日が、嬉しいくらいに続いているから、白くて花の咲いたワンピースを着ることが出来る。仕立てたばかりのお気に入りのそれが、風や歩みに揺れるたび、たとえ長く単調な景色を押しつける幹線道路の上でも、私は楽しくなれる。昨日までは下の市街地跡を歩いていたけれど、冬一がもう少しテンポを上げようと言って、直線の多いこの道を選んだのだ。しかし案の定、実直そうな見た目よりもずっと飽き性の彼は、先程から至極つまらなそうな表情を隠しもしない。

私が服のために楽しくなることができるならば、それなしには楽しくない、という意味を含んでいる。いま振り向き、後ろ二歩離れた場所を歩く彼の表情を見て、私は、うきうきしたままさっさと歩いていくこともできるし、気分と歩調を緩めて彼に並ぶこともできる。正解を決めることはできないが、私は良心に従い、後者を選んだ。彼は荷物のないことを居心地悪く思っているふうに――私にはそう見えるようなそぶり――腕を振っていたので、その一方を取り、簡単につないだ。私の倍はありそうな大きい手のひらは平らで冷たい。

彼は、突然手をつないだ私に対して、何の言

葉も発さず、わずかに表情を緩めるにとどまった。今朝の穏やかな様子が少し戻ったようだった。私の歩調に合わせ、ショルダーバッグは腰の後ろでばんぼんとはねている。彼のスニーカーの靴紐も、同じようにぱたぱたとはねている。その音と、足音と、周囲を遠く囲む森に反響する虫の声だけが、聴覚を満たそうとする。アスファルトが日光に焼かれるにおいがしている。風は変わらずぬるい。ふたりとも喋らない。ひとの心まで抱えたくない。お互いそれを了解している。

受け容れても仕方ない、良くなることなんてない、そういうことでさえ、受け容れることを強いるものがあるならば、どうせと言って諦めてしまいたい。それなのに、どうせの先に続く言葉が見つからない。自分が消えてしまうのが恐ろしいだけのひとが、あまりに多すぎる。如何ともしがたいそういう不満なら、いたずらに語り合ったところで神経が波立つばかりで、意味はないのだ。私たちは十分に、それを知っている。

「今日は綺麗な日だなあ」

私は斜め上を見上げて呟いた。透明に近い白い雲が、強い色味の青空へ迫り出している。

「空高いな」

彼が応える。ふいと見上げた視線を向けると、彼も入道雲を見ていた。高いと感じるのは、空の色味の強さを、遠いものの青さと思うからなのだろうか。空の距離が毎日変わるのだから、私たちは多くの知覚を、色に支配されている。

「うん……」

見上げているために伸びた喉で、曖昧に相槌する。そのうち視線は地面に降りて、私たちはその日中に、ひとつ目の県境を越えることができた。

それから何日か、私たちは同じ道路を歩いた。もうひとつの県境が程近くなった頃、雨が強い夜に、何か月ぶりの電波が来た。雨の夜特有の暗がりを孕んだ居間の食卓で、冬一が趣味で組み立てた旧い型の無線機は、粗い雑音と一緒に、耳慣れない言葉を吐いた。

曰く、厚意の物資求む、連絡待つ、止り沢田発電所跡。

「とまりさわ……」

耳慣れない言葉だった。

隣の彼を見上げると、視線は無線機のダイヤルに向いたまま、思考は記憶上の周辺地図を探っ

ているらしい。多分、良心や親切心と危険やコストの類を、自分と私の分、秤にかけて計算している。

それが済んだとき、視線は私に向き、思考は件のとまりさわへと向かっていた。

「少し寄り道しよう」

「うん」

夜が明け、湿度の名残を残して雨は上がった。だが冷たい風はまだ強さを保ったまま。家のクロゼットから引っ張り出した秋用のコートは、風を防ぐ代わりに薄っぺらい。私は下に長袖のものを何枚か着込む。冬一に至っては、早くもセーターを出して着ている。

玄関を出て真っ先に、彼は突風にあおられた私の上半身を、腕で支えなければならなかった。

「風強い」

強いどころではないそれを呑気に評する私の言葉を聞き流し、彼はよっこいしょと言わんばかりに背中を押し戻す。

「歩ける？」

続く問いには、あまり自信のない返事をした。

「ゆっくりなら」

彼はひとつ頷いて「じゃあゆっくり行こうか」と言い、先日の惰性で手をつないだ。私も先日

の惰性でそれに賛成し、折り目が破れかけの地図を空いた片手にしっかりと持ち、進路を取る。一度幹線道路を下りて、山肌に沿う道を進む。放棄されて用水路と見分けのつかなくなった、草だらけの田圃をいくつも過ぎる。改定前の記号を浮かべる標識は、ボールの腐食で傾いている。何度か枝分かれする道を曲がり、民家や商店の廃墟も減ってきたとき、止り沢旧発電所跡は、木立の奥に姿を見せた。

私たちは、自由になって気付く。存在の本質はそのあるなし自体の曖昧さなのだ。ちっばけな針の音や数字がなければ切り取れもしない膨大な時間の中で、私たちはそれにいちいち色んな名前を付けて呼ぶけれど、名前さえ忘れてしまえば、同じ顔をして並ぶそれらを見分ける程度の視力も、持ち合わせていない。学校に通っていた頃に見た資料映像の発電所の記憶と、私は目の前のこれを見分けることができない。

発電所跡はやはり朽ちていた。錆の垂れた跡が目立つコンクリートの壁には、知識のない私にはあまりに複雑な計器類が、点々と顔を覗かせている。丸や四角の不連続な出現を横目に、私たちは崩れかけの通路に行く。天井がからうじて残っている部分の手前まで来ると、その先

は有刺鉄線で嚴重に囲われていた。防水布が幾重にも重ねられ、内部はおそらくテントのような状態になっているのだろうと推測できる。慎重に近づけば、テント構造の上部に取り付けられこっちを向いているライトが点き、私は目が眩んで立ち止まる。

その直後に、布の奥からであろう、くぐもった声が誰何する。

「どこの誰」

女性の声だった。

「いばらヶ丘から旅行中、厚意の物資提供に來た、男女ふたり」

冬一は淀みなく答えた。女性の声は少しの沈黙の後、語調をやわらげて告げる。

「……感謝する。こちらに敵意はない。入り口の北側にコンテナがある、置いていってくれるのならそこに」

「少し話せないか」

その言葉を遮って、冬一は訊ねた。

私は何か意図があるのか、分からなかったが、話したいことがあるのならそうするのがよいだろう、特別止めることはしなかった。再びの逡巡の後、女性は答える。

「……話せる。いま行く」

数秒後、ということはさっきまでいた場所は少し奥なのだろう、女性は入り口の布を除け、姿を見せた。

有刺鉄線が巻き付いていたのは、直線ではない造りの鉄柵と門扉だったらしい。長い鍵で門扉を開き、彼女は私たちをテントの中へ招き入れる。

「ありがとう」

冬一の言葉に彼女は頷く。はっきりとした吊り目の印象的な女性だ。沈んだ緑色と灰色の服を着ている。袖と襟から見える部分は、筋肉がぎゅちりとつまっていることが分かる。長い土色の髪をひとつに束ねて、後ろに垂らしている。固そうな黒いグローブで冬一と握手を交わす。背後のコンクリートの壁には、いくつかの銃が掛けてある。細くて長いから、これが多分、猟銃というもののなのだろうと、少ない知識から掘り起こした。

私は黙っている。冬一と彼女は話し続ける。

「必要なのは布と、それから発電機の部品だけなんだが」

さっきの壁と同じ、私には何があるのかわからないのか分からない金属や機械類の積み重なった空間を見渡し、女性は言った。冬一はそれを聞き、

ちらりと私のショルダーバッグを見やる。

「布ならすぐ用意できる。あとのほうは、状態を見ないと分からないけど」

女性は表情を崩し、きっと不器用な笑顔なのだろう、白い歯を少し見せて息を吐いた。

「ありがとう。部品と言っても、外装の一枚といくつかのコードだからな。適当に合わせても、まあなんとかなる。動物にやられたんだ。狩りの隙を狙われた」

説明しながら、冬一の視線を機械類の一部に誘導する。確かにそこには、一面が失われた箱状のものがある。

「狩りをするのか」

冬一は驚いた声で問う。女性はあっけらかんと見返す。

「おかしいか。わたしのようなやつなら、そこにまだ結構いるだろ」

声に棘はない。冬一は静かに、左右へ首を振る。

「おかしくはないよ。俺たちは初めて会ったから、珍しいと感じただけ」

「……そうか」

いくらか気落ちしたような、それはおそらく、私たちの通ってきた道にはもう彼女のようなひ

とがないことへの感情だ。

「布はどれくらい要る？」

「できれば、一メートルかける二メートル欲しい。二枚以上あれば助かるんだが」

「大丈夫、あるよ。持ってきてくれる？」

冬一は私のほうを見て言う。私はバッグを抱え、頷く。

「わかった」

私は施設の外に出る。発電所の駐車場だったのだろう、比較的開けた蔦や草のないスペースに、一旦家を広げる。骨格が開き、壁や屋根が張られ、窓が生じ、玄関がドアを噛む。私は毎度、家がまるで母の胎内で発生するのを早回しで見ているような気持ちになる。

しかし、畳める家は便利だけど、屋内の収納を家の外から直接いじる方法がないのは結構面倒だ。掃き出し窓から膝立ちで居間に上がり、押し入れを漁ると、布はすぐに見つかった。このあいだ夏用のタオルケットを仕立て直したときの余りだ。薄手のものと、タオル地のものがあった、迷った末に、両方二枚ずつ持って外へ出た。家を畳んでバッグに仕舞い、冬一のいるところに戻る。

「ありがとう」

意図的な微笑で迎える彼に頷き、私は女性に布を見せる。

「どっちがいい？ どっちでもいいよ」

女性は、一瞬驚いた顔をして、それから私の手元を見おろす。タオル地のものを一枚、薄手のものを、少し迷ったあと、二枚取る。

「感謝する。これだけで十分だ。発電機は、自分でなんとかする」

目礼を返して、私は冬一の背後に戻る。

「……なぜ、と訊かないんだな。前に、偽善か道楽か、わざわざ中央から来て物資を提供してくれた老夫婦がいた。あのひとたちはしきりに『どうしてタッサラルタの庇護を受けないんだ』と訊いた。わたしは、それを説明したところで彼らの理解は得られないと思って、答えなかった。彼らは諦めて、迎えに来た仰々しい武装へりに乗って行った」

女性は、大規模シェルターの名の軽やかな響き、外国の菓子とも楽器とも思わせる音を口にして、反対に表情を重いものに変えた。冬一は、自分へ向けられた問いには答えず、猟銃に視線を向けて呟く。

「議論を避けたのは、賢明だと思う。正しいかは、分からないけど」

女性はどうも何も言わなかった。

私たちはその場を後にした。

また何日か歩き、やっと山を抜け、開発された平地に戻る。県境はとうに過ぎて、道程は残り三分の一というところに来ている。

「クジラが来た」

私は、時折すれ違う、機能不全の中央政府が残り少ない人的資源の回収をさせている低空飛行船のエンジン音を聞いた。絶滅した鯨に似たあの飛行船は、平たく言えば、私たちをシュルターに連れて行くとするキャッチャーのアームである。

「声が聴こえる？」

問いに頷き、「姿は見えないけど」と付け足せば、同じく辺りを見回した冬一は「じゃあ少し急ごうか」と前へ進む。彼には、クジラの姿は見えても、エンジン音が聞こえない。空虚な地上に反響するあの摩擦音の遠吠えは、人間の可聴領域から少し外れているらしい。それを聞くような人間が、ここ数十年のあいだ、稀に生まれているという。私がそのひとりであることは、彼が音楽の道を諦めたことや、この長い家出と、何か関係しているのだろうか。

仮にそうであっても、彼の口から聞かないな

らば、私にはそれはないのと同じなのだ。

南を見れば、ここからでも望める。何百キロ先にあるのか、正確には知らないが、複雑な尖塔が密集し重なり合い、上へ上へと伸びていく、妙におぞましい——生物じみた——黒い金属質の構造物。山や雲よりも遠く、高い、私には想像もできない法則で組み立てられた、閉じた庭。あれをタッサラルタと呼んで各地域に一定数分配し、過去の有権者や有識者たちは、人類という種の管理保全を試みている。中では快適な暮らしがあると云う。見たこともないような娯楽が提供されると云う。タッサラルタから戻ったひとはいいないから、憶測と公報だけが、その様態を教えてくれる。

あそこにきくと、私たちの親たちはいるのだろう。母や父、祖母や祖父、いまあなたは、眠っているだろうか。目覚めているだろうか。眠りの中で、目を開いているだろうか。目覚めの中で、目を閉じているだろうか。私を見ているような、見ていないような、見えているような、見えないような、どっただか分からないが、どっちであっても構わない。

絶え間ない呼吸の音がする。クジラの唸りが聞こえる。私には分からない、広大な範囲を撫

でるシステムやプログラム、それらそのものの妄想する虚しい戯れが、あるいは隣を行く彼の思惑が、それらを想像している時間が、なにか、魂に必要な、重大な、荘厳な救いのように、祈りのように思える。ないものもあるかもしれない、あるものもないかもしれない。私にはまだ、不確かさが許されている。

隣にいる人間の心が分からなくて、本当によかった。

「もう少し先まで行こ、日没までまだある」

クジラの音は徐々に小さくなっているから、きっと進路は重なっていない。それを伝えても、冬一は用心深く先を急ぐ。

「高台の上まで出ようか」

脚の長さが違うため、彼よりもやや多い歩数を強いられる私は、軽く息を弾ませながら提案する。

「それいい。最高。今夜晴れる？」

「星はなー、あんまり見えないかもね。湿度高いから」

手のひらサイズの画面で予報を見れば、案の定、雲が厚く寄せてくるとのことだ。切れ間はなく、夜空は概ね灰色に覆われるらしい。

「うーん残念」

彼は天文学を、趣味的に愛着している。学ぶよりも鑑賞する目的で眺め、説くよりも謳う目的で、私に様々と語る。

「ゆうべのサンテリアとクッキーまだあるよ」

冷蔵庫の中を思い出して、私は提案する。彼は「食べる？」と問う。「うん」と答えれば、「じゃあチーズのなんか、サラダも作ろうか」と、私の好物を添える提案を返してくれた。

「わーい」

てろり、と諸手を上げれば、彼はまた吐息で笑う。

ワインと菓子、サラダで、空腹は十分に埋められるだろう。それ以上は飽食であり、必要以上であり、私は求めない。求めることができない。

欲望の上限が生まれてから、世界はずいぶんと呼吸のしやすい場所になったのだらうと思う。生命維持に最低限必要なレベル、そこから全体の五パーセントを上乗せして、怠惰に程近い緩慢な幸福感は感受されるらしい。研究によりそれが分かってから、新しく生まれた人類には、その値を目安にした欲望の上限値が設けられている。具体的には神経伝達物質の生成に関する器官のごくわずかな操作によって、使い切れない

いほどの財産や、無限の権力、不死の身体、永遠の快楽、そういった「度を越した」欲望を抱かない生物として設定されている。そのようにデザインされている。

そして、制限以前の、旧世代と呼ばれる人々は、既に九十八パーセントが寿命を迎え、残りの二パーセントは、数少ない稼働中の医療施設で穏やかに寿命を待っている。人間という種は、三百年前に比べて圧倒的に、「平和な」生物となったと言えるだろう。

何かを焦る必要のない暮らしは、時間の奔流の力強さや、生命の眩い輝きを奪ったのかもしれない。それでも、緩やかな川の水面で身をせせらぎにさらし、通り過ぎる魚を見送るような心が、すべてのひとのものになったのは、おそらく素敵なことだ。

生じる、あるいは過去に生じた、あるいは未来に生じるとされている、あらゆる現象のすべては、わずかな必須ノイズの上にそっと横たえられ、人々は子守唄を聴くように目を閉じる。閉じた瞼の裏にある、赤と緑が同時に見えるような、血管の奥のまぶしい血が、ただ自己が生きていることを説明し、ただ時間が流れていることを説明する。幸福な、いずれ訪れる死

までの安らぎのために。無意味な長い時間を、なるべく機嫌よく平らげるために。

そして、いま生きている人間たちは、皆それを、望んでいる。

十数日かけて行き着いた場所は、円柱の中がすり鉢状になったステージの痕跡だけが目立つ、白っぽい廃墟だった。

ひとひとりとしか行き合わなかった道に戻る気にもなれず、私と冬一はその日、だだっ広い廃墟の中に家を開き、眠ることにした。夕暮れまでのあいだ、近くの磯を歩き、生き物を探す。フジツボの仲間と苔の類、それから小さなアメフラシが一匹、見つかった。鳥はいない。虫も、去年よりは少ない。

「あのね、花探して、摘みたい」

フラフラと尖った岩の上を歩く。冬一は下の窪みにしゃがみ込んで、潮溜まりを流木でかき混ぜている。私の言葉にこちらを見上げた顔は、潮風に吹きつけられて目頭が赤い。心なし張った声で、彼は問う。

「摘んでどうすんの」

「ひとしきり、眺めて遊んで、それから飾る」

冬一は考え込むように視線を伏せる。

「何でもいいの」

「花なら、なんでもいいよ」

ややあって、「少しだけだよ」と私を許した彼は、目の乾きから逃れるように風下を向く。横髪が表情を覆う。

「うん」

岩から下り、彼に並ぶ。長い腕が伸び、私の短い癖ツ毛をぐしゃぐしゃと混ぜ、離れていく。水族館跡地に戻り、割れた巨大な水槽をくぐる。広げた家に入り、私たちはつつがなく夕飯を終える。順番にシャワーを浴び、ともに清潔な寝具に包まる。それで今日は、もう済んでしまった。

こんな日が来ることをずっと願っていた気がする。

こんな世界になる日をずっと待っていた気がする。

こんな日が来てしまっ、これからどうしようなんてもう思わなくていいんだと、誰かが言うてくれるのを、きっとみんなが待っていたような気がする。

先祖の記憶が、何らかの遺伝子に乗って私にもたらされているのなら、この感覚についてのみ、私は彼らに感謝したいと思える。直線の果てを探すような目ならば、もう閉じてしまった

ほうがいい。そのための眠りが、私たちにはちゃんと用意されている。終わることが決められている。

不安なんてもうどこにもない。ないじゃないか。

「冬莉？」

すぐそばに声が聞こえる。

嗅ぎ慣れたシーツの匂いがしている。埋めていた顔を上げ、寝返りを半分打つ。

見慣れた顔がこっちを見ている。

「とういち……………」

いずれ死んでしまう私は、いずれ失う目の前の彼を抱きしめる。泣いている私の背中を、彼は静かに撫でている。不安なんてどこにもないのに、眠れない私は、たったいまこわくて仕方ない。

声を上げて泣きじゃくる私を、冬一が引き寄せる。

隣にいる人間の心が分からない。いついなくなるかだって分からない。でも、分からないというのと、いなくなるということだけは、ちゃんと知っている。

「……こわいよなあ……そうだよなあ、……」

彼は何度でも私の背中を撫でている。安心の

ためにつくられた完璧な家の中で、静かで暖かいベッドにいる。優しいひとが言葉をくれている。それでも、それなのに。そんなだからきつと余計に。

冬一の心が分からない私は、泣きながら彼の背中をたどたく撫でる。私の心が分からない彼は、腕をぎゅっと回して、私の動きを止めようとする。私がそれをやめないことが分かる、彼はおでこを私の頭に寄せて、力を抜く。

「だいじょうぶだよお……………」

自然と零れたというふうに、冬一は言う。

私が泣き疲れて眠るまで、私たちは、ずっとそうしていた。

一晩明けて、外は透明な露であたり一面が輝いている。私は、かすかな熱を持って重い頭を、冬一の膝に置いて、静かにしている。冬一は広い掃き出し窓に向いたソファに体を預けて、草原の地平線の辺りを眺めやる。彼が好む、ミルクをたっぷり入れた珈琲の甘い匂いがしている。

どこへでも行ける。だから、どこに行けばいいかなんていう問いに意味はない。何でもできる。だから、何をすればいいか考える必要はない。どこに行きたいか、何をしたいか。

それが良いか悪いか、おまえではない誰かには

どのように思われているのか、そういった視点ではない。おまえの欲求がどっちを向いているのか。その判断がひとりできないうちは、俺はおまえと一緒にいるよ。起きた私に今朝、冬一はまず、そう言った。

私は守られている。守られているあいだに、彼が私に身につけるよう求めているすべてのものを得て、私は別れに備えなくてはいけない。そういうことが分かった。すぐにはできないだろう。簡単でもないだろう。でも私はそのようにしたい。そう伝えただけで、冬一はずいぶん力の抜けた顔で笑ってくれた。だからこれらのどの瞬間も、私には価値がある。

熱が下がったら、今度はまっすぐ西に、もしくは東に、海に向かってみようか。こんな時代でも魚は獲れるから、あの女性のようなひとが残っているかもしれない。そう考えて、「海に、」までを口に出したら、冬一はその先を察したらしい。ふ、と笑んだ息を零す。

「海、少し遠いよ。川沿いにゆっくり行こう」水族館に、私は行きたかった。静かで、ちょっと設備とか、換気とかの、ホワイトノイズがして、暗くて涼しい、ひとのいる、でもいすぎないような。生きものがたくさんいて、でも言葉

は少ないような。そんな場所ではもはやないことを、とうに知っていたのに、それでも目指したのは、押し殺しきれない郷愁のためだったのかもしれない。海に行こうとするのも、そうかもしれない。

冬一は気付いていたのだろうか。動じた様子もないその表情は、私を安心させようとしている。私はその意図に安心してしまう。

「うん」

日が昇るらしい。露が消えていく。

草はつやつやしている。冬一はきれいだねと言った。私はそうだねと答えた。

詩

詩

最優秀賞 記憶

能代市 堀内和佐

例えば

昔読んだ少女漫画の結末

いつか見た夢の続き

失くした腕時計の冷たさ

一度だけ聴いたラジオのリクエスト曲

そんな儚さとか

例えば

真夜中の国道沿いをつっ走る反抗心

風でくるくる回る扇風機みたいな怠惰

ヒグラシの鳴く夕方にこらえた涙

夏祭りの帰り道みたいな寂寥

そんな季節とか

例えば

真上を翔ける飛行機みたいな自由

吊るしたばかりの風鈴の鳴るときめき

習い事終わりの澄んだ空

遠くで鳴っている遮断機みたいな無関係

そんな気まぐれとか

例えば

渡せずじまいの手紙

伝えられなかった「ごめん」

言わなければよかった「好きです」

言っておけばよかった「大好き」

そんな後悔とか

例えば……

決して忘れられないことは

心の中にずっと秘めていて

忘れてしまいたいことも

本当は心のどこかでは愛おしくて

今しかわからない感覚も

もうわからなくなってしまう感情も

今はまだわからないことも

きっとその意味を知るときが来て

有意義なことも

無意味なことも

全部ぜんぶ大切に抱きしめて

いつか私は

大人になるのか

奨励賞 物言わぬ花

能代市 渡辺正子

わが家には

およそ不釣合な

胡蝶らん

人待ち顔に

玄関に鎮座する

歳をひとつ重ね

老いるだけの朝

心配ばかりかけました

長生きしてください

控えめなメッセージカードに

添えられ届けられた

温室育ちではないが

野の花にもなれず

都会の空に漂っている

そんなおまえが

選んでくれたもの

三連に規則正しく花が並ぶ

冷たい能面に見える

顔を近づけてみても

愛想笑いもせず

ツンとしている

何かを託されたかのように

ただ 私を見つめるだけ

造花のようだと

訝った出会い

ずっと咲き続けると

いつの間にか

愛で 慈しむ

覗き込むのくり返し

終わりそうにない長い夜でも

いつか必ず朝は来る

塞ぎ込む心を潤した

三カ月近く無言のまま…

やがて

役目を終えたかのように

ポトリ 昨日を

ポトリ 憂いを

仕舞には

ポトポト滴る

おまえの汗のように

落ちて 落ちた

奨励賞 ふりしきる ゆきが

秋田市 浅倉 紀 男

ふりしきる

ゆきが。

ふりしきる

もりを

かすませ

ゆきが

ひとかけを

けて。

いぬの

とおぼえが

きえる。

ふりしきる

ゆきの

そらを

ついて

とぶ

わたりどりが

かすむ

そらに

きえる。

ふりつもる

ゆきを

ふむ

あしおとが

しずむ

じぶんの
みみに。

奨励賞 八月が遺した

秋田市 加藤 舞 雪

浴衣の袖を濡らしながら

返された夏の命

見つめる瞳

水面に

金魚が起こしたのではない

波紋がひとつふたつ

みつつ

わたしの爪 海 ざざーん
ラメが光る
エメラルドグリーンの小さな夢
太陽にかざしたら

きれいだろなって思っていた
でも今年の夏は雨ばっかだった

あの人の足元 線香花火 ぱちり

火花が弾け飛ぶ

銀朱のまあるい粒

先に火がついたのはあの人

先に落ちたのはわたし

先に言うのはどっち

友の視線の先 金魚 ぴちゅん

逃げ回るように泳ぐ

おわんの中のまっかでやわい

「いっぱい 生きてる」

入選 晩夏を歩く

東京都（東成瀬村出身）

佐藤清助

陽が稜線に傾き
空が痛いほど赤く彩る
居座り続けた熱風が凪ぎ
蒸された街は息をひそめる
私の懸命に打ち続ける
拍動とともに
残り陽が失せて行く

微かな人熱ひとあつもない閑々とした
灯の点かないお屋敷
栄華の残照か
広大な敷地で黙し
シルエットとなって立つ
櫓けやきと黒松の巨木

街のはずれ
犇ひしめき合って建つ
灰白く光る即成組み立て住宅

せかせか帰って来た女
ヒステリックに子を叱りつける声
生の声で応戦する子
母子のキャッチボールが続く

廃墟と化した洒落た名のアパート
軒下になら下がる
干からびた洗濯物
誰が蒔いたのか
夜陰で笑いかける夕化粧の花
陽は稜線から落ち
街の小景を
墨絵に描いてゆく

待ちかねた草虫
四方の静寂しじまを破り
命の限り謳い唱和する
連れが 昔日を呼び戻したのか
カラスウリの純白な花を手
少女の品を作り
街路灯の下で微笑む

翅音しおんを響かせ灯を輪舞する
褪あせた一匹の蛾
慌てた老猫 のそりと路傍の植え込みに潜り
威を振るい身構える

街は晩夏の息吹
私は空っぽの懷に夢幻を入れ 歩き続ける
遠くで花火の音がする

入選 まつりの朝

井川町 小林 康子

日常を取り戻すため
つかの間日常を放つ
手渡されたものを
手渡してゆく営み

浅みどり色の五月の風が吹き

熊野神社の幟旗が風の歌をうたう

願人踊りと民謡手踊りを

奉納するまつりの朝

子供らが集まる

おとなが集まる

熊野神社前

遠藤さん宅前

田代さん宅前

伊藤さん宅前

十王堂前

透明な陽をあびて

神輿を引き

止まり

踊る

凜と背筋を伸ばし前を見つめ

男の子が口上をのべる

村に子供たちのかけ声と

笛と太鼓の音が流れる

満ちてくるものに宿るぬくもりは

記憶のなかに生きつつけ

空からのひかりが音になる

変わることなく紡がれてきた風景が

鮮やかな色をおび

願人踊りの厚化粧をした父に

抱かれた幼子が泣く

大きな祭うちわがひかりの粒を揺らし

オブラートに包まれていた

村の静けさが弾ける

まつりの朝

入選 定年の朝

横手市 菜原俊輝

小鳥が囀る朝

今日は花見にいこう

山裾に広がる林檎畑

桃色にかすむ白い花の海へ

しがらみのない朝

今日は電車に乗ろう

肋骨線に乗って

山の山の奥へ入っていくのだ

重力のない朝

今日は歩き続けよう

羽州街道を南へ

歴史の人になる

いつまでも眠い朝

今日は鮎釣りに行こう

縄張りを荒らし

意地悪な人になる

猫の鳴き声がする朝

今日は紅葉狩りだ

一揆のように燃えあがる山々

湖に映える人になる

無人駅に立った朝

今日は人混みを探しにいこう

市街に出て人気店の前に並ぶのだ

人いきれの中で過ごす

すがすがしい目覚めの朝

今日は日本海を見に行こう

夕日の一滴を

水平線に見送るのだ

寒さがやってきた朝

今日は冬囲いをしよう

男結びができなくても

囲いの人になる

仕事にいけない定年の朝

今日からは

本物の季節の中で

雪の伽藍と生きる

入選 たくさんさんのそら

能代市 桐越 佑夏

あなたはなんという名なの

無知のわたしは尋ねる

その者はとても眩しい

恥ずかしがり屋で隠れることがある

その者が立ち去る時

顔を真っ赤にして名を覚えてくれた

あなたはなんという名なの

一つの知識を持つわたしは尋ねる

その者は体格が変わる

一度姿を消してはまた現れる

その者が立ち去る時

姿を消しながら名を覚えてくれた

あなたはなんという名なの

二つの知識を持つわたしは尋ねる

その者はたくさんいる

まるで兵隊の行進のよう

その者が立ち去る時

一番輝く者が名を覚えてくれた

あなたはなんという名なの

三つの知識を持つわたしは尋ねる

その者は綺麗だが素早い

気づいたらいなくなっている

その者が立ち去る時

早口で名を覚えてくれた

最後に第一の者が覚えてくれた

今までの者の他に

たくさんの方が存在すること

わたしの知らない知識がたくさんあることを

全てを探しに

わたしはそらへと旅に出る

入選 心臓ノオト

秋田市 浅野

雛

雲一つない青空って
なんだか人工的
地面に近いほど色が薄くなる

地球のカーブに沿って誰かが曲げた
水色のプラスチックみたいに
不透明な白になる

未だ慣れない濃藍のスーツ
張りのある生地にジュースのしみ
みんなおんなじようなスーツだから

私の、って印になったと思うんだけど
こういう個性は
面接ではきつと不採用

ちっとも変化のない空に飽きたら
普段は使わないお客さん部屋で
光の中をきらきら浮かぶホコリを観察

…そのなかに

わたしの知らない

神様がいらっしゃって…

タイトなスーツのおすましに疲れたら

畑の土の中のひんやりしているところまで

素足をもぐらせて休憩

…わたしのなかへ

そのしずけさは

ゆっくり降りてくる…

そういう日の夜は

湯舟につかって目をつむると

久しぶりに

心臓の音が聞こえてくる

グリーン賞 絵本

能代市 高橋 楓 佳

書店で見つけた懐かしい本
幼い頃何度も読んだ絵本
未だ読まれる物語

ふと気が付いた

段々絵付きの本は読まなくなり
読むのは文字ばかりの本

少しだけあの頃に返ろうか
そっと手を伸ばしたその絵本
硬い表紙が懐かしい

ぱらぱら捲った物語

所々忘れてしまったページがあった
こんなページがあったなと懐かしむ

幼い頃は分からなかった言葉
高校生になった今なら分かる
解釈の違いでまた楽しめた

名前を呼ばれた

きっともう帰るのだろう

ぱたんと本を閉じ元あった場所に戻した

振り返って表紙を見てみた

大好きだった絵本にさよなら

また何処かで

短
歌

短歌

最優秀賞 濁流

仙北市 大山 文穂

時間雨量いかばかりなる屋根を打ち土を叩きて降る雨の音
降る雨の尋常ならず譬へなる「バケツ返す」も誇張にあらず
雨の中音されぎれに聞える防災無線の避難勧告
濁流に一夜過ぎし我が家の高床なれば水退くを待つ
穂孕める稲田浸しし濁流に流れゆくものあれど術なし
洪水に明けたる昼の暑きなか水漬きし車庫の泥を掻き出す
改修の進まぬ川に近く住み今年二度目の水難に遭ふ

奨励賞 花梨酒

由利本荘市 五十嵐 勝子

四十のよはひに癪を得し夫のいく度となく危機をしのぎ来
厨房に時を重ねて香りたつ花梨酒こよひ夫と楽しむ
亡き母の味を好める夫のため煮物に砂糖ひとさじ加ふ
リウマチの遺伝子母に受けつぎし夫は梅雨の日々をし厭ふ
食細き夫とわれとの日ぐらしに捨つる食材増ゆるもあはれ
庭に摘む茗荷に味噌をつけて焼く夫と二人のけさの食事に
病み易き夫と暮して金婚を迎ふるもまたえにと言はん

奨励賞 晩年 それぞれ

大館市 小林 鏖悦

生業は炭焼きなりと山小屋に語る初老の屈託の無し
夕食後を安値の不安を口にして初冬の納屋に老は山の諸選る
三反歩の棚田耕し八十の老がうからの飯米をつくる
寡黙なる老農の手の骨太く爪の先まで土の色染む
洋菓子屋に看板替へたる店の奥婆さまが小さく客を見ている
寄り合えば儲け話の弾むなか清貧孤高老のひとりは
この家に住む人あろうか吾の死後炎熱の屋根にペンキ塗りおり

奨励賞 家守るかたち

横手市 佐々木 ヨリ子

折をりに火打ち石うつ義祖母なりきその一瞬のコツをつかめず
跡継ぎの吾のをさな子にゆつたりと添ひ寝す祖母の家守るかたち
戦ひに果てたる次男は仕合せとふ祖母の供へし大き牡丹餅
雨戸繰り先づ目に入る白芙蓉八月六日祖母の命日
仕込む事無くて古りたる味噌樽の蔵守る祖母に見えて安けし
具をなべて細かく刻む元日の納豆汁は祖母の直伝
モノクロの紬の衿をスカートに仕立て直して祖母を纏ひぬ

入選 旅愁

由利本莊市 熊谷すが子

隠しだて暴かるごとアンコール・ワットの遺跡発見されき
無常なるただなかにして石城の一角すでに石くれとなる
ひしめきてバイクの走る夕街に重なりあひて警笛響く
片言の英語に物を売る子らの作り笑顔を寂しむわれは
水上に暮らす人らの貧しくて檻樓のごとき洗ひもの干す
観光のホテル明るきその裏に粗末なる家すき間なく建つ
みづからの国の明日を説くガイド子らの教育の肝要を言ふ

入選 平素のまんま

鹿角市 沢田欣之

肝臓癌巣くう弟「延命は無用」とさらり言うが悲しき
骨にまで癌が転移の弟に妻すでに亡く子とも別れて
痛み止め飲んで眠れる弟の無呼吸長くはらはら見つむ
眼は窪み枯れ木の如き弟の癌恐るべし腹大鼓腹
永別の宵に二人で校歌をば低く歌いて涙流しぬ
永別の夜は両足さすらせて亡き妻語り弟逝きぬ
身は癌に蹂躪されるも魂は平素のまんま弟逝きぬ

入選 「特養」の母と

秋田市 渡部栄子

名前記し許しを乞うて母を訪うちさき束縛いつも感じて
部屋までの長き廊下を歩きながら胸の騒立つ母を見るまで
笑みたたえ家に在るよに迎えるひと月ぶりの母変わりなく
真っ白の髪ふんわりと梳きてやるいつも手櫛よと母は照れおり
「特養」のめぐりに咲けるあかまんま束ねて母のコップに飾る
耳とおき母と筆談吾にあて生まれてくれてありがとうと記さる
九十五の母に言われるありがとう吾の余生にともしびとなる

入選 クニマス還る

男鹿市 三浦善隆

さかな君のお墨付きにて知られたる西湖より来ぬクニマスのニュース
クニマスの望郷の念叶いたり乙女の像のまつ田沢湖に
国策に抗わずしてクニマスの絶滅したる戦時を思う
えぐり舟もて田沢湖にクニマスを獲りて幾代なりわいとせし
クニマスを網いっぱいに獲りたるとう七十年前を語り部の言う
還り来し固有の魚クニマスの群れるは何時ぞこのみずうみに
住む水に馴れ親しめる迄遊べ未来館なるクニマスの宿

入選 追悼の席に

井川町 遠 藤 恵美子

父の顔知らざるわれも頭垂る八月十五日追悼の席に
標柱を見つむる陛下の背に滲むいくさを憎む心の強きを
ひたすらに平和願いて七十二年陛下の胸にいくさの消えず
戦死せし父の無念さ思いつつ国の行くえを愁うる吾は
遭児われら重き荷を負い生き来たり未だ消えざる深き悲しみ
母の愛ありたればこそ耐えぬきぬポケットの中の写し絵さする
戦争の足音にわかに響きくる不戦の誓い揺らぐこの年

入選 折り鶴

秋田市 長 尾 洋子

祈りこめ折る鶴一羽手の上で翼を広げ飛び立たんとす
柔らかな細き指で折る千の鶴わらべは平和の尊さを折る
順序よく折り目にそいて女孫たたむ小さき指より生れる折り鶴
孫と折る鶴だまし舟捨てがたく我が抽斗の宝と眠る
広島は七十二年の夏折り鶴をより高く掲げ偵子のブロンズ
長崎が世界最後の被爆地になれ鎮魂の祈り追悼の折り鶴
教わりてオバマ氏の折る四羽の鶴核なき祈り恒久平和

入選 薄ものの服

にかほ市 阿 部 良子

ビバルディ聴きつつ見上げた窓におのづから散る桜のはなは
膝病みて外出まなならぬ一ヶ月日々の桜を映像に見る
年老いしわが身すなおにうべなひて杖をつきつつ往来をゆく
病院の待合室をみわたせば老いの多くはスニーカー履く
はつ夏の通りのカフェに憩ひをり薄ものの服風に吹かれて
御社の木立ちは風のしづもりて境内にうごく影ひとつなし
くれなるの前かけつけて石地蔵肩に止まれる蝶にほゝゑむ

入選 フェリー紀行

五城目町 石 井 美智子

出港の汽笛に旅の始まりぬ日本海へと舵とるフェリー
フェリーにて朝の港を出て行けば暫し鷗の伴走ありぬ
海原に白き航跡描きつつ旅情を乗せて悠悠進む
遠くある岬の影を指さして恋人達はなにか語らふ
船上に曲を奏でしピアニスト深紅のシャツに神秘の香り
船上のテラス席にて乾杯の一団ありて笑いさざめく
浴場の窓より望む海原に沖つ白波揺蕩ふ漁船

俳
句

俳句

最優秀賞 冬の海

由利本荘市 佐々木

豊

風紋の鱗を纏ひ冬の浜
荒くれて妥協許さぬ冬の海
飛沫中冬の灯台沖睨む
冬の時化ロシア語刻む遭難碑
冬怒涛戌辰の役の激戦地
断崖に追ひ詰められて浪の花
猛るしか術なき冬の拉致の海

奨励賞 縄文賦

秋田市 和田 仁

山笑ふ岩偶笑ふ羽後の国
にびいろの石斧みちのく風光る
蒼天を飛び交ふ鋌^{やじり}つばくらめ
鎮魂や屈葬の森青葉して
縄文の丘風の丘星飛べり
寒波急縄文土器に火の匂ひ
煌々と環状列石冨返る

奨励賞 太平洋戦争

秋田市 種 村 聖巴子

赤紙に翻弄されし田植どき
青嵐振り向かぬ子を見送れり
千人針の固き縫玉さくらの実
古すだれ母は国防割烹着
戦争ごっこ水鉄砲で立ち向ふ
粽結ふ母はいくさのことはず
八月の空は今でもきな臭し

奨励賞 花火

由利本荘市 工 藤 五十六

鎮魂の三尺花火雄物川
戦なき日本の空の大花火
老老の介護に聞こゆ遠花火
どの顔も花火の色に染まりけり
花火師の手を挙げ測る風の向
遠花火湯舟に手足伸ばしけり
手花火のフィナーレ家族一斉に

入選 秋風挽歌

由利本荘市 堀 川 貞 子

父病みて無念の窓や白芙蓉
医師を待つ点滴の音秋時雨
握る手の力は尽きし秋挽歌
父拓く千枚田なり暮の雪
粗土は暗渠のごとき夏の夢
水飲めぬ父の絶筆青林檎
亡き父の角膜譲る白桔梗

入選 夏の田沢湖

由利本荘市 佐々木

成

空よりも蒼き田沢湖夏に入る
奥羽嶺の抱く田沢湖緑さす
郭公の声澄み渡るカルデラ湖
クニマスの絶えし田沢湖梅雨滂沱
辰子像に騒立つ波や青嵐
蝉時雨廊下の軋む渦分校
湖暮れてキャンプの村の灯が点る

入選 終戦日

秋田市 田口穂心

遺骨なき新盆迎ふ夕間暮れ
空襲の予告のビラや実はまなす
逃げ惑ふ防空頭巾玉の汗
降り止まぬ油の雨や髪洗ふ
こもごもにほつとした声終戦日
一昼夜燐り続く夜光虫
空蝉や首なし地藏又触るる

入選 身籠り

秋田市 齊藤千哲

春を来て母に抱きつく身重の娘
身籠りの決意の目なり初桜
胎の子に届けと朝の湧清水
無カフェインの珈琲買うや更衣
明易や動く動くと撫で応え
母と縫う子のおくるみや夏はじめ
臨月の髪をきりたり藍浴衣

入選 夏

秋田市 石田幸栄

眼光の鋭き一手白扇子
蛭獲て淋しさを得る少年期
告知する医師の慈眼や梅雨の空
食膳へ呼ぶ声聞こゆ夕端居
下町に素顔の女水を打つ
心太挫折経てなほ一本気
お結びは祈りのかたち原爆忌

入選 夏の川

秋田市 川尻弘子

郷土史の葉をひらく夏座敷
みづうみの白き砂浜赤とんぼ
丸木舟にクニマスの夢秋の声
対岸に人動きけり大花火
涼しげに水の回廊くぐりけり
電球の点かぬ工場姫女苑
速報に水位見守る夏の川

入選 父と鮎の詩

大潟村 佐藤豊

小鮎来て笑顔溢るる父の川
若鮎のキラリキラリと躍る影
鮎釣や手作り竿に馬尾の糸
鮎に父の優しき糸の張り
鮎掛の自慢ばなしや化粧塩
吸物に弁慶刺しの香魚かな
落鮎の梁にまぶしき子吉川

入選 秋田点描

秋田市 岩谷塵外

老鶯をまぢかに妙乃湯に浸る
田沢湖は大きな鏡星月夜
夏つばめ奈曽溪谷を逆落とし
若葉映ゆ出壺は熊の水飲み場
男鹿三山墨絵ばかりに霾れり
ほとぼしる男鹿の棚田の落し水
小安峡どこも紅葉の万華鏡

入選 夏から秋へ

にかほ市 宮本秀峰

凡常に過ごす晩年枇杷啜る
子らの声なきふる里の蝉しぐれ
老鶯の声透きとほる過疎の村
廃校に風の囁く今朝の秋
村中を黙らせてゐる残暑かな
秋の蝶縫れて影を零しけり
汚れなき鳥海山の空雁渡る

入選 秋田湾春秋

秋田市 加藤一弥

海神の道一筋に初日影
北前船水脈はまぼろし春の湾
男鹿三山翠黛なして盆の波
玫瑰は語らず空襲ありし街
新涼や湾に漁る船の数
秋夕焼け鳥海男鹿を指呼に置き
稲光り包み隠さず日本海

入選 駒踊

藤里町 田中翠

少年の齒並び清し駒踊
馬具飾りぶつつけあって駒踊
天上の御霊へ跳ねる駒踊
駒踊草履とことん飛び跳ねる
少年のいなく空や駒踊
変声期越えていなく駒踊
家を継ぎやがて町継ぐ駒踊

グリーン賞 含羞草

秋田市 山名熾火

片栗の想ふ分だけ俯きぬ
名に負けぬ天使は春の福寿草
祖母の笑む隣に飾る霞草
目立たぬも一途に思ふ藍微塵
藤棚の下から眺む日の光
青春の一ページなり含羞草
残り香のやうに漂ふ金木犀

川

柳

川柳

奨励賞 たんぽぽ讃歌

秋田市 小畑 寒丈

梅雨晴れ間たんぽぽが咲く母の面おも
名の由来テポ・タンポポ鼓の音
散歩みち路傍の花に向く視線
ありふれて本意じゃなかるその位置は
だとしてもその活力を見習おう
海の日もなお一面の鼓草
青空をめざす絮毛を追いかける

奨励賞 がっこちゃこ

五城目町 石井 トモ子

赤い靴はいたらジャンプするわたし
がっこちゃこ笑いの中で北は雪
春の駅飛びたってゆく孫の靴
家族みな巻きこむ孫の反抗期
爽やかに家族の色になってゆく
とろろ飯今日もあなたに騙される
身の回り支えるものに家族の輪

奨励賞 やさしい距離

大仙市 佐藤 啓子

くすり指小さな手錠はめられて
曇らない鏡多情を剥き出しに
雨柱 連理の枝が揺れている
向き合えば緩んだ箍を庇い合う
またひとつ記憶の欠片編むように
プチ充電やさしい距離を取り戻す
偕老の契り重ねてゆく分銅

入選 日々のうた

秋田市 石田 幸栄

今日の風日の暮れぬうち捉えたい
明日あると思つて植える花の種
こぼれ種落とした涙花になる
すがつては碌なことなし戒める
生きている今がやっぱり花盛り
心配をしてくれる人いて元氣
愚痴吐けば道狭くなる花の道

入選 寄る辺なき時代

秋田市 谷 口 心平

ひと事ともう思えない核とテロ
このままでいいのだろうか海も病み
少子化へ ドミノ倒しが止まらない
孤立死のはなしに涙するばかり
あの頃に還してほしい蒼い空
暮らしにはじんわり増えてくる負担
寄る辺なき時代に挑むものは何

入選 弁当の詩

大潟村 佐藤 豊

海苔弁の蓋に張り付く妻の愛
土用の日鰻重になる土方弁
二日酔い梅干二つおおくなる
肉じゃがの残りが夕餉語りだす
弁当の色どりみちる妻のうた
山海の旬のいろどり日本晴れ
弁当が我が家の節目よく語る

入選 大地に謳う

大潟村 池田 郷太郎

干拓の大地に苦勞背負い込む
田植終え無限の空に夢馳せる
がむしゃらに妻と走った畦の道
夢を追う大地拓魂でんと据え
土に生き泣いて笑った日焼け顔
生涯を賭けた田んぼが涙ぐむ
究極の趣味と言いつける米作り

入選 強烈なパンチ

五城目町 齊藤 一輪

太陽の恵みとワルツする野菜
美しい自然と調和して日本
滝壺の中かと思う空の雨
自然から貰うパンチの強烈さ
まばたきの様何もかも奪い去る
人の手の魔法知ってるボランテア
祈る手の先へ決意の応援歌

入選 若あゆ

秋田市 菅原 浩洋

若あゆの命弾んで腕の中
このボタン押して私も羽化します
背に受ける風を味方につけておく
美しい灰になるまで化粧する
この人と決めて歩んだ道だもの
びしょ濡れになって指紋を消している
恋一つ畳んで夏を締めくくる

エ
ッ
セ
イ

エッセイ

最優秀賞 おじゃれこ

湯沢市 横山 章子

私の生まれ育った羽後町（新成地区）^{にいな}では迎え火のことを「おじゃれこ」と言い、お盆の八月十三日から十六日の送りの日までの四日間と、^{はつか}二十日盆である二十日にも門口で薪を焚く習わしがある。

私が子供だった頃、家ではお盆が近づくと祖母が西馬音内の朝市「通称・まちの日」に出す品物の準備で大忙しだった。

「まちの日」の朝は、まだ夜も明けきらない二時頃には畑に野菜を採りに行く。人参、枝豆、菜っ葉や芋の子など多くの野菜をまとめていた。他にも味噌や味噌漬、漬物等がリヤカーの荷台に空き間なく詰まれた。四時頃になると三十分程の道のりを二人して出かけるのだった。お得意さん回りで品物の大半は売れてしまう程の盛況だったと言う。祖父は一足先に帰るが、祖母は稼いだお金でお盆用品や魚、砂糖やお菓子、

日用品等を買いて求めてから帰ってくるのが定番だった。

お昼過ぎになると、祖父は私をまちの下駄屋に連れて行ってくれた。砂利道なので自転車の後ろの荷台に私を乗せて押してゆくのだ。店には所狭しと新品の下駄がびっしり置かれていたので迷ってしまう。やっと気に入った品物をつつけ、今度は提灯屋に行く。二つの買い物を済ませるとかならずイチゴ氷を食べさせてくれる優しい祖父だった。

十三日はいつもより早目の夕食となる。食事を終え、浴衣を着せてもらい、新しい提灯を持ち、新品の下駄を履く。家族がそれぞれ供物や水、お茶、線香や蠟燭を持ち、お墓へと向かう。各家々からも人が集まってくるので、暗闇だったお寺の境内が急ににぎやかになる。夜の帳惟がおりる頃には大勢の人達が来て、所々に明かりが灯るので、まるで螢が飛んでいるような幻想的な世界へと変ってゆく。カタカタと地面を歩く下駄の音、一心に合掌する姿、小声で話し合う人々など、私にとっては物珍しさと怖さの混じった不思議な一時だった。

帰宅すると、祖父が「おじゃれこ」の用意をして待っていてくれた。木材は適当な大きさに

切られていて、新聞紙や杉の葉を下敷にしその上に木がくべられる。火がつくとパチパチと音がして小さな火柱が立ち、夜空に向かって火の粉が舞い上がる。そんな中でやる花火が「おじゃれこ」のもう一つの楽しみだった。

湯沢市に居を移した私に、「おじゃれこ」への思いが一変する出来事が起こった。二女が夭逝したのだ。我が兄への追悼の思いがより一層深くなって迎えるお盆は、無性に悲しみと虚しさが入り混じるものとなった。夫と娘とで「おじゃれこ」を焚く。迷わず我が家に辿り着けるようにと願ってはいるが、三人とも無言で燃えさかる炎を見つめている。娘が「希央ちゃんに届きますように」と言いながら線香花火に火をつける。夫はタバコを燻らせながらそれを黙って見ている。そんな年月をずうーと過ごしていた。

時は流れ、小学生だった娘も成長し家を離れて暮らすことになった。そんな時、またしても我が家に不幸が襲ってきた。

二〇一〇年八月、あの年の夏は猛暑だった。そんな中、私は夫を車に乗せて毎日病院通いをしていて。点滴をしてもらう為に、である。その年の二月に主治医からは、夫は「お盆までは

もたないだろう」というショックな宣告を受けていたのだ。勿論本人は知らない。しかし、予想以上に生命の灯は細々ながら消えることなく、燃え続けてくれた。点滴は一日二〜三時間かかる。でも、入院するとは決して言わない。もしかすると、入院したらこれが最後になるかもと本人はわかっていったのかも知れない。

八月に入ると、暑さのせいばかりとは言えない程に体が衰弱していった。それでも食べることは食欲な人だったので頑張って口に入れようとした。しかし、本人の思いとは裏腹に食欲は細くなる一方だった。また病院から帰るとすぐ床に臥す日が多くなり、眠っている時間が増えるようになってきていた。

日毎に弱っていく夫を心配しながらも、私はお盆の準備や「おじゃれこ」の木材を買い求めに盆市に足を運んだ。日常の生活と夫の看病が重なる日々が続いていた。

十三日、昼間に娘とお墓参りをし、夜には二人で「おじゃれこ」を焚いた。次の日も――。夫は部屋で床に臥している。口数も少なくなり、痩せ細った体で眠っている姿を見ると、言いようのない不安と恐怖が広がっていった。

十五日、とうとう恐れていたことが現実となっ

た。苦しかったのだろう。自分から入院すると言い出したのだ。私もその晩病院に泊った。彼は家にいた時より安堵の表情が見えた。翌日も私は一緒にいて泊った。

その日は横手の送り盆で、夜に花火が打ち上げられていた。五階の病室からはその様子がよく見えたので、夫をベッドから起こし、窓の近くの椅子に座らせた。そして二人で窓越しに夜空を見上げていたが、ふと彼の横顔を見て愕然とした。あんなに大好きな花火なのに、目はうつろで表情も冴えない。座っていることさえままならないその姿にしばし呆然とし、急いでベッドに連れて行き、休ませた。

あの年だけの二日間、「おじゃれこ」は休むしかなかった。今まで生きてきた中でも忘れ難い胸のつぶれる思いの一つである。

私の幼い頃は、お墓参りは家族が揃って夜になってから行くことが当たり前だったが、今は少人数で昼間に行くという光景を目の当りにする。これも核家族や高齢化の影響だろうか、時代の推移を感じる。そういう我が家も例にもれず日中に実家にも行き、二つの墓参りをする。だから「おじゃれこ」の時間までいることはできない。祖父母たちには申し訳ないと心の中で

許しを乞うている。

今、近隣には沢山の住宅が建ち並んでいるが、我が家のようなお盆の夜の姿を見かけることはない。

私は娘と一緒に今年も玄関前の同じ所で赤々と燃え盛る炎を見つめたのだった。

奨励賞 音楽の力

東京都（東成瀬村出身）

佐藤 清 助

「小さな木の実」 ビゼー 作曲

海野洋司 作詞

石川皓也 編曲

小さな手のひらに一つ
古ぼけた木の実 握りしめ
小さな足跡が一つ
草原の中を駆けてゆく
パパと二人で拾った
大切な木の実握りしめ
今年 また秋の丘を
少年は一人駆けてゆく
小さな心にいつまでも
幸せな秋は溢れてる
風とよく晴れた空と
暖かいパパの思い出と
坊や強く生きるんだ
広いこの世界お前のもの

今年また秋が来ると

木の実はささやくパパの言葉

私がこの歌と出会ったのは、三十年ほど前の秋の日のことである。

連日、帰宅時間が遅く睡眠時間も少なく、私は肉体的にも精神的にも疲れ果て、今でいう睡眠負債を抱え頭もボーとして一日でもよいから休んで眠ってみたいと考えているような日々だった。

でも、休むわけにもいかず「エイ、ヤー」と自分自身に気合を入れて出勤することにした。

どんなに気合を入れてみても、やはり重いカバンは重く、ダルイ身体はだるく、私の足取りは、ドタリ、ヨタリと半酔っ払いのように見えに違いない。

マイナス志向を身体に充滿させながら最寄りの駅に向かって一歩前進、半歩後退しながら歩いていると、通勤路にある小学校で合唱祭が行われていた。

澄んだ美しい子供達の合唱が聞こえてきた。思わず立ち止まり、その歌声に聴き入った。

聴いている私の魂が揺さぶられた。心に染み入り、心が洗われるような、哀愁と清澄さを感じさせる歌だった。

驚いたことに、しばらく聴いているうちに突如として、私の目頭が熱くなり、涙がこぼれてきた。悲しいわけではなかった。何か、この瞬間、遠くなりつつあった子供のころへの郷愁を呼び起こさせ、生きる喜びが湧いてくるような感じがしたのだった。

すごい歌だ。何という曲だろうか。知りたい。

当時大手塾の校長職と塾教師を兼務していた私は、塾生である子供達に、うる覚えの歌を口ずさみ聞きまくった。「小さな木の実」という歌であることが分かった。

私は、それから間もなく、レコード店でCDを買い自宅に帰り私の家族にも聞かせた。もちろん、通勤の往復三時間の電車内は授業の教材研究とともに毎日、何回もこの「小さな木の実」を聴いた。

「このごろ、急に元気になった感じがする」

職場の教師や子供たちが、私に対して誉めことばを述べてくれた。

私は嬉しかった。その理由も開示した。確かに、私の五体を覆いつくしていたマイナス志向が霧消し、自分ながら生き生きしていることを実感していた。

「小さな木の実」は、フランスの作曲家ビゼー

(1838〜1875)の曲を編曲したものである。

ビゼーが二十八歳のとき、「美しいパースの娘」というオペラを作曲した。その曲のセレナーデの哀愁を帯びた部分作曲家、石川皓也が編曲し、その曲に対して作詞家、海野洋司が、誕生した我が子への想いを、切々と叙情溢れることばで表現した。

この歌を、1971年(昭和46)、NHKが「みんなの歌」の番組で「小さな木の実」として放映した。第一回の放映から視聴者に大きな感動を与えたのだった。

以来、この「小さな木の実」という名曲は、普遍的な肉親愛や人間愛をも醸し出し、世代をこえて共有され、人々に受け継がれた。

私は、八人兄弟姉妹の下から三番目として秋田の東成瀬村に生まれ、小学校低学年のときに父が四十九歳で亡くなった。

「父との思い出」は、ほとんどないに等しい。いつでも、たったの三コマの思い出が浮かんでくる。

朝、厳しい顔で水田の見回りから帰って来た場面。食事のとき、分をわきまえず小生意気にもオカズに文句つけた私が、思い切り、父から

シャモジで殴られた場面。父が早朝に脳溢血で倒れ、数時間後に亡くなった場面のみである。

私の生まれた戦前という時代背景や私の育った環境からしてこの「小さな木の実」のように、「パパ」などと言う甘い洒落た響きを持った言葉もないし、まして、「パパと木の実を拾う」場面などは、いくら回想しても、千分の一コマも浮かんでこない。

それでも、毎年、野山の草木の実が熟れるころになると、秋風が想いを運んでくるのか、この歌が激しく思い出されてくる。そして必ず、どこからか、この曲が聴こえてくる。その度に、CDケースから「小さな木の実」を取り出して聴いている。飽く事はない。涙が涸れる事もない。いや、それどころか、年毎に目頭の熱くなる度合い強くなり、落涙する。

悲しいわけでもない。自分でも何の涙か分からない。

父は、仕事が忙しく、妻とその子供たちを残して早世した。この歌が、私の脳のどこかで無意識のうちに「父との思い出」を繋ぎ留め、膨らませ、補完してくれていたからかもしれない。

この歌を聴いていると、年甲斐もなく、滑稽なほど「純な少年の気持ち」が沸々と湧いてく

る。そして、私の五体に、プラス志向が充満してくるのである。

私は、この歌に出会えたことを、とても幸せなことと思っている。

音楽は、人の心の深奥にダイレクトに働きかけ、揺り動かす凄い力を持っていることに、私は今も驚いている。

奨励賞 湯治の道

由利本荘市 坂本愛子

二百万年前、日本列島は母なる大陸から切り離されたばかりの龍であった。生成の苦しみで龍がもがき、あえぐたびに、大地は引き裂かれ、火柱が天を焦がした。

とりわけ龍の背骨付近で起きた大噴火は凄まじく、東日本全体にその痕跡が見られるという。膨大な火山噴出物は、それ自体の高圧と高温に瞬時に固まり、厚さ数百メートルの溶結凝灰岩の一枚岩となった。やがて水の浸食により、深いV字溪谷が刻まれた。その一つが、森吉山北東に広がる赤水溪谷である。

「天国の散歩道」というホームページに惹かれて、赤水溪谷のシャワートレッキングに参加した。ウサギ滝まで四キロの全行程が浅瀬と小滝の連続で、涼しいせいとかやブヨもない。

「天国」といわれる所以であろう。

川底は磨いたようになめらかで、水はくるぶしまでしかない。平坦な石の廊下がしばらく続

いたと思うと、一メートルほどの滝が階を刻み、その先はまた石の回廊である。縮緬状の小波が騒ぐのは浅瀬で、深みはとろりと静まりかえっている。射し込む光を遮って斜めに透かして見れば、淵は意外に深く、水底に小石が一つ囚われていた。わずかな段差に引っかかった石のかけらが、身を削りながら決りつった甌穴なのだ。小石がこの牢獄を出るのは甌穴の底が抜ける数万年後であろうか。水量の割には滝壺は深く、イワナかヤマメか、流木の陰に濃い魚影が重なり合っている。魚が身をひるがえすたびに、薄暗い水底で鱗粉のように光が舞った。

目を上げれば、百メートルを超える岩壁が空を切っている。一枚岩の岩盤は、一切の生あるものを拒絶するように厳然とそびえたっているが、ガイド氏に促されて目を凝らせば、わずかな緑が点在している。あるかなきかのくぼみに舞い降りたタネが、岩の割れ目から滲み出る湧水に、生命をつないでいるのだ。

「コアニチドリです。小さいけれどランの一種ですよ」

とガイド氏。小指の先ほどの花は、花卉の一枚が舌のように伸びて三つに切れ込んでいる。牡丹色の斑点を置いたところは、お稚児さんの

描き眉のようだ。ラン科の植物らしい凝った造形の花である。

沢の出会いで休憩する。目的地のウサギ滝は右沢、左沢はまもなく急な登りとなり、登り切った赤水峠の先は玉川温泉だという。

「昔はこのルートを通して湯治に行ったそうですよ。水量の多いときは尾根伝いに」

ガイド氏が指す崖の上はネズコやキタゴヨウの原生林が密集し、獣すら通れそうもない。

「あんなところに道があるのですか」

「ええ、先週もガイドの下見に行きましたが、新しいナタ跡があって、きれいに刈り払われていましたよ。ゼンマイ採りでしょかね」

ガイド氏はこともなげだが、奥羽山脈へと連なる山塊の、しかも断崖絶壁の尾根である。

森吉山麓の阿仁地区と玉川温泉とは、直線でこそ大した距離ではないが、原生林と深い谷に阻まれて、人間の領域とは思えない。なればこそ、陸路も鉄路も阿仁川沿いに北上し、米代川本流と交わったところで東に遡上、さらに支流の熊沢川を源流まで南下して、ようやく玉川温泉に達するのだ。

「ここは戦前、森林軌道があったんですよ。

阿仁の町を朝一番の軌道車に乗って、今の森吉

山莊のあたりで降りる。あとは川を遡って沢登りか尾根伝いで、夕方には玉川温泉に着いたそうです。ウチの親父も、一番除草が終わると、一週間分の米味噌と身欠きニシンを背負って、村中そろって湯治に行ったものだって言っていました。今も昔も、温泉は究極の『リゾート』なんですわね」

ガイド氏はそう言って、宙に「離離湯」と書いてみせた。

玉川温泉は薬効で知られた湯治場である。

あたりはネマガリダケの大産地で、自炊の食材には事欠かない。北の鹿角、南の田沢は言うに及ばず、山かげの岩手からも人が押し寄せ、湯治客目当ての行商人が馬を引いて商いに来るほどであったという。

だが、金色の午後の日差しを浴びながら、私は思う。

阿仁は言わずと知れた鉱山の町である。大小十あまりの鉱山で町は賑わったが、塵肺に倒れる者も少なくなかったであろう。粉塵を吸い込むことにより肺機能が侵される塵肺は、病状が進むにつれ呼吸困難に陥る。よろめき歩くことから「ヨロケ」と呼ばれ、死病と恐れられた。

屈強の鉱夫がヨロケに倒れ、病みやつれていく。ただ死を待つしかない病人を、家族は奇跡を願って湯治に連れて行ったのではあるまいか。

馬車が牽くのは、病人を乗せた荷車である。

まだ若い病人は畳んだ布団に寄りかかり、久しぶりの光と風に目を細めている。頼りなく揺れる体を母親が支え、父親は木の根に車を取られないよう、用心深く馬を進める。付き添う弟妹は、兄の顔に夕日が当たらないよう、かぶっていた笠を脱いで日差しを遮ってやる。強壯作用があるというタムシバの枝を折り、病人にその葉を含ませるのは姉か、若い妻か。口の中に広がる清涼感に、病人の顔が束の間ほころぶ。病人を連れた家族は、村の一行から遅れがちである。先達が呼ぶほーい、ほーい、というかん高い声が、木々の間を流れてくる…。

「天国の散歩道」が束の間見せた、白昼夢であつただろうか。

森吉山ネイチャー協会、宮野貞壽氏のご教示を頂きました。

奨励賞 観音様を描く少女

横手市 春野 昌和

奥羽山脈真昼山地の主峰の和賀岳（1440M）に私は今まで数多く登ってきた。登山口は岩手側を含めて3箇所あるが、私が頻繁に利用したのは大仙市太田町の真木集落から真木溪谷沿いに薬師岳（1218M）を目指すコースだった。

私が和賀岳に登り始めの頃は、ほとんどの登山者は薬師岳までで折り返し、その先から和賀岳まで歩く人は稀だった。高低差は余り無いけれど、笹やぶと草丈の長い踏跡の不明瞭な県境尾根が続き、行けども行けども和賀岳には迫り着かぬ印象だった。体力的にも厳しく、とても日帰り登山は無理かと思われた。それでも疲れ果てて帰宅し一夜を明かすと、また直ぐ登りたい衝動に駆られるのだった。

私が和賀岳に魅せられる理由は何だったのだろうか。和賀岳はいわゆる百名山でもなく標高とか独得の個性を誇る山でもない。360度の眺望は素晴らしいが、横手盆地は遠く霞んでは

り見える。時には深い谷底からの吹き上がる風を受ける。

和賀岳を横手盆地の雄物川の岸边から眺めると奥深く孤高の山容なのだ。初冬の冠雪や晩春の残雪の光景にその奥深さと近寄り難さが一層強く感じられる。

古来、和賀岳は阿弥陀岳と呼ばれてきたのだった。その山容への思いが昔の人々に崇拜心を抱かせたのだろう。実際に岩手県西和賀方面から眺める和賀岳に懸かる夕焼けは色濃くて、和賀岳がシルエットになると合掌したくなる。

私は若い頃は和賀岳は登山のための登山で体力にまかせて走るように歩いた。その後、高山植物に魅せられ、立ち降りながら散策しながら山中泊を覚悟でそのための用具も携行した。

そんな山行きを始めた頃だった。7月中旬、私は薬師岳から和賀岳へ延びる平原状の草地に群生するニッコウキスゲを見るために和賀岳を目指した。薬師岳で小休止をとったあと、なだらかな平原を歩き始めて間もなく、にわかに流れ襲ってきた濃い霧に包まれてしまった。乳白色の霧は濃くなったり薄くなったりしながら平原をさまようように流れている。

その霧の中でニッコウキスゲの無数の橙色の

灯火がゆらめいているではないか。

勿論、こんなに神秘的で幻想美に満ちた自然現象に遭遇したのはこの時が初めてだった。そして、この時の和賀岳登山で、私は阿弥陀如来の山と薬師如来の山を往還していることの不思議な縁を思わざるを得なかった。昔の人々は山の名前に如来仏の名を伊達に用いたのでもあるまい。深い意味があったのころだろうと思う。私もこの薬師平のお花畑を『観音様の散歩道』と名付けることにした。

この翌年の7月、私はやはりニッコウキスゲの幻想美に憧れて和賀岳を目指した。薬師岳山頂に着くと、いつものように先客が居た。

真っ先に目に飛び込んできたのは大きな画用紙を膝に載せて絵を描いている小学生と美しい少女の姿だった。他には若い男性が居て、私を見て会釈した。少女の父親であろう。

私は親子と別れてニッコウキスゲの群落の『観音様の散歩道』を歩きながら、さっきの絵を描いていた少女のことが気になった。

あの少女は父親にせがんで薬師岳まで伴をして貰ったに違いない。何よりも山のてっぺんで絵を描きたくて、頑張り通して登ってきたので

あろう。絵を描く眼差しが真剣だった。

去年（2016年）10月、大仙市太田町公民館で鈴木空如（1873～1946）の、奈良法隆寺金堂壁画模写絵展が開催されたのだった。金堂壁画で私が真っ先に思い浮べる絵は、一期、通常の郵便切手で評判だった観音様の御顔の絵だ。和辻哲郎著「古寺巡礼」に、「これほど人間らしくて同時に人間離れのしている姿を見たことがない」と表現していた端正な美女の観音様だ。

空如はその観音様が描かれた阿弥陀浄土図を含め、すべての金堂の壁画を模写したのだった。その模写絵のすべてを私は拝観出来たのだ。しかし、皮肉にも空如が模写したあとで、金堂の壁画は焼損してしまった。その結果、この空如の模写絵は現在の再生壁画の重要な基礎資料となったという。

私は郵便切手の観音様と瓜二つの模写絵の奇遇に酔いながら別室に入った。

空如の愛娘豊子のくりくりした眼の遺影や遺品、豊子が描いた絵などが展示されていた。豊子は5歳で東京・日暮里の自宅で死亡したという。『わたしのお寺はどこ？』と言い遺して。

私は会場を退出したあと、近くの刈田の道端に車を停めて東に間近に連なる奥羽山脈をぼんやり眺めてばかりいた。色付き始めた薬師岳が手に取る近さで聳えているはずだが、目の前の杉木立が遮っていた。

空如は和賀・薬師岳登山口の真木集落にほど近い土地の出身だった。彼の墓石も生家の近くにあり、夭折した愛娘のものと並んでいた。

空如の生家の裏側からは薬師岳と薬師平の平原の一部が晩秋の西陽を浴びて望まれた。

ふと、私はおっぱ頭を上げ下げしながら膝の上の画用紙に薬師岳の山の絵を描く幼女の豊子の姿を垣間見る思いがした。私はいつまでもこの西陽の光景と静止したような時間の中に浸っていたかった。私が二十年ほど前に薬師岳山頂で出逢った少女は、今のこの静止したような時間の中と思えば観音様を描いていたのではないかと。

入選 鉄路悠悠

秋田市 鈴木 護

昨年のひとり旅のこと。金沢発、福井行き
の普通列車で、風の盆帰りのご婦人たち十人ほどと乗り合わせた。「どうでしたか？」と聞くと、「上手なのは後から出るのよ」「徹夜よねえ」「野宿、野宿」・・・と、本気とも冗談ともつかない声が飛ぶ。風の盆の説明にはならなかったが、その夜のご婦人集団の様子がなんとなくわかるような気がしてくる。

リーダーらしき人が「青春18きっぷの旅なの」と少し自慢げに言う。若さを誇る気持ちがかもっている。つられて「僕も18きっぷで」と口走り、後悔するが遅かった。「どっから来たん?」「どこ行くねん?」「奥さんは?」などなど、おばさんたちの興味が膨らんで質問の波となつて向かってくる。それでいて、言葉にどこことなく和んでゆく優しさが感じられる。

「秋田知ってるよ!」「角館に行った!」「竿灯見た!」「なまはげでしょう!」「玉川温泉」「田沢湖」などなど、よく知っている。あちら

こちらと旅をしているらしい。互いに「青春18きっぷ」の旅ということが分かって親近感がわいたのと年代が近いと感じたからか打ち解けてゆく。

聞けば特別な団体ではなく、なんとなく繋がった仲間で、毎年どこかへ出かけて十年にはなるという。一時間半、会話が弾む。福井駅で乗り換えのため、前途の幸運を祈り合つて別れる。ほつとするがどこか寂しさもある。姫路、明石、岡山などに帰るというから湖西線に乗り換えるのだろう。僕は、小浜線のホームを探す。

リタイヤから数年経って、ローカル線の列車のひとり旅が好きになった。いわゆる鈍行列車を何回も乗り継ぎをして旅をするのだ。ローカル線で鈍行列車だから、いきおいJRの「青春18きっぷ」と「北海道&東日本パス」が旅の主な移動手段となる。

「青春18きっぷ」は国内全て、「北海道&東日本パス」はその管内で、普通と快速列車ならばどこでも乗り降りができる。一日乗り放題で、「18きっぷ」は連日でも隔日でも期間内であれば、一枚の切符で五日間使うことができる。五人で一日でもよい。「パス」は連続の七日間使用可能である。双方、乗り継ぎの不便さ

はあっても、安価であり、一枚の切符で済むので、時に途中下車して楽しむ、リタイヤのひとり旅には便利で愛好している。

この頃は年齢もあり、私鉄も含め「つなぎ」として特急列車や新幹線を組み合わせての旅にしている。列車本数の少ない地域の移動に威力を発揮して、旅が一層楽しくなった。

僕のひとり旅は、何かを特別に見たいという目的意識は比較的薄いように思う。自分はじつとしているのに周りの景色が車窓を動いてゆく。ぼんやりしていてもいいし、取り留めなく考えているのもまたいい。

計画は、かつて通過しただけの路線を含めて四、五日から一週間くらいで帰れるコースを絞り込み、宿泊地を決める。次に一日十二、三時間ほどを列車や移動時間と決めて、幾通りかの時刻表の案をつくり一覧にしてプリントする。途中下車のできそうな駅の、列車間の空白時間を把握しておく。これが思い付きの途中下車を助けてくれる。小型の列車時刻表を買って、トラブルがあっても対応できるように、必要な部分を分割して「さくいん地図」と一冊にして軽くして持参する。広域にわたる判断は紙面がな

いと難しいからだ。長期の天気予報を調べて、

時期を決めるのも重要だ。荷物は最小限にして
デールバックに入れる。

宿泊地は、普段は通過してしまうような街を
中心に考える。なぜなら、一番の楽しみは宿泊
地の居酒屋での夕食だからだ。ひとり旅は、カ
ウンターのある小さめの居酒屋に限る。大抵そ
こには話し相手がいる。その主人や働く人と
話せるし、土地の人や旅人との対話が生まれる
こともある。

居酒屋で一番大事なのは、味ではない。人の
温かみだ。人の温もりで包むような気持の店に
出会えたら最高である。旅の良さは、その土地
の人々のあるがままが見られるところにある。
それぞれがそれぞれの人生を持っているのを、
丁寧に見て感じるのが旅の心だと思う。僕にとっ
ては風光や名所旧跡は二の次なのだ。

普通列車の旅は、乗り継ぎに神経を使うのと、
なにかの事故に遭遇すると後回しにされる心配
などで緊張を強いられることもあるが、総じて
心豊かな気分を味わうことができる。立派に構
えた人は、まず乗ってはいないから嬉しい。子
供や少年少女、老人は、土地の文化を身に纏っ
ていることが多いから、ローカル色がたまらな
い。心の中の何かが反応する。よくわからない

が郷愁のようなものを感じるのかもしれない。
ボックス席があって、乗り合わせた人といひ会
話ができた時の喜びもまた大きい。

持っている英語の辞書には、トラベルの類義
語としてトリップ、ツアー、ジャーニーがのっ
ている。つまり、少なくとも旅には四種類はあ
るということになる。大雑把に言うくと、トラベ
ルが一般的な一番意味の広い旅で、トリップは、
比較的短い旅行、小旅行、ツアーはぐるっと回
る観光や視察などの往復の旅行など、ジャーニー
は、陸上の割と長い気儘な旅だという。このほ
かに、船・空・宇宙の旅もある。僕の旅は、心
はジャーニーに置き、実行はトリップの小旅行
というところだろうか。

人間には、放浪というか漂泊というか、そう
いうものに憧れるところがある。古くは西行や
芭蕉を想い、近くの山頭火などは今も人気があ
る。世の中が豊かになればなるほど、そうした
心がわいてくるが、すべてを捨てて放浪ができ
るわけがない。ここは金子兜太のいう「定住漂
泊」、家を持って定住しながら、ひたすら「漂
泊の心」を温めるのをよしとすべきだろうか。
世の風潮に流されない「心」を手放さないこと
を心がけるとしよう。

最優秀賞受賞のことば

受賞を受けて

詩部門 堀内和佐

この度はこのような賞を受賞することができ、大変嬉しく、また光栄に思います。

私は現在、能代高校文芸部に所属しています。詩を書き始めてまだ間もないのですが、評価していただけで自分でも驚いています。この場を借りて、ご指導くださった先生に感謝申し上げます。

世界には、誰一人として同一の人間は存在しません。考え方も感性も、そして記憶も人それぞれです。そんな中、私の作品を読んでくださった方々の記憶とがどこか一点で交わり、そして共鳴したのであれば、それは奇跡だと思います。私の作品を読んで何かを感じてくださる方、何かを思い出してくださる方がいらっしゃるのなら、それ以上に嬉しいことはありません。この気持ちを大切に、創作活動に励みます。ありがとうございました。

競う楽しさとともに

短歌部門 大山文穂

県が第十回秋田県芸術祭の一環として初めて文学祭を計画し、短歌、俳句、川柳の作品を募集したのは昭和四十三年であった。この時の短歌部門の応募数は二百一篇で此処五年間の平均の約三倍であった。この年の最優秀賞に当たる作家賞は湯沢の高橋一郎氏、秀逸賞は小生と男鹿の杉山みどり氏、本荘の佐藤重美氏の三人、佳作賞は秋田の佐々木良一氏ほか五人であった。県内作家の名も覚え、競う楽しさに応募を続け、五十一年に「納沙布紀行」で推薦賞。ここで一息と二十年間応募を中断。平成八年から再開、十一年に「甦る湖」で最優秀賞。選考委員期間とその後の二年間応募を中断。再開四年目の朗報となった。今年は四十七年に設立した田沢湖短歌会の四十五周年で、記念の歌集も間もなく完成する予定であり、私にとって二重の慶びとなった。

受賞に当たって

俳句部門 佐々木 豊

私は由利本荘市の子吉川河口近くに住んでいます。海岸は散歩のコースで、散歩中にハングル文字の漂流物などを見掛けます。

今の国際情勢などから、海を見ていると、不安、恐怖、怒り等を感じます。それで、題材は由利海岸を中心に、冬の海に思いを託して作品をまとめてみました。それがこのような賞を頂くことになり、驚きもありますが、心から喜んでおります。

最優秀賞は遥か昔に一度あります。しかし入選等は何回かあるものの、この賞は今回二回目で大変光栄に思います。

私も超高齢ですが、これからも応募を続けて行きたいと思っています。

思いがけない御褒美

エッセイ部門 横山 章子

四年前の入選以来、賞に縁のなかった私にとって、今回の受賞は思いもよらなかった朗報で驚きとともに大変嬉しく思っております。

心の中にモヤモヤと霧のようなものが立ち込めた時や、気持ちが揺れ動く日々が続く時など、その思いを文字にするとホッとします。それは掛け替えのない家族を失った悲しみが今も心の奥深くに潜んでいるからだと思います。

振り返れば、今まで生きてきた中で、私を支え励ましてくれた家族や関わりのあった人達が沢山おります。その中で日常のささやかな出来事を書ければいいな、と思っています。これを機に、さらに自分の思いを飾らず力まずに表現することを心掛け、書き続けたいと思っています。

最優秀賞という素晴らしい賞に推して下さったことに深く感謝いたします。

選 評

小説・評論



3年間を

振り返って

加賀谷 真 澄

今年で審査員を務めて3年目になる。振り返ると、応募作品のテーマは、身近な題材からサイエンスフィクションまで多岐にわたり、いずれもその着想には感心させられた。良い作品には共通点がある。何を表現したいのかを作家が明確に掴んでおり、そこから軸がぶれていないということだ。これは簡単そうだが実は難しい。さて今年は奨励賞、入選、グリーン賞がそれぞれ一作品ずつ選出された。奨励賞の「誰を彼・明か時」は、散文詩を読むようだった。この作品は小説のジャンルに該当しないのではと議論になったが、物語詩や大人の童話として捉えら

れるため、選考の対象とした。短い文が一定のリズムを刻み、反復表現もまた詩的である。シンプルな表現でも不足はなく、不要に飾り立てる言葉もない。ドラマテックにするために過剰さはいらないというお手本だろう。あえて一読者としての感想を述べると、この素敵な青年なら、おばあさんにも敬語で話しかけるだろうと感じた。入選の「螢夏」の主人公は、情性で日々を送る若者。「あんな面倒なもの」と言われる地域の消防団に入ったことがきっかけで、その内面は変わっていく。心理描写が細やかなので、比喻は抑え、心情を直接投影する表現のみに抑えた方が効果的になるだろう。グリーン賞の「静かな生活」の舞台は、未来社会の荒廃した土地。種の遺伝子も操作されている。それらの理由は説明されないが、現状を受け入れている主人公の言葉がいかにも若者らしい。文章は十分練られているが、もう少し物語の展開を見たかった。

以下、他の作品についても触れていきたい。「神様の使い」は、背景の自然環境が効果的に描写されている。消えた少年や、主人公の夢が何を暗示するのか、その解釈を読み手に任せているのもよい。ただ、血縁関係のない二人の心

の動きに説得力が欲しい。「ときめき」は、若き日の恋の思い出が、郷愁を募らせる。語り手が替わり、回想の時代もめまぐるしく変わるため、余韻が残らないのが残念。「大八州豊葦原瑞穂の国」は着想が素晴らしい。中国古典や史実を創作ソースにしていた芥川を思い起こさせる。しかし、文章が不完全に見える部分があるのが惜しい。「ギャンブルにこんがらがって」は、競馬の出馬表がユニーク。欲望に忠実な主人公の内面を掘り下げて欲しい。「旅の道連れ」のキーとなるのは思い出が凝縮された秋田黄八丈。主人公の人生を映し出す装置として上手く機能している。伝聞調や主語と述語の対応関係に修正の必要があり。「昼下がりに生きて」は、少女が周囲の人々との関わりの中で成長していく姿を、ノスタルジーを込めて描いた作品。共感を呼ぶテーマだが、読みづらい箇所が少々ある。「宣教師と赤い自転車とベビーカー」は、丹念に調べた資料をもとに、横手を愛した宣教師を描いた歴史的叙述。作者はこの人物を知り人との連絡を取ったり、ゆかりの地を訪れたりしているため、独自の調査結果も書いて欲しい。また、「私」の気配は消した記述にした方が重厚な読み物になるだろう。「気の抜けたビール」

は、スリラーかホラーのテイストである。十年ぶりの仲間との再会や、カフェの設定が単なる背景となっており、もったいない。「天狗の村」は、現代が舞台のかわいらしく切ないファンタジー。もっと地の文と会話を書き分けること、人物の心の動きに焦点を当てる必要がある。

「おそれのくに」は、怪奇、人情、時代物の要素が盛り込まれた意欲的な作品。しかし、言葉が場面や心情とずれているように感じられた。

物語を書く時、核心部分を言語化していく過程に苦勞しない人はいないだろう。それが上手く表現され、読者に伝わった時の喜びは大きいに違いない。小説を愛する人には、これからずっと書き続けて欲しい。

(秋田県立大学)

選考に携わって

安 藤 巳智子



応募作品は十三篇。いずれも、書き手の「書かずにはいられない思い」と「書き上げる熱意」を十分に感じながら読ませていただいた。まず

は思いを形にしたそのことに敬意を表したい。

選考にあたっては、作中に引き込まれたか、読後に何が残ったかなど、読者としての目線で臨んだ。以下、入賞作を中心に感じたことを述べたいと思う。

奨励賞「誰そ彼・明か時」は、独特の幻想的な世界に誘い込まれる作品である。ゆったりした時間の流れを行間に漂わせながら、とある商店街の時計店でのエピソードが描かれていく。年老いた職人の優れた技と依頼主への行き届いた心配りが伝わってくる。店先で応対するのは、職人の孫の青年。今どきの若者だが、明るくさわやかで、将来への期待も抱かせる。

気になったのは、青年の言葉遣い。全体の丁寧な言い回しの中で、初対面のおばあさんへの砕けた物言いに違和感が残る。意図的なものだったのか、どうか。

行分けやリフレインといった詩的な書きぶりについては、一般的な「小説」の括りでいいのか、選者の間でも話題となったのだが、吟味された言葉で紡ぎ出した文章は、上質で秀逸である。ふと、アンデルセンの『絵のない絵本』を思い浮かべた。読み手それぞれの中に何枚もの絵が描き出されるような感覚を覚える。

入選「螢夏」は、地域に住む青年の日常に切り込んだ作品である。平穏だが変哲のない生活を打破したいと考えていた主人公に、折良く消防団の話が持ち込まれる。突き動かされるようにして団の一員となり、毎日の訓練が始まる。

丁寧な文章で、特に火事の場合は、現場の緊迫感や主人公の必死さがよく伝わってくる。要所所で螢の飛び交う情景と心の動きが重ねられるのも効果的である。一方、日日の訓練と宴会の様子が繰り返し描かれるのは、冗漫な印象を受ける。メリハリが生まれるような工夫がほしいと感じた。

グリーン賞「静かな生活」は、個人的には強く心に入ってきた作品だった。大人や社会に抱く不信任感、束縛がない故の不安感といった心の揺らぎが、無機質的な近未来の風景とともに巧みに描き出されている。

哲学的で難解な言い回しは一つの魅力ではあるが、ややひとりよがり。前半のキャンパスの場面などつかみにくいところもあり、描きたいこと、描くべきことの整理がもう少し必要と思われる。荒削りな感否めないが、可能性を感じる。今後の作品にも期待したい。

「宣教師と赤い自転車とベビーオルガン」は、

応募作品中唯一の評伝。綿密な調査に基づいた力作である。直接取材した箇所をより描き込んだならば、先行資料の枠に留まらない筆者ならではの視点が生きたのではないかと思われる。

「神様の使い」は、情景描写が美しい。姉ちゃんと久夫の関係、二人が一緒に暮らすまでのいきさつなどは、もっと読んでみたいと思った。

全体を通して、書き慣れている印象、文章力の高さが見える作品が多かった。幼い頃の記憶や体験を軸にしたものが複数あったが、時代や状況設定が重なり、作品の独自性が希薄になってしまったように思う。

また、誤字脱字や変換ミスが決して少なくなかった。よく言われることながら、推敲を大事にしてほしいと改めて感じた。せっかく仕上げた作品の本来の良さが損なわれかねない。書き上げた後、自分で読み返すだけでなく、他人に目を通してもらうのもいいと思う。丁寧な推敲を重ねることで、作品の完成度を高めていただきたい。



読者を意識して

六 郷 博 志

この度初めて選考委員になり、その重責に緊張しつつも作品を読む楽しさを存分に味わうことができた。応募された皆さんに感謝したい。

13編の応募作品について、読み手を意識して表現したり伝える思いの強い作品を中心に選考作業で意見を述べた。受賞したのは、奨励賞の「誰そ彼・明か時」、入選「螢夏」、グリーン賞の「静かな生活」の3点。

「誰そ彼・明か時」は、選考で様々な評のあった作品。町の片隅にある時計店を訪れるおばあさんや初老の紳士とそれを出迎える老職人と青年の物語が、夕方と朝の二つの詩の形で語られる。流麗でテンポのよい文章は心地よく、既視感はあるものの、大人の童話のようなたたずまいを持つ作品である。特に、「誰そ彼」のプロットがいい。登場人物たちの象徴する生と死、永遠と今、追憶と忘却などの様々なテーマが想起されてそれがまた楽しい。「明か時」の事件設定や終末の書きぶりなどは作者にとってもおそ

らく未消化であろうところもあり、次作にも期待したい。

「螢夏」は、帰郷した若者が立ちはだかる日常に苛立ちながら、消防団に入ることで生きている実感を取り戻していくという作品。過剰な表現やあざとさがなく、平易で素直な文章に好感が持てる。訓練の描写もリアルで、県内の多くの消防団でこうした出来事があるのだろうと想像できた。終結部での螢の書きぶりも見事だったが、主人公の会話や独白がリアリティに欠け、感情移入がなかなかできない表現が見えられたのは残念だった。

「静かな生活」は、人間の欲望の上限が定められた世界で安住の地をもとめてさまよう近未来小説。表現が闊達で叙述にぶれがない。グリーン賞にふさわしく、これからの創作が楽しみな若手である。短編小説の鍵となる前半が冗長なのが残念だった。主人公の人物設定や場面設定を簡潔に織り込んで後半に繋がれば、よりリズムのある作品に仕上がったのではないかと思う。

賞に漏れた作品について紹介したい。

「神様の使い」は、昭和30年代の子どもの生活がていねいに描かれている。ステロタイプの

人物たちではあるが、「崇志」や「久夫」がテンポよく描写されていて心地よい。時代背景上の鍵になる「清水の姉ちゃん」の歩んできた人生の哀しみや喜びを後半に十分に書き込んでいれば、テーマにもっと厚みが出ただろう。

「昼下がりに生きて」もやはり戦後の田舎での生活を描く。我が子と過ごす昼下がり、主人公が「一番輝いていたかもしれない」幼い日の思い出を滑らかな表現で語ってゆく作品である。

暖かい筆致で表現も豊かだが、キャラクターが月並みでプロットがぼんやりしたのが残念。前半をもっと絞り込むとよかったように思う。

「宣教師と赤い自転車とベビーオルガン」は横手の宣教師スマイザーの評伝。これまでも多く取り上げられてきた人物に迫るべく、彼が残した日記を中心に師を直接知る人々への取材も交えて新たな人物像を探ろうという意欲あふれる作品だった。ただ、話者が筆者に急に替わったり、事実の記述に感想が頻繁に出てきたりしたのが惜しい。

「旅の道連れ」は南国に赴任した夫の後を追いかけて、母から持たされた秋田黄八丈を手にも異国の地での生活を明る筆致で書き綴る。小説ではなく随筆として作品に仕上げたかった。

「おそれのくに」や鳥海山の手長足長譚をアレンジした時代小説。素材は面白いので、時代考証に基づいた主人公の設定やストーリーづくりなどにより、エンターテインメント性を一層高めることができるように思う。

詩

清新の風に

帆を孕ませて



寺田 和子

「あきたの文芸」が始まって五十年目という記念すべき今年、詩部門は昨年に比べて応募者が二十名増え、五十二名。その三分の一が十代・二十代で、とくに十代の増加が著しく嬉しく思った。数が増えただけではない。感受性のやわらかさ、瑞々しさをたたえた爽やかな作品をもって、清新の風に満ちた風を吹き込んでくれた。

最優秀賞 「記憶」

よく練られた構成で、第一連〜第五連の一行目には「例えば」という語が置かれ、様々な記

憶を導きだす。それらの記憶の持つ意味・意義が分かる分からないに関わらず、「全部ぜんぶ大切に抱きしめて／いつか私は／大人になるのか」(最終連)に希望も不安も含まれて余韻が感じられる。

奨励賞 「物言わぬ花」

親元を離れて暮らす子どもから誕生日に贈られた「胡蝶らん」に寄せる思いがしみじみと伝わる。最終連、思い切ってカットしてみてもどうだろう。

奨励賞 「ふりしきる ゆきが」

すべて平仮名で描かれた一面の白の世界。森も、人も、犬の遠吠えも、渡り鳥もその中に消えて、耳にしむのは雪を踏む足音のみ。三好達治の「雪」や、柳宗元の「江雪」の情景を彷彿とさせる。

奨励賞 「八月が遺した」

若い今でなければ書けない詩。「夏」のイメージと体験がもたらす具象。過ぎた八月が遺したものをしっかりと胸に刻んで、新しい秋へ、前を向いてゆこうとする姿勢が潔い。

入選 「晩夏を歩く」

晩夏の夕べの散策風景。やや盛り込み過ぎではないだろうか。もう少し用語に気をつけてみ

ではどうだろう。「閑々」「栄華の残照」などの漢語や、「即成組み立て住宅」「ヒステリックに子を叱りつける声」などの詩にそぐわない言葉を、別の言葉で表すことはできないだろうか。読む人を考えて……。

入選 「まつりの朝」

坦々と描かれる祭りの朝の情景。とくに破綻はないのだが、何だろう、何か物足りないように思うのだ。

入選 「定年の朝」

作者が想い描く「定年の朝」のいろいろ。最終連が「定年の朝」当日であり、その朝の決意が示される。さまざまな朝を想像し得る力に敬意を表したい。

入選 「たくさんのそら」

「名」を尋ねることはその存在を知ろうとする行為である。無知であった「わたし」が次第に知識を得て自己の世界を広げ、果て知れぬ「そら」(宇宙)への憧れを抱いて進もうとする、そのひたむきさに魅かれる。

入選 「心臓ノオト」

初めて読んだ時、「ノオト」は「記録」の意味かと思ったが、読み終えて「の音」であると気づいた。外界との接触によって生じるさまざま

まな思いや緊張に疲れた時の休憩の仕方や、ひとり湯舟に身を沈めて「心臓の音」に久しぶりに耳を澄ます。そうして明日にはまた元気に五感全開で生きていくのだろう。

グリーン賞 「絵本」

幼い日に繰り返し読んだ絵本との再会の思いを素直に綴った詩である。

以上、入賞作品を受付け順に振り返ってみた。総じて、構成もよく練られ、誤字や用法の誤りも少なかった。

長く詩を書き続けているが、「詩って、何だろう」「どうすれば、詩になるのか」。書いても書いても納得できる「詩」に辿りつけないと思うこともある。そんな時、先達詩人の作品を繰り返し読んだり、好きな詩を書き写してみたりする。そして、やはり書き続けることが、「自分の詩」を見つけることにつながると信じて書いていこうと思うのである。

詩誌「歷程」同人

詩誌「密造者」同人

日本詩人クラブ会員

秋田県現代詩人協会会員



多様多感な
詩世界に接して

前田 勉

あきた県民文化芸術祭『あきたの文芸』が今年で五十年目、第五十集を数える。私事で恐縮だが、私はこの『あきたの文芸』の十年目にあたる昭和五十二年(一九七七年)の公募に初応募した。この度、奇しくも『あきたの文芸』の選考委員として、数多くの豊かな感性とその表現にふれることが出来たのはこのうえないよろこびであり、感慨深いものがある。以下、入賞作品についての選評。

・最優秀賞「記憶」

若々しく、故に大人に向けてゆく過程への揺れる心情が見事に表現されている。各連で“例えば”と仮定してゆく多様さはそのまま「有意義なことも／無意味なことも」「全部ぜんぶ大切に抱きしめて／いつか私は／大人になるのか」と問う終連に結び付けてゆく。自身を見つめ表出する作業を、是非とも続けていただきたい。今後になお期待したい。

・奨励賞「物言わぬ花」

贈られた胡蝶らん。やがて花弁は落ちてゆく。
“おまえ”と花とを重ね合わせて想いをうまく
表わしている。

・奨励賞「ふりしきる ゆきが」

ひらがなだけで、しかも行間を開けた書き方。
そして句点を効果的に打つことで、雪ふり積む
静けさをうまく表現している。雪を踏む足音、
沈む音が耳に届くという情景は、自身の存在を
確認する行為である。

・奨励賞「八月が遺した」

第一連の書き出し「わたしの爪 海 ざざー
ん」が強烈に入って来た。夏八月のカラージュ
ーが一枚の絵になって現れている。心の揺れを線
香花火や金魚、波紋として表現する巧さを感じ
た。ただ、「〽今年の夏は雨ばっかだった」と
いう言葉遣いをそのまま詩句として使用するこ
とには違和感が残る。

・入選「晩夏を歩く」

晩夏のある日の夕刻、歩きながら街角の小景
を描く。移ろう時間と情景を出す表現力、語彙
は手慣れており安定感がある。

・入選「まつりの朝」

何とも朗らかで優しい雰囲気表れている。
ここで描く「願人踊り」は井川町今戸地区の祭

典であろうか。祭り当日の昂る気持が伝わって
くる。

・入選「定年の朝」

定年後を想定し、八連にわたってそれぞれの
一日を描く。現実的な朝である定年の日、「本
物の季節の中で」「雪の伽藍と生きる」と言う。
思入れのある初日に違いない。

・入選「たくさんのそら」

各連で一つずつ知識を加えながら「あなたは
なんとこの名なの」と問いかける。太陽、月、
星、流れ星とも読み取ることが出来る。“あな
た”。その混沌を知るために、「わたしはそら
へと旅に出る」のだが、最終連がやや弱い。

・入選「心臓ノオト」

表出されている内情の細かさ、表現が突出し
ている。欲を言えばやや構成力が弱く感じられ
て惜しい。第五連「光の中をきらきら浮かぶホ
コリを観察」という一行と一字下げの第六連の
感性を評価したい。

・グリーン賞「絵本」

読んでいて新鮮な感覚を持った。読み手に十
分伝わってきた作者の発見は、自己の発見でも
ある。書き続けることに期待したい。

応募作品それぞれがそれぞれの世界を持って
いて選考に難航した。詩は、その年齢でなけれ
ば書けない世界というものがある。その時々の
感受性をいかに保持しいかに表現できるのか。
今後とも詩を感じ詩を愛し詩を書き続けていた
きたい。

詩誌「密造者」、「海市」各同人。秋田県現代詩
人協会、日本現代詩人会、日本詩人クラブ各会
員。秋田市。



詩情

大八木 敦彦

ふいに、最初の言葉が届く。風に吹かれてき
た草花の種子のように、あるいは、見も知らぬ
人からの片言の手紙のように。言葉は言葉を生
み、書いているあなたがどこか知らない世界へ
と連れ去る。あなたがあなた自身を忘れてい
る間に、あなたの言葉はできあがってゆく。この
世界へ帰ってきたあなたを、一篇の詩が出迎え

てくれる・・・詩とは本来、そのようにして書かれるものだと思う。書き手がどれだけ忘我の境に入っているかが、詩情の深さになる。

近年になく多い応募作を読んで、特に十代の人たちの作品からは、感覚の鋭さと言葉の柔軟なリズムによる清新な詩情を感じることができた。表現や構成に多少荒削りなところがあっても、原石の魅力として読むべきだろう。

年齢を重ねるにしたがい、誰しも感性は鈍ってゆくものだが、かわりに人生の重みがにじみ出てくる。若い人の作品が湧き出たばかりの水、あるいは搾りたての果汁であるとすれば、その上の世代の作品は熟成したお酒であり、年季が入るほどに香りも高く、味わいも濃くなる。この両者はどちらかが、より優れているというものではない。一生の中で、各々その時にしか書けないものを書き、自らの年代の持ち味を発揮すれば良いのだが、今回の入賞作を見ると、どちらかといえば若手の方に軍配が上がったようである。

最優秀賞「記憶」

人生の入り口に立って、遠ざかりつつある青少年期を振り返っている作者の記憶のモザイク。その一つ一つのイメージが緻密な言葉で鮮明に

描かれている。締めくくりの三行には甘さが残るが、それも若さゆえの甘さとして味わいたい。奨励賞「物言わぬ花」

花は黙っていても雄弁だ。花を贈ってくれた人の言葉にならない言葉も、花はじかに胸の中に届けてくれる。枯れて落ちてしまった後も、花の言葉は残っている。この詩の作者のように、物言わぬ花の言葉に耳傾けられる人は幸いである。

奨励賞「ふりしきる ゆきが」

吐息のような短いフレーズを全篇ひらがなで綴るスタイルが、風景のすべてを白い無音の世界に消し去る雪、という作品のテーマと見事に合致している。若いナイーブさと、成熟した詩情とが共に備わっている。

奨励賞「八月が遺した」

アニメを見るようなイメージの映像と、オノマトペによるリズム感が効果的だ。いかにも若者らしい舌足らずな言葉づかいも一つのスタイルと思われ、特に「いっぱい 生きてる」の一行は忘れ難い。

入選「晩夏を歩く」

書きなれて安定した筆致がうかがえ、落ち着いて読むことができる。一方で、ここに、もし

も不安定な緊張感や破綻が生まれれば、さらに奥行きのある世界が広がる可能性も感じられる。入選「まつりの朝」

簡素なことばづかいによる印象派風のスケッチ。タイトルにもあるように「まつり」というひらがなの表記にふさわしい、明るさと軽やかさが魅力である。

入選「定年の朝」

独自のスタイルを持ち、表現も秀逸で、最後まで一気に読ませる。「一人になる」のリフレインが印象的で、第二の人生の自由と、そのほろ苦い味わいが伝わってくる。

入選「たくさんのそら」

全体の中で、個人的には最も好きな作品だった。作者の詩的感覚は抜群だと思う。ただ、タイトルの「たくさんのそら」は、たくさんのものがあるそら、の意味にはとり難い。「そら」だけで良いのではないか。

入選「心臓ノオト」

日常の風景の中に詩的発見が満ち満ちていることを示す見本のような一篇。普段は意識しない心臓の音にも、耳を澄ませば、あらためて驚きが生まれる。

グリーン賞「絵本」

若々しい感傷の素直さが何よりの魅力。ところどころ散文的な叙述になってしまいうのが惜しい気がした。

なお、今回は残念ながら選からもれたが、「手を見れば」は心に残った。まさしく荒れた手を無造作に突き出しているような作品だが、その言葉には確かに年月の重みを示す皺が刻み込まれている。また、「小さい絵」も、細密な描写の織り成す心象風景が印象的だった。

この講評文のタイトルを「詩情」としたが、詩情は各人の個性であり、スタイルでもある。自分自身の詩情を見つけ出し磨き上げて、次回また応募していただけるよう、楽しみにお待ちしております。

(秋田公立美術大学)

短歌

選歌短評



加藤 トシ子

最優秀賞 「濁流」

・穂孕める稲田浸しし濁流に流れゆくものあれど術なし

水害に遭った様子が、抑制された表現で詠まれ、臨場感がストレートに伝わる。事実を淡々と述べながら、深い余韻を残す。

調べの整った引き締まった作品。

奨励賞 「花梨酒」

・食細き夫とわれとの日ぐらしに捨つる食材増ゆるもあはれ

「病み易き夫」を気遣いながらの、二人の日常を詠う。さりげない場面を、愛おしむように点描していて味わいがあり、ずっと胸に入ってくる。

奨励賞 「晩年 それぞれ」

・三反歩の棚田耕し八十の老がうからの飯米を

つくる

老いがテーマの歌は少なくはなかったが、中でもこの作品は卓越している。

時代の切実な現実を淡々と詠み、リアリティーがある。一人ひとりの老いの人生の、重さと哀しみ、切なさが浮かび上がる。

奨励賞 「家守るかたち」

・跡継ぎの吾のをさな子にゆつたりと添ひ寝す祖母の家守るかたち

時代をくぐり抜けた祖母への、慈しみと追慕の心を詠み、優しさに満ちている。

描写も丁寧で、具体的に真実味がこもっていて、映像が浮かんでくる。

入選 「旅愁」

・水上に暮らす人らの貧しくて檻樓のごとき洗ひもの干す

旅の歌として、情景の捉え方に奥行きがあり、甘くない。鋭い批評性とペーソスを含みながら、旅の印象が鮮明に描写されている。

随所に感性の柔軟さを感じさせる光る措辞があり、とても魅力的な一連。

入選 「平素のまんま」

・身は癌に蹂躪されるも魂は平素のまんま弟逝きぬ

癌に逝った弟を悼む想いが、切なく痛ましく詠まれていて、心にしみ入る。

入選 「『特養』の母と」

・「特養」のめぐりに咲けるあかまん束ねて母のコップに飾る

老いた母と娘の、しみじみとした情感が伝わる。互いの心遣いと仕草とに愛情が溢れていて、読者の心も温かくなる。

入選 「クニマス還る」

・クニマス望郷の念叶いたり乙女の像のまつ田沢湖に

新鮮な発想で、愛情込めて還ってきたクニマスを詠む。

入選 「追悼の席に」

・戦争の足音にわかに響きくる不戦の誓い揺らぐこの年

戦争の過酷を、遺児としての歳月の重みを通して詠み、平和への祈り切なるものがある。

入選 「折り鶴」

・順序よく折り目にそいて女孫たたむ小さき指より生れる折り鶴

折り鶴を通して平和を願う作者に、誰もが共感を覚える。一連の構成に工夫が見られる。

入選 「薄ものの服」

・病院の待合室をみわたせば老いの多くはスニーカー履く

暮らしの中の小さな起伏と感慨が、素直に飾らずに自然体で詠われていて、心引かれる。

入選 「フェリー紀行」

・フェリーにて朝の港を出て行けば暫し鷗の伴走ありぬ

フェリーでの紀行の、明るく平和な一連。

グリーン賞に該当する年齢の方の、投稿がなかったことは、淋しいことでした。

・「かりん」同人・『かりん秋田』編集長

・飯田川短歌会・「寒流」

・県高校文化連盟短歌部門講師

・秋田県歌人懇話会事務局長



選歌寸評

佐々木

勉

最優秀賞 「濁流」

豪雨に見舞われた状況を作者自身の家のこと、

又、周囲に眼をこらして詠んだ七首は緊迫感に満ちてをり引き締まった歌となっている。床上浸水を危うく免れたが「洪水に明けたる昼の暑きなか水漬きし車庫の泥を掻き出す」の歌で容易ならざる状態だった事が想起される。

奨励賞 「花梨酒」

病む夫への優しい心遣いと深い愛情が込められている。「病み易き夫と暮して金婚を迎ふるもまたえにしと言はん」の一首には人生を達観した老夫婦の安息感がただよっているようだ。

奨励賞 「晩年 それぞれ」

七名の晩年の姿を現実在即して個性ゆたかに詠んでいる。作者のよく知る人達なのだろう。作者の他の六名の歩んで来た人生を知り尽くしている故に歌に詠み込まれた内容が深く、そして味わいがある。

奨励賞 「家守るかたち」

生前の義祖母に作者は多用に渡って、いろいろと教わる事が多かったのだろう。その義祖母への尊敬と感謝と追慕の心情が、どの歌にも込められている。在りし頃の家族生活なども懐かしく追想しているようだ。

入選 「旅愁」

アンコールワットで国はカンボジアと判る。

その国を旅行しての眼に映る情景から予想以上に

に貧しい人々の生活を知り作者は唖然としたのではないか。一連の歌にはそのような思いが如実に表白されている。

入選 「平素のまんま」

肝臓癌の弟を最後まで看取り、その前後の様相を克明に歌に表現した。哀切きわまりない一連の作品に作者の慟哭が聞こえて来るような気がする。

入選 「『特養』の母と」

施設に入所の九十五歳の母をひと月ぶりに訪れた作者の詠嘆の七首である。母と娘の暖かな心の交流と涙ぐましいほどの深い絆が表白されている。

入選 「クニマス還る」

絶滅と思われたクニマスが山梨県の西湖で発見、確認された喜びと同時に汚染以前の田沢湖の豊かなクニマス漁を懐古する気持ちを淡々と表現している。

入選 「追悼の席に」

戦後七十二年の終戦記念日の式典に出席しての感慨。戦死した父の面影や遺族として苦難の人生を歩んだ家族のこと等、作者の脳裡に去来する。そして、日本の国の平和を希求してやま

ぬ作者である。

入選 「折り鶴」

幼い女孫が一生懸命に折り鶴を折るいじらしい姿から米国のオバマ大統領までと折り鶴に寄せる作者の豊かな想いが一連の歌に表出されている。情感あふれる七首である。

入選 「薄ものの服」

自分の老の境涯を静かに見つめ、そして有りのままに生きて行こうという作者の人生観が平明な表現のなかから汲み取れると思う。

入選 「フェリー紀行」

フェリーに乗船して旅を楽しむ作者の船上での属目である。七首はどの歌も明るく快い。きっと作者の心が反映しているのだろう。

短歌誌「歩道」同人

歩道賞受賞

にかほ市広報歌壇選者

象潟町短歌会代表

選考を終えて



加藤 隆 枝

今回初めて選考に加わることにになり、応募作六十七編を読ませていただきました。全応募作に目を通し、高齢と思われる方の作品が随分と多いように感じました。と同時に、高齢の方が必ずしも作歌経験が長いわけではないということにも気付かされました。そうした方々にとって、七首まとめでの応募というのは大変なことだったと思います。その大変なことにあえて挑戦し、自身の思いを表現しようとする心意気がとても尊く感じられ、真摯に作品と向き合なればという気持ちで選考に臨みました。一方、優れた作品には、自身の思いをしっかりと伝えるための工夫や推敲、正しい表記が要求されます。研鑽を積むことが大切だと思います。何歳からのスタートであれ、よりよくを目指すことで上達できるのも短歌の魅力の一つだと思います。最優秀賞「濁流」

今年の夏の記録的な大雨と水害を題材にした完成度の高い七首は、「濁流」という題名にふ

さわしく、一連にまとまりがあった。現在形で簡潔に詠まれた一首一首には力強さがあり、緊迫感が感じられ、圧巻だった。

奨励賞「花梨酒」

夫婦二人で暮らす生活の幸いを詠んだ一連は、最優秀作品に次いで魅力的な作品だった。煮物や、茗荷焼きなどの日常の具体的な描写に説得力があり、夫婦の幸せを象徴するような「花梨酒」という題名も効果的だった。

奨励賞「晩年 それぞれ」

地方に生きる現代の老人たちにスポットをあてた作品は、様々な生き方を巧みに詠み込んでいる。最後の一首は上の句の語順を入れ替え、「吾の死後この家に住む人あろうか」の方がすっきりするのではないだろうか。

奨励賞「家守るかたち」

祖母への想いでまとまりのある一連になっており、祖母の生き方を端的に表す「家守るかたち」という題名が魅力的。一首目はルビなしの「祖母」にしたい。実際の関係性をはっきりさせる表記より詩情を重んじたい。

入選「旅愁」

異国の現在を生き生きと伝える旅行詠の一連はまとまりがあり、よく整っている。通り一遍

でない旅行詠の奥の深さに比べて、題名がややあっさりしすぎた感じがした。

入選「平素のまんま」

作者の切実な想いの伝わってくる一連で、臨場感あふれる表現や具体的な描写が優れている。四首目の「癌恐るべし腹太鼓腹」は、大雑把に括って投げ出したような表現が少し気になった。

入選「特養」の母と

母との心の交流が素直な詠みぶりですべてまとめられており、好感がもてた。「特養」は辞書にも出ている言葉で「」は必要ないと思う。

入選「クニマス還る」

テーマ意識をもってまとめられた一連からは、作者の並々ならぬ意欲が感じられた。二首目の「乙女の像」は「たつこの像」か。

入選「追悼の席に」

戦争遺児の作者が現代社会への警鐘を込めて詠んだ一連からは、平和への切実な想いが伝わってくる。

入選「折り鶴」

平和への祈りを込めた折り鶴がどの一首にもきっちりと詠み込まれており、七首全体の構成力もすばらしく、まとまっている。

入選「薄ものの服」

題名にもなっている五首目からは、薄物の服で身軽になると同時に心も軽くなる感じがよく伝わってくる。

入選「フェリー紀行」

題名に添ってよくまとまった一連で、フェリーの進行とともに旅情も増していく。やや常套的な表現が少し気になった。

〔短歌人〕同人。現代歌人協会会員。
日本歌人クラブ秋田県幹事

俳句



俳句は多作多捨

岡部 いさむ

第五十集の俳句部門の応募は八十八作品で、前年より四作品が多く、更に新たに投稿された二十四作品と多く、新規参加の多いことは先が楽しみである。

俳句は多く作り、良い作品は残し、悪いものはどんどん捨てる、多作多捨が大切であり、数

多く作ること得上達に適う。努力を願う。

最優秀賞「冬の花」

飛沫中冬の灯台沖睨む

断崖に追ひ詰められて浪の花

猛るしか術なき冬の拉致の花

日本海の冬の海を題とした作品であり、荒々

しさが滲み出ている。灯台が飛沫に見舞われて

沖を睨む。冬怒濤が断崖に追い詰め白く泡立ち

浪の華を咲かせる。北朝鮮に拉致されて荒海で

抵抗する無念さが滲む。

奨励賞「縄文賦」

寒波急縄文土器に火の匂ひ

煌々と環状列石牙返る

鹿角市大湯環状列石が昭和六年に発見されて

いるが、土器は北の地方に円筒土器様式が発見

されて音の火の匂いが寒波を呼ぶ。

同「太平洋戦争」

赤紙に翻弄されし田植どき

千人針の固き縫玉さくらの実

日本では大東亜戦争と呼称していた太平洋戦

争である。一定の年令に達すれば赤紙と称する

招集令状に千人針縫玉の櫛を掛けて征く。

同「花火」

鎮魂の三尺花火雄物川

戦なき日本の空の大花火

夏の夜空を飾る大曲の花火、三尺玉の絢爛た

る色の夜空を焦がす様は、戦なき今日の日本を

飾り、東日本の大震災の鎮魂を籠める。

入選「秋風挽歌」

握る手の力は尽きし秋挽歌

父の亡くなる無念の挽歌であり、握力がだん

だんと失い行き、終は父の角膜を献体する。

同「夏の田沢湖」

空よりも蒼き田沢湖夏に入る

底知れないと呼称される田沢湖は紺碧の色を

空よりも深く湛える夏の湖である。

同「終戦日」

こもごもにはつとした声終戦日

戦死の遺骨無き帰国の人も終戦にはつとした

顔で安堵の溜息が洩らした思い出である。

同「身籠り」

身籠りの決意の目なり初桜

全体が口語体であり、娘を子と詠むのに抵抗

あるが妊娠の決意の目が効いて入選となる。

同「夏」

眼光の鋭き一手白扇子

将棋か囲碁か一手鋭き眼光で差す。白扇が一

瞬動き、勝ち戦となつて目が柔らかくなる。

同「夏の川」

速報に水位見守る夏の川

七月の豪雨による川の氾濫の洪水であるが、

川に近付くのは危険であるが水位見守る。

同「父と鮎の詩」

鮎掛の自慢ばなしや化粧塩

全体に鮎の詩に適う作品、手作りの竿で鮎を

釣った自慢話の鮎に塩を振りかけ絶味。

同「秋田点描」

夏つばめ奈曾溪谷を逆落とし

象潟の奈曾の白瀑布・はくばくこくは県の指

定史跡であり、夏燕の逆落としも効く。

同「夏から秋へ」

廃校に風の囁く今朝の秋

夏三句から秋四句の展開の廃校の子供も居な

い校舎に立秋の風が囁いて非情を嘆く。

同「秋田湾春秋」

北前船水脈はまぼろし春の湾

秋田湾の歳月の春秋であり、北前船の西廻り

の入港で賑わった今は幻である。

同「駒踊」

変声期越えていなく駒踊

駒踊りを七句揃えた山本郡藤里の藤琴に伝統

の踊りを少年が引き継いでいる。

グリーン賞「含羞草」

片栗の想ふ分だけ俯きぬ

目立たぬも一途に思ふ藍微塵

青春の一ページなり含羞草

片栗は俯いて咲く様子が清楚で、想う分だけ俯き、藍微塵は勿忘草・わすれなぐさで一途に思う。葉にちょっと触れただけで葉を畳む含羞草・おじぎそうは青春の一頁と言う誠に初々しい作品群である。

公益社団法人俳人協会・同秋田県支部会員

秋田市俳句人連盟会長

ぶりこ・明德・大正寺・俳句会主宰



十七音の力

森田 千枝子

いま日本の俳句文化は、国の壁を越えて世界中に広まっている。俳句の本質は、自然に寄り添い、人々の暮らしに目を向けること。十七音に凝縮されたそれぞれの思いは、言葉の持つ力によって大きな感動と共感を生み出してくれ

る。

最優秀賞 「冬の海」

風紋の鱗を纏ひ冬の海

冬の時化ロシア語刻む遭難碑

猛るしか術なき冬の拉致の海

その土地の数多の歴史を飲み込んだ厳しい冬の海との対話。砂浜に内包するエネルギーを「風紋の鱗」と捉えた手腕や「遭難碑」「拉致」などの暗い言葉の裏側に秘めた行き場のない怒りなどを直視した手堅い七句が並んだ。

奨励賞 「縄文賦」

蒼天を飛び交ふ^{やじり}鏃つばくらめ

寒波急縄文土器に火の匂ひ

煌々と環状列石牙返る

縄文時代後期の環状列石が次々に発掘されている伊勢堂岱遺跡。つばくらめを「飛び交ふ鏃」と捉えた感性や「火の匂ひ」「煌々と」など縄文人の世界観を鋭い詩眼で捉えた。

奨励賞 「太平洋戦争」

千人針の固き縫玉さくらの実

戦争ごっこ水鉄砲で立ち向ふ

赤紙に翻弄されながらも、留守を守り抜いてきた家族の思い。同じ轍を踏んではならぬと、作者は「水鉄砲」で人間の非力さを訴える。

奨励賞 「火花」

戦なき日本の空の大火花

老々の介護に聞こゆ遠火花

老々介護という切実な日本の社会構造も、平易な言葉で淡々とその日常を切り取っている作者の柔軟さに好感。

入選 「秋風挽歌」

亡き父の角膜譲る白桔梗

生前に献眼を決めておられたのだろうか。凜とした親子の死生観までが見えてくる。永別の父へ手向ける白桔梗が光を放つ。

入選 「夏の田沢湖」

郭公の声澄み渡るカルデラ湖

水深日本一の田沢湖。湖面に反射した郭公の声が一山を包み込むように澄み渡り、広大な情景を見せる。清涼感溢れる一句。

入選 「終戦日」

こもごもにはつとした声終戦日

ほっとつく一息は、終戦への大きな安堵感と言語統制などの解放感か。その時代を生きた人びとの心中の戦争は永遠に終わらない。

入選 「身籠り」

臨月の髪をきりたり藍浴衣
いざ出産の本番を前に、髪を短めに整えて覚

悟を決める。女は母になりに行く。素肌に馴染む藍染めの浴衣は古今変わらぬ日本の母の色。

入選 「夏」

蛭獲て淋しさを得る少年期

多感な少年時代。作者の繊細な心が相反する二つの感情を捉えて揺れている。叙情性に富む。

入選 「夏の川」

対岸に人動きけり大花火

夜空にひらく一瞬の芸術の大輪と、その音とスケールを見続ける観客との対比が妙味。対岸で、影絵のような小さなシルエットが動いた。

入選 「父と鮎の詩」

小鮎来て笑顔溢るる父の川

清流を遡上する若鮎とそれを待ち侘びていた釣り人である父の喜びが溢れる川の存在。その川を通して一族の優しい時間が透き通る。

入選 「秋田点描」

ほとばしる男鹿の棚田の落し水

男鹿三山を背景に、水路に勢いよく流れて行く水の生命力とそれを守り抜いてきた人々の思いが「ほとばしる」の一語に凝縮。

入選 「夏から秋へ」

秋の蝶縫れて影を零しけり

「影」で負のイメージを思い浮かべるが、こ

の句は実にユニーク。蝶が縫れて油断をした隙に、自分の影を零してしまった。視点が新鮮。

入選 「秋田湾春秋」

秋夕焼け鳥海男鹿を指呼に置き

出羽富士と男鹿半島の夕景は、県内屈指の絶景。光と影の織りなす色彩豊かな大自然の恩恵は、その地に暮らす人々にとって計り知れない。

入選 「駒踊」

駒踊草履とことん飛び跳ねる

若衆の掛け声が、太鼓や笛の音に囃され天空を貫く。「とことん」の措辞に一体感と躍動感。

グリーン賞「含羞草」

片栗の想ふ分だけ俯きぬ

自分の気持ちを相手に素直に伝えられずにいる作者。そのもどかしさや寂しさ、恥じらいまでもが、俯いて咲く片栗の花から伝わってくる。

俳句の「物」に自分を託す手法が効果的。

最後に、今回ご応募された方々に心から感謝

を申し上げたい。今後も末長く十七音に親しまれ、「あきたの文芸」を鍛練の場の一つと捉えて、ご精進重ねられることを願っている。

秋田県現代俳句協会幹事

秋田県俳句懇話会幹事

「麦」同人



「詩」として
の俳句

熊谷 尚

俳句は、何を詠むか（内容）もさることながら、それをどう詠むか（表現）を大事にしたい。表現にこだわるからこそ、たった十七音でも「詩」になるのである。そのことを念頭に置いて、選考に当たらせていただいた。

最優秀賞 「冬の花」

風紋の鱗を纏ひ冬の浜

飛沫中冬の灯台沖睨む

断崖に追ひ詰められて浪の花

実景をしっかりとして写生し、ぶれない堅実な

詠いぶりが秀逸。写生句は、ややもすると単なる報告に終わってしまうことがあるが、掲句はどれもそうではない。「風紋の鱗」「沖睨む」「断崖に追ひ詰められて」などの巧みな比喩表現により、実景を超えた「詩の世界」に読み手を引き込んでいるからである。

奨励賞 「縄文賦」

蒼天を飛び交ふ^{やぶら}鏃つばくらめ

縄文の丘風の丘星飛べり

寒波急縄文土器に火の匂ひ

縄文人の暮らしが確かにそこにあったこと、

その息づかいが現代に綿々とつながっていること

とを、季語が物語っているように感じた。

奨励賞 「太平洋戦争」

青嵐振り向かぬ子を見送れり

千人針の固き縫玉さくらの実

棕結ふ母はいくさのこと言はず

戦後生まれが人口の8割を占め、戦争の悲劇

の実感が薄れつつある中、このような作品が発

表されることには、大きな意味がある。

奨励賞 「花火」

戦なき日本の空の大花火

老老の介護に聞こゆ遠花火

花火師の手を挙げ測る風の向

大景を詠った句、日常のひとこまを切り取っ

た句、丁寧な描写による句と、多彩な句柄が魅

力的な作品だった。

入選 「秋風挽歌」

医師を待つ点滴の音秋時雨

病室の静寂と秋時雨。油断できぬ病状。

入選 「夏の田沢湖」

辰子像に騒立つ波や青嵐

青嵐は、かの「八郎太郎」の化身かとも。

入選 「終戦日」

空蟬や首なし地蔵又触るる

戦争の遺恨に合掌。空蟬がよく効いている。

入選 「身籠り」

臨月の髪をきりたり藍浴衣

母になることへの決意。藍浴衣の艶やかさ。

入選 「夏」

蛭獲て淋しさを得る少年期

この句に流れるセンチメンタリズムに共鳴。

入選 「夏の川」

みづうみの白き砂浜赤とんぼ

平仮名表記と色の対比。レトリカルな一句。

入選 「父と鮎の詩」

鮎鮎に父の優しき糸の張り

鮎の川は、作者の心の抛り所なのだろう。

入選 「秋田点描」

田沢湖は大きな鏡星月夜

鏡の見立てと「星月夜」がマッチしている。

入選 「夏から秋へ」

秋の蝶縫れて影を零しけり

秋の蝶のおぼつかない感じがよく出ている。

入選 「秋田湾春秋」

玫瑰は語らず空襲ありし街

土崎空襲を後世に語り継ぐ「はなますはみた」

(佐々木久春 著)へのオマージュか。

入選 「駒踊」

家を継ぎやがて町継ぐ駒踊

よき伝統を未来へしっかり受け継ぎたい。

グリーン賞 「含羞草」

藤棚の下から眺む日の光

有季定型をしっかり学んでいることがうかが

われ、好感をもった。さらなる活躍を…。

公益社団法人俳句協会・同秋田県支部会員

「狩」同人

川柳



難解句も

楽しもう

荒川 祥一郎

五十五作品の応募に感謝いたします。三選者
で共に厳正に協議しました。作品に誤字脱字等

目立ったのは残念です。

奨励賞 「たんぼ讃歌」

- ・梅雨晴れ間たんぼが咲く母の面おもて
- ・名の由来テポ・タンポポ鼓の音
- ・青空をめざす絮毛を追いかける

一面黄色に染めて咲くたんぼの明るさと家族を重ねた作品。三者ともに好評価。リズム感の心地良さと詩情をいただく。

奨励賞 「がっこちゃこ」

- ・がっこちゃこ笑いの中で北は雪
 - ・家族みな巻きこむ孫の反抗期
 - ・身の回り支えるものに家族の輪
- 家族の日常を平明に定形で表現した作品。読後の明るさにはっとする余韻が広がる。

奨励賞 「やさしい距離」

- ・雨柱 連理の枝が揺れている
 - ・向き合えば緩んだ擁を尻い合う
 - ・偕老の契り重ねてゆく分銅
- 山あり谷ありの夫婦の日常を巧みな措辞と比喩で表現した作品。ベテラン作者と見えます。是非、次回は他のテーマにも挑戦して欲しい。

入選 「日々のうた」

- ・明日あると思って植える花の種
 - ・生きている今がやっぱり花盛り
- 花の種に希望を乗せて日々の心情を詠んでいる。

る。無難にまとまっているが、余韻の広がる奥行きが欲しい。

入選 「寄る辺なき時代」

- ・このままでいいのだろうか海も病み
 - ・少子化へ ドミノ倒しが止まらない
- 今日の世情と明日への不安を表白した作品。新聞の見出しのようにならず、一度体内で消化し想いを乗せて詠んでいる。時事吟への挑戦に拍手。

入選 「弁当の詩」

- ・海苔弁の蓋に張り付く妻の愛
 - ・二日酔い梅干し二つおおくなる
- 面白い題材への着眼に拍手。しかし少し報告句ばいのが惜しい。作者の想いも詰めたらもっと生き生きするだろう。

入選 「大地に謳う」

- ・田植終え無限の空に夢馳せる
 - ・土に生き泣いて笑った日焼け顔
- 剥き出しの湖底だった地を、いま日本を代表する農地に育てたのは拓魂である。日本の農業を支える気構えを力強く表現している。

入選 「強烈なパンチ」

- ・太陽の恵みとワルツする野菜
 - ・自然から貰うパンチの強烈さ
- ありがたい自然も温暖化で強烈な災害をもた

らす。しかし人々は手を取り又立ち上がる。

入選 「若あゆ」

- ・若あゆの命弾んで腕の中
 - ・恋一つ畳んで夏を締めくくる
- 子育てで苦労した頃が一番良かったと後になって思う時がある。思春期の子育ての葛藤から己の将来までの時間軸を展望。意表衝く着眼なのでさらに掘り下げて欲しかった作品。

平明で余韻のある作品の鑑賞は最高だが、難解句は敬遠される向きがある。鑑賞は作者が何を言いたいかと正解を探すことではない。川柳は「未完の詩」と言われている。欠けた部分を読者が経験や知識で補充し、想いを巡らすことが鑑賞であり、余韻を楽しむことと思う。逆に十七字で結論まで述べた作品では読者が立ち止まる余地もなからう。十人居れば十の異なる鑑賞があって良い。そしてその全てが正解と思う。鑑賞とは自由に楽しんで良いと思う。県外を見回すと多彩な川柳作品が競い合っていて。同じ殻に閉じ籠らず、多彩な川柳や難解句の鑑賞にもどんどん挑戦して楽しめば、自ずと秋田の川柳もレベルアップするであろう。

(川柳グループ柳山泊 事務局)



ことばの魅力

藤 咲 子

二年目の選考委員を務めさせていただきました。今年も五十五編の応募作品で、例年と同じくらいでした。

選考会議での選者三名が最初に確認したことは、誤字脱字、そして助詞の使い方などをキチンと見て、ダメなものは採らないと、はっきりさせることで一致しました。でも今年も誤字脱字の多さに驚きとても残念でした。

「次は：次は」と読み進んでみたものの、楽しみの句にはなかなか出会えなかったので残念ながら最優秀賞が決まらず、結果的に今年はこれを見送ることとしました。

奨励賞 「たんぼ讃歌」

・梅雨晴れ間たんぼが咲く母の面おもて

・ありふれて本意じゃなかるその位置はよく研究されており、そのすばらしい感性、安定した表現から実力のある作家と思いました。心がうきうきするような題と句群でした。

奨励賞 「がっこちゃこ」

・がっこちゃこ笑いの中で北は雪

・家族みな巻きこむ孫の反抗期

題名がおもしろく感じられ春を待つて飛ぶ明るさがよく出ていると思いました。素直な作風でとても良い句と感じました。

奨励賞 「やさしい距離」

・曇らない鏡多情を剥き出しに

・雨柱 連理の枝が揺れている

読んでみて、意味はどういう事を言っているのかわかりますが、あと一工夫、言葉をかえるともっとすばらしい作品になるように思いました。全体にまとまっていてベテラン作家とみましました。

入選 「日々のうた」

・生きている今がやっぱり花盛り

毎日の生活を花にたとえており、作りが上手だと思いました。欲を言えば、もう少し抑揚があつたらと考えました。

入選 「寄る辺なき時代」

・あの頃に還してほしい蒼い空

ミサイルなどと物騒なものが飛ぶ時代、昔の良き時代を思いおこしている感じがします。気になったのが「字開けしなくとも良いように思つたところが二、三ヶ所ありました。声を出して

読んでみるとわかると思います。

入選 「弁当の詩」

・二日酔い梅干二つおおくなる

まずユニークな題にひきつけられました。何とも幸せな家庭が絵のように見えて来て、さわやかな気持になりました。

入選 「大地に謳う」

・究極の趣味と言い切る米作り

たぶん田を作っている方の句と思いました。田を愛し苦労した事を素直に出しています。

入選 「強烈なパンチ」

・自然から貰うパンチの強烈さ

どんなパンチが来るのか楽しみにしていました。題に沿ってもっと強烈に、そしてグッとおさえたパンチの句をもっていたらパンチが効いてくるような感じがします。

入選 「若あゆ」

・恋一つ畳んで夏を締めくくる

選者三人ともそれぞれの気持で読み、若い人の句だという方もいれば、女性が生涯生きていくのを読んでいとも言う。今回の句の中でもちょっと変わった題と句だったので考えました。題は「若鮎」と漢字で書いてもよかったかなと思いました。三人のどの人の感があたるかはわ

かりませんが更なる研鑽を期待してみたい作家です。

来年はぜひとも心を揺さぶっていただける句をたくさんお待ちしております。

(川柳銀の笛 副主幹 編集長)



表題との 整合性も

小松 隆 義

図らずも2017「あきたの文芸」川柳部門
選考委員の指名を受け、県内の柳朋諸氏から寄
せられた五十五作品三百八十五句の力作と対峙
する機会を戴いた。

単作での競吟と異なり、七句を一作品とする
当企画では個々の句の優劣もさることながら、
句群と表題との整合性も評価となることを念頭
において選考に当った。

各賞の選定においては、他作品との相対的な
評価での格付けとしたが、就中最優秀賞につい
ては「あきたの文芸」の最高作品として他県へ
の発信にも堪え得るレベルであるか否かの「絶

对的」な評価で決めるべきであろうとの観点か
ら三委員で協議を進めた。その結果今回は残念
ながら最優秀賞に該当する作品は無しとするこ
とで意見が一致した。

率直に言って今年は文芸性の点でいささか低

調気味と感じられたので次回に期待したい。

奨励賞 「たんぼ讃歌」

・名の由来テテポ・タンポポ鼓の音

・青空をめざす絮毛を追いかける

タンポポの名へ鼓の音が由来していたとは初

耳だった。タンポポの活力と奔放さに羨望して

いる自身をリズムカルに表現した。

奨励賞 「がっこちゃこ」

・がっこちゃこ笑いの中で北は雪

・家族みな巻きこむ孫の反抗期

茶飲み友達との四方山話に花が咲く。あきた

の文芸ならではの措辞。孫の反抗期までが話題

になる。素朴な人間諷詠が好い。

奨励賞 「やさしい距離」

・くすり指小さな手錠はめられて

・偕老の契り重ねてゆく分銅

夫婦間の情愛と適度な距離感を詠んで表題と

句群が合致している。暗喩の分銅は夫婦のバラ

ンスを意味して善しだが、手錠はやや誇張気味。

入選 「日々のうた」

・明日あると思って植える花の種

花好きの作者が日々の徒然を詠んでいる。奇

を銜わない詠法に好感。四句目は句群から遊離

した感がある。

入選 「寄る辺なき時代」

・少子化へ ドミノ倒しが止まらない

少子高齢化・人口減少の悪循環をドミノ倒し

だと嘆く社会詠。一字空けは多用すると句姿が

崩れるので要注意。

入選 「弁当の詩」

・海苔弁の蓋に張り付く妻の愛

愛妻弁当。面と向かつてはなかなか言えない

妻への愛情と感謝の念を然り気なく吐露した作

者は戦中派か。男の照れ。

入選 「大地に謳う」

・究極の趣味と言いつける米作り

生業を趣味と言いつける作者は幸せ者。米余

り、猫の目農政にも怯まない入植者の開拓魂が

句群から存分に伝わる。

入選 「強烈なパンチ」

・自然から貰うパンチの強烈さ

忘れもしないうちにまたやって来る天災。時

に理不尽と思える仕打ちも。地球を壊し続ける

人類への意趣返しかも。

入選 「若あゆ」

・若あゆの命弾んで腕の中

幼な児の躍動を腕の中に感じた若い母親。その感動を余すことなく謳った。作品全体に女の歎びが溢れる句群。

終いに選句過程で感じた点を列挙する。

誤字や漢字の誤用。送り仮名の不備。無意味と思える一字空け。振り仮名の乱用（全ての漢字にルビをつけた作品もあり）。明らかな推敲不足。等でした。

（秋田県川柳懇話会副会長 川柳ウイング代表）

エッセイ

選考を終えて



佐々木 義 幸

応募作品数が増えてこの数年で最も多かった

のは、喜ばしい。過去にも応募したことのある作者の作品が三分の二近くあったということからは常連の存在も推測されるし、手慣れた作者による作品だろうという印象を受けたものも多かった。一方で、普段、人に読んでもらう文章を書く機会が少ないためか、作品となる前の素材メモというべき段階にとどまっているものも散見された。

作者一人一人の人生経験や折々の思索、喜怒哀楽の感情などを書き留めたものは、当然ながらかけがえのない貴重なものである。しかし、それらを素材のまま並べただけでは、文芸作品として読者に対し訴える力が不足する。そうした意味で、テーマの絞り込みや叙述の順序など全体の構成、段落の分量といったことにもう一工夫あれば作品の質が格段に向上したはずのものもあったのは、残念であった。

最優秀賞『おじゃれこ』は、幼少期の記憶に残る、地域でのお盆の習俗、特に「おじゃれこ」と呼ばれる迎え火を巡っての家族に寄せる思いを、時間をたどりながらまとめたものである。祖父母の記憶、転居後次女を亡くしてからのお盆への思いの変化、夫婦の子どもが家を離れてからの夫の病勢の増大、現在のお盆の夜の過ご

し方などを淡々と綴ることにより、過度の感傷に流れずに済んでいる。家族の絆や時代の移り変わりへの思いを、一つの習俗を軸として表現した味わい深い作品である。

奨励賞『音楽の力』は、仕事に疲れ切っていた時期に出勤途上で耳にしたある歌に感動を与えられたこと、それを力として生きていく意欲を回復した経験、この歌によって触発される亡き父に寄せる思いが重なり合って一つのテーマとなっている。心に大きな感動と影響を与えてくれた音楽への作者の深い思いが読者にも伝わってくる佳品である。

奨励賞『湯治の道』は、赤水溪谷の「天国の散歩道」という呼び名に引かれてトレッキングに参加した作者の、ガイドの話に触発された想像が後半部の主体である。作者は、この素晴らしい沢登りの道が、農家が玉川温泉へと向かう湯治の道でもあったことを知る。景色の美しさやトレッキングの爽快さだけでなく、塵肺に冒され玉川温泉での湯治に一縷の望みを託した鉱山労働者やその家族の姿にまで思いを馳せていることにより、作品に深みが生まれている。

奨励賞『観音様を描く少女』は、真昼山地の主峰で阿弥陀岳とも呼ばれる和賀岳に登り続け

ている作者の、この山に対する深い思いがベールにある。登山経路として薬師岳を経由するコースをよく利用する作者の見た、幻想的なまでに美しい光景に触発された一種宗教的な想念の上に、薬師岳山頂で見かけた絵を描く少女の姿と、法隆寺金堂壁画の模写で知られる鈴木空如の娘豊子のイメージとが、重なってくる。山に寄せる思いと、登ることにより心に湧き出る様々な想念とを書き込んだ滋味ある作品となっている。

入選『鉄路悠悠』は、退職後ローカル線のひとり旅を好む作者の、旅の楽しみ方がよく伝わってくる作品である。旅行中に見たものを書き連ねるだけでなく、旅をどのように楽しみ、楽しむためにどのような工夫をしているか、などが盛り込んであるので、読者も一緒に旅を楽しんでいるような気分になれるであろう。

入選には至らなかったが、『九十二歳の門出』も心に残る作品であった。水害をきっかけに衰えが進んでいった老母の様子と、目標を得た後は目覚ましい回復を見せたことが描かれている。重点をどこに置くかはっきりさせて全体を構成すれば、より減り張りの利いた作品になったのではないか。

選を終えて



羽田 朝子

エッセイ部門には全部で三十三篇の作品が寄せられ、その題材は個人の経験や家族愛、生老病死、紀行文など多岐にわたりました。それぞれの作品からは応募者の様々な人生、そしてその独自の感受性や思索を見出すことができました。

私が選考の基準としたのは以下の三点です。まず一つは、文章の明確さです。第三者が読んでも理解できる的確な表現を用いているかを最低条件としました。二つ目は、文章の構成力です。ただ漫然と思いつくまま書き連ねるのではなく、表現したいテーマを効果的に読者に伝えることのできる構成になっているかに着目しました。三つ目は、独自の視点や思索が表現されており、それが読者を惹きつけるだけの魅力があるかどうかということです。

最優秀賞の「おじゃれこ」は、作者の故郷である羽後町の盆の迎え火に題材をとり、その風習をめぐる思い出を秋田の郷土色をまといなが

ら語っています。構成がよく練られており、前半は無邪気だった子供の頃の思い出が、後半は亡くした子や最愛の夫との別離が描かれ、悲喜を知り深みを増していく「私」の人生もまた同時に映し出されています。結末に描かれた娘と共に迎え火を見つめる「私」の姿からは、迎え火の風習を守るとともに生死と向かい合おうとする真摯な態度が浮かび上がってきます。

奨励賞の「音楽の力」は、ある一曲の音楽によって心が揺り動かされた「私」の驚きが語られています。その背景には、早くに亡くなった父親への思いや欠落感があったのであり、それを埋める音楽との出会いに感謝する素直な心が表現されています。

「湯治の道」は、赤水溪谷で作者が原生林の先に玉川温泉へと続く道を見付け、昔そこを歩いたであろう湯治客に思いを致します。紀行文をベースにしながら、冒頭には温泉の不思議な力を想起させる龍や大噴火の伝説が、後半には湯治へと向かう病身の鉦夫とその家族の物悲しい幻想が挿入されており、独創的な構成になっています。

「観音様を描く少女」は、和賀岳の登山を続けている「私」が、その幽玄で神秘的な風景に

魅せられるあまり想起した幻想を描いています。

時空が交錯するユニークな構想になっており、「私」は山頂でみかけた少女と秋田出身の仏画師鈴木空如の夭折した愛娘とを重ね合わせ、風景の幻想美を表現しています。

入選作の「鉄路悠悠」は、退職後に自由気ままな鉄道の一人旅を楽しむ姿を描いています。それほどまでに漂泊の旅に魅かれるのはなぜなのか、作者がこれまで歩んできた人生について、想像をよぶものになっています。

今回の選考からは外れてしまいましたが、とくに私にとって印象深い作品だった二篇を取り上げたいと思います。

まず、「父のバイオリン」は、父親の遺品を手掛かりに、若き日の父親の意外な姿を生き生きと想像しています。父親への情愛が窺えるとともに、大正・昭和のメディアの普及により、流行文化が全国規模となった当時の時代背景をとらえたものになっています。

「九十二歳の門出」は、洪水の避難勧告が発令されるなか母を救いに向かう娘の姿から始まり、その後家を失った母の不安と再生が描かれます。子供のように我儘で愛嬌のある母を、心配しながら見守る娘のまなざしからは深い慈愛

を読み取ることができます。

そのほか応募作品のなかには、言葉が足りないがために状況を把握できないものや、言葉は多くても結局何を言いたいのかが明確でないものがありました。読み手は自分を知らない第三者であることを念頭におき、伝えたいことを整理し、端的に表現することに留意することをお勧めします。そして自らの経験や思索を俯瞰し、客観的に捉える視点が必要だと思います。



選を終えて

野口 千恵子

「あきたの文芸」が五十集を迎え、その中でエッセイは三十七集から加わったので、今年で十三年目になりました。私は以前にも何年か審査の手伝いをしましたので、初期の頃はただひたすらに自分の思いばかりを原稿用紙に打ちつけたようなものも多く、読むのに大層難儀をした記憶があります。今年の三十三篇を読んで、エッセイらしく整った作品が多かったことに、この十三年の時の推移と成長を感じました。

「エッセイ」は書き手の顔や心情が作品にしっかりと投影されているのを良しといわれますが、今年の応募者の半数が七、八十代の方といわれていますので、テーマもおのずと、自らの過去をふり返り、今書き残さなければならぬ事柄や、老いに打ち勝ち前向きに生きようという心情の吐露が多くありました。

また、現在の社会状況をしっかり捉えて論じている方もあり、これからの眼の拡がりを予感しました。どんな平凡な主題でもその文中に一つの「山」があると文章が生きいきしてきます。文の構成が大事だと思います。魅力ある作品を期待しています。

最優秀賞「おじゃれこ」は県南に伝わる盆行事を主軸に、祖父母のころの生きいきとした営みから現在までの一家の様子を、淡々とした筆致で描いています。落ち着いた文章で語られる筆者の悲劇は、静かなだけにかえて読者に深い悲しみが伝わってきます。終章の二人で「おじゃれこ」をする一文が生きてます。

奨励賞 「音楽の力」

テーマ、構成、表記すべて良く説得力のある文章に感じます。さすが文筆と深い係わりのある方は上手です。この歌が幼いころ別れた父

上の思慕と重なり、抒情的な一面が加わって一層よくなりました、深味が増したといいましうか。素敵な作品です。

奨励賞 「湯治の道」

森吉山、阿仁など県北の山、特に赤水溪谷の描写が細かくすぐれていて、読み手は筆者にいざなわれて行くような気分です。後半現実的なシーンとなり、厳しい生活が想像され、家族がヨロケの病人を支えて歩く場面は映画を見ているようです。この話で文章は引きしまりました。厚みが増した感動的な作品です。

題が平凡なのが少々残念でした。

奨励賞 「観音様を描く少女」

端正でよく推敲された文章でした。和賀岳に魅せられた筆者の思いがよく書かれています。後半の郷土の画家「鈴木空如」の作品との出合いが文章に張りを持たせています。

空如の幼女の死。山々が仏さまに見え幻想と現実が交錯する空間の中、過去の少女の思い出が筆者に結論を与えてくれたと解釈しました。

入選 「鉄路悠悠」

文章を書き慣れている方のように、過不足ない好ましい表現に感心しました。普通列車に乗って得るものは沢山ありますね。退職後の時間の

過ごし方に旅は最高です。人生後半のガイドブックのようです。

選外の作品にも心打たれるのが多くありました。「それからの心の瞳」K先生との出合い、教師としての悩みなど文章は整理されて上手です。生徒たちとの和解が平凡に終って、これという山がないのが残念でした。「残りの時間」初老の夫婦の何げない会話がほほえましく、終章の夫の「救急車は二回目です」に夫の愛を感じます。大事にしてあげて下さい。「九十二歳の門出」前半の災害の細かな描写は大変いいのですが後半が軽くて残念でした。「秋田ことば喋々保存」音声を出して言葉を保存することには同感です。昔からの風習、古い物、行事など、どんどん捨てられることは悲しい。勿論美しい日本語さえ危機を迎えているのですから心配ですね。筆者は文章を書き慣れていられる方とお見受けしました。「山と母と」筆者の素直な気持がよく表現された佳作です。書くことは、より一層自分や周囲を深く観察出来ます。「さとう家の人々」とつばめ」整った文章。童話にしたら秀逸。

あきた県民文化芸術祭2017「あきたの文芸」応募状況

1 部門別（応募作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
29年度	13	52	67	88	55	33	308
28年度	9	32	72	84	57	24	278
27年度	12	32	56	85	44	31	260
26年度	15	37	71	84	50	21	278
25年度	16	41	73	87	61	20	298

2 男女別

	小説・評論		詩		短歌		俳句		川柳			エッセイ		総数	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	不明	男	女	男	女
29年度	7	6	15	37	31	36	50	38	37	18	—	15	18	155	153
28年度	6	3	11	21	35	37	54	30	38	19	—	12	12	156	122
27年度	5	7	14	18	26	30	46	39	28	16	—	15	16	134	126
26年度	9	6	15	22	34	37	53	31	32	18	—	10	11	153	125
25年度	11	5	14	27	31	42	52	35	40	20	1	11	9	159	138

3 年代別

	総数	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	不明
29年度	308	20	6	7	10	28	52	105	75	5	0
28年度	278	6	7	8	6	11	59	98	72	10	1
27年度	260	13	3	8	7	12	61	96	57	3	0
26年度	278	8	4	8	8	17	62	109	58	4	0
25年度	298	13	5	11	3	17	75	117	47	7	3

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代
小説・評論	1	1	2	0	2	4	2	1	0
詩	16	3	1	6	7	6	8	5	0
短歌	0	0	1	2	4	10	24	22	4
俳句	2	1	2	1	7	11	35	28	1
川柳	0	0	1	0	4	15	22	13	0
エッセイ	1	1	0	1	4	6	14	6	0

4 応募の経験（作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
再	7	24	51	64	45	21	212
新	6	28	16	24	10	12	96
計	13	52	67	88	55	33	308

再…以前にも応募したことがある方

新…今回初めて応募された方

5 月別応募数

5月	6月	7月	計
36	55	217	308

あきたの文芸

昨年度の入賞者と作品名（入選・グリーン賞を除く）

第四十九集（平成二十八年年度） 応募

二百七十八作品

・小説・評論部門 ・詩部門

最優秀賞

佐藤龍一「無理です」

最優秀賞

小林康子「巻き貝」

奨励賞

深町一夫「雨の蝶」

奨励賞

十田撓子「銘度利加」

奨励賞

豊島カヨ子「ん」

・短歌部門

最優秀賞

石田幸栄「春の教室」

奨励賞

貴志白終「八橋伝説」

奨励賞

塚本佐白「川と共に」

奨励賞

千田千佳「穂孕む稲穂」

・俳句部門

最優秀賞

和田千仁「羽後天天」

奨励賞

高橋遙「後三年合戦」

奨励賞

大橋風太「永久の旅」

奨励賞

松井憲一「夏書」

・川柳部門

最優秀賞

加藤藤心「幾曲がり」

奨励賞

谷口心平「歳を重ねて」

奨励賞

小畑寒文「至福どき」

奨励賞

齊藤一輪「希望から天使へ」

・エッセイ部門

奨励賞

嵯峨雄二「終活の旅」

奨励賞

小松紀子「五月の散歩道」

奨励賞

皆川順子「明日に见たい夢」

奨励賞

坂本愛子「マルのこと」

編集後記

◎平成29年度あきた県民文化芸術祭2017
「あきたの文芸」入賞作品集『あきたの文芸
第五十集』を刊行しました。

この作品集は、十五歳から九十五歳までの応募作品三百八編より、最優秀賞作品四編、奨励賞十六編、入選三十二編、二十五歳以下の文芸活動を応援するグリーン賞三編、計五十五編を掲載しております。

◎この事業は、あきた県民文化芸術祭2017の一環として実施しております。応募いただいた皆様をはじめ、文芸団体や広報協力をしてくださった各市町村、報道機関、図書館などの文化施設、さらには、事前審査から選考・校正まで多大なる御協力をいただいた選考委員の皆様には深く感謝申し上げます。

◎「あきたの文芸」は、今年度で記念すべき五十集の発刊を迎えました。今後もより読みやすく親しみやすい郷土を代表する文芸誌として、一層充実させていきたいと思っています。

あきたの文芸第五十集

あきた県民文化芸術祭2017

「あきたの文芸」入賞作品集

平成二十九年十一月十三日

発行・編集

秋田県

(観光文化スポーツ部文化振興課

電話〇一八—八六〇—一五三〇)

共催 一般社団法人秋田県芸術文化協会

秋田県教育委員会

表紙デザイン・挿絵 山本文志
印刷・製本 株式会社三戸印刷所

たくさんのご応募 ありがとうございます！

秋田文壇を見つめて半世紀。
いよいよ、
記念すべき第 50 集を刊行。
詩の応募が増加傾向で
全体数を押し上げました。
厳選された入賞 55 作品を
掲載。

応募総数	308 作品
入賞	55 作品
小説・評論	3 編
詩	10 編
短歌	84 首
俳句	112 句
川柳	63 句
エッセイ	5 編

グリーン賞 3 作品掲載
小説・詩・俳句

文化を
旅する
▶▶▶
ブンカ
の旅は
おわら
ない！



あきた県民文化芸術祭 2017

あきたの文芸第 50 集
平成 29 年 11 月
発行・秋田県（非売品）

photo: Brassac Jocelyne (France)
秋田犬ワールドフォトコンテスト応募作品
design: office ttt 2016 © araya.jp

その花の、
美しさを謳いたい。
そばにいるあなたの、
やさしさを伝えたい。